



TITLE:

「自我機能」と「現象的自己」の
二つの枠組による人格適応の研究：
ロールシャッハ法と自己評価法の
統合的使用を試みる累積的研究(
Dissertation_全文)

AUTHOR(S):

齊藤, 久美子

CITATION:

齊藤, 久美子. 「自我機能」と「現象的自己」の二つの枠組による人格
適応の研究：ロールシャッハ法と自己評価法の統合的使用を試みる累
積的研究. 京都大学, 1967, 教育学博士

ISSUE DATE:

1967-01-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k646>

RIGHT:

「自我機能」と「現象的自己」の2つ^{教育}
の枠組による人格適応の研究 3

ロールシャッハ法と自己評価法の統合的
使用を試みる累積的研究

斎藤久美子

「自我機能」と「現象的自己」の2つ
の枠組による人格適応の研究

—— ロールシャッハ法と自己評価法の統合的
使用を試みる累積的研究 ——

齋 藤 久 美 子

序 論

教育心理学の一部門として存在する教育臨床では、その理論及び実践の両面を通じて、個人の人格適応が中心的な問題となっている。私もこれまで8年以上にわたり、この分野で、常に、この適応の問題を課題として、理論的理解とその実証的研究そして具体的な診断と治療的働きかけの各側面から、これととり組んで来た。適応的人格、健全な(healthy)人格、更に進んで最適な人格(optimal personality)とは、心理学的にどの様なものを指しているのでしょうか。本研究で取り挙げる人格の「適応」概念にかかわる理念を述べるとすれば、諸家により掲げられている数多くのものの中から、¹³⁷⁾ Rogers, C. R. の「十分に機能する(fully functioning) 人格」、Allport, G. W. の「成熟した⁹⁾」(mature) 人格、Smith, M. B. の「最適な人間

的機能” (optimal human functioning)⁽⁵²⁾、そして、
 Freud, S. の精神分析学の基底に存する「深層
 を洞察した心身統一体的自由人⁽⁶⁸⁾」の各考之を
 、代表的なものとして選びたい。そして、又
 、 Maslow, A. H. の “自己実現的” (self-actualiz-
⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾ing) 人格, Fromm, E. の “生産的構えを持つ、
 正常で、成熟した、健全な⁽⁶⁸⁾” 人を志向するもの
 のでもある。結局、本来の心理学的機能が、
 主観的及び客観的な見地で、どの程度自由に
 かっ統合的に発現しつゝあるとみなされるか
 によつて、こゝでの人格適応性⁽⁶⁸⁾は規定され
 るものと考えたい。ではかゝる適応性をとら
 えようとすれば、どの様な方法をとるべきで
 あろうか。その方法の中には、たゞ單に現時
 点での診断に終るのみならず、後の治療的援
 助の段階をも予想してその個人を本当に (real-
 ly) 理解しようとする観念も含まれて来なけ
 ればならない。この様な考之から、私は個人
 の適応性を理解する仕方として、次の様なや
 り方を発展的にとりつゝある。

1) 人格適応の理解にはその個人の内的枠組、即ち現象的自己のあり方をとり挙げる必要があるである。

2) しかし、その枠な「現象的自己」の背後には、こうした主観的枠組を生成せしめる主体的な機能が考えられねばならず、その機能がどの程度健全に発現しているかを、客観的な外的枠組からとらえることが必要である。

3) 「現象的自己」は主体的機能、即ち「自我機能」の最も重要な生成物であり、この機能の客体的反映であると考えられるが、この2つの枠組を相補的にとして総合的に用いる方法を考えることが、人格適応の理解を、より正確にかつ妥当にするであろう。

この枠な私自身の立場から、本研究は試みられた。上記の2つの枠組及び両者の関係についての理論的考察とそれに関する実証的な累積研究を発展的経過の順に一応提示して、現段階までの結果をまとめてみた。

(序 論)

目 次

第 1 編 理論的研究

第 1 部 本研究における 2 つの枠組
とその背景 4

＜ 第 1 章 ＞ 「自我」と「自己」 2 つの枠組の
基本的区別 4

＜ 第 2 章 ＞ 「現象的自己」について 14

(1) その内容及び研究の諸側面 16

(2) その人格内での位置づけ及び適応的意義 32

(3) その形成について 48

＜ 第 3 章 ＞ 「自我機能」について 52

(1) 自我概念発達の歴史的展望 52

(2) 自我心理学における自我概念の 68

まとめ

1) 力動的側面 70

2) 発生及び形成に因する側面 83

3) 構造的側面 88

4) エネルギー経済的側面 91

5) 心理-社会的側面 96

(3) 超自我と自我理想	108
(4) 自我の健全性と適応	113
＜第4章＞「自我機能」と「現象的自己」 との関係について	136
(1) 「自我形成」と「自己形成」について	144
(2) 「自我」と「現象的自己」との構造的 関係について	149
(3) 「自我」と「現象的自己」との機能的 関係について	152
(4) 両者の関係のあり方と適応について	158
第2部 本研究の問題	166
＜第5章＞ 研究目的	166
＜第6章＞ 研究仮説	169
第3部 本研究の方法について	172
＜第7章＞ 対象及びテスト手続	172
＜第8章＞ 「現象的自己」のテスト	173
＜第9章＞ 「自我機能」のテスト	187
第2編 実証的研究	
第1部 質問紙法による「現象的自己」 の分析	208

< 第10章 >	[実験I] 値内訳-291- による N, P 両群 の比較研究	208
(1)	目的	208
(2)	方法	208
(3)	結果の整理と考察	210
(4)	まとめ	210
< 第11章 >	[実験II] (= [実験A]) 新値内訳-292- による N, P, S 群の比較研究	212
(1)	目的	212
(2)	方法	213
(3)	結果の整理と考察	217
(4)	まとめ	229
< 第12章 >	[実験III] 客観的尺度として用いられて いる既成の値内訳 - Barron, F. の "Ego-strength" スケール - による実験	230
(1)	目的	230
(2)	方法	231
(3)	結果の整理と考察	236
(4)	まとめ	243
< 第13章 >	[実験IV] (= [実験B]) 改訂値内訳 -293- による実験及び 値内訳-294- による 構成相関係数多変性の検定	245
(1)	目的	245
(2)	方法	247
(3)	結果の整理と考察	253
(4)	まとめ	262
< 第14章 >	第1部の総括と結論	263

第2部 12-1レシャツハシ法による「自我機能」
の測定 274

＜第15章＞〔実験I〕=〔実験A〕 N, P, S 3群の12-7-24
反の比較 274

〔1〕目的 274

〔2〕方法 275

〔3〕結果の整理と考察 276

＜第16章＞〔実験II〕=〔実験B〕 N, P, S 3群の「自我機能」
の分析 280

〔1〕目的 280

〔2〕方法 280

〔3〕結果の整理と考察 281

＜第17章＞第2部の総括と結論 293

第3部 「自我機能」の全体的な健全性と
「現象的自己」との関係から見た適応的
統合性の研究 296

＜第18章＞〔実験A〕における2つの資料の関係
の分析 296

〔1〕目的 296

〔2〕方法 299

〔3〕結果の整理と考察 299

〔4〕まとめ 309

＜第19章＞〔実験B〕及び〔実験A〕を合わせた
資料の分析 310

[1] 目的	310
[2] 方法	311
[3] 結果の整理と考察	311
[4] まとめ	334

<第20章> 第3部の総括と結論 (本研究の総合的考察)	338
---------------------------------	-----

(あとがき 要約と今後の課題)	371
-----------------	-----

第1編 理論的研究

第1部：

本研究における2つの枠組とその背景

<第1章> 「自我」と「自己」2つの枠組の 基本的区別

「現象的自己」(「Phenomenal Self」)と「自我機能」(「Ego Functioning」)の2つ概念と互に明確に区別して定義することは、従来の理論的研究の歴史をたどってみても必ずしも容易でないことがわかる。自己と自我即ち Self と Ego は、現実にはかなり未分化な混乱した形で説明されており、本邦の文献においても、Self と Ego の訳語が、自己対自我に統一されるとはならず両者が任意に交代して用いられている。しかし、このあいまいさに直接焦点をあて、明確化を試みる研究をいくつか見ることができ、ここでは、それ等の研究を展望し乍ら2つの概念の基本的区別を行い、本研究でと

り挙げた2つの枠組にっこの基本的な概念規定を行いたい。

Allport, G. W.⁸⁾ は彼なりに自我 (Ego) と称する概念と分析して、次の8つの主要な側面ととり出している。

- 1) 知者 (the knower) としての自我
- 2) 認知の対象又は内容としての自我
- 3) 原初的 (primitive) 利己心としての自我
- 4) 優越衝動 (dominance-drive) としての自我
- 5) 心的過程における受動的機構としての自我

これは Freud, S. の解く自我 (Ego) に相当し、本能的衝動、外界の現実、超自我の三者間の葛藤状況において消極的調停の役割を果たす機構を指す。但し、Freud, S. の自我概念の中でこれは、後に明らかにする如く、かなり初期の考えに匹敵するものである。⁵⁵⁾

- 6) 目的追求者としての自我
- 7) 行動体系 (behavioral system) としての

自我

これはゲシュタルト心理学で説く自我に相当し、全体的な行動の場の中で区画凝集されて客体として存在する自我を指す。

8) 文化の主体的体制としての自我

即ち、社会や文化の価値基準の内面化されたもの。

これ等の中で、1), 5), 6), と、2), 7), とは、主体的機能対象体的表象として各々了解されて来るが、丁度、Hall, C. S. & Lindzey, G. が大別している“過程としての自己”(self-as-process definition)と“客体としての自己”(self-as-object definition)の2つの概念が、それぞれに相対するように思える。^{75, p468)} 二つについて Allport と Hall には“ego”と“self”の個人的用法が見られたわけであるが、Hall には、客体としての self と、自己についての態度、感情認知、評価を客観的に示すものとし、又、過程としての self を、思考、記憶、知覚作用等の能動的諸活動から成る執行者(doer)とし

2 いる。Allport の "Ego" の中、3), 4), は第二章の中で述べるが、精神分析学における衝動の面からの説明が可能で、本能衝動から派生し変容して自我機能に役立つ動因となるまでの過程のどこかに位置づけ得る動因と解される。又、8), は同じく精神分析学での超自我乃至は自我理想に対応する面を持つ。但しこの 8) は第三章で述べる理想的自己に匹敵する面をも同時に持つと考えられるのでその真 Hall 氏の述べる客体としての self にも含めて考えることが可能であろう。この様に Ego や self の概念規定に含まれる錯綜した複雑な問題は Allport, G. W. の説 1 つの中にすでに見られる。そうした中で現実に行われて来たことは、Hall 氏の説にも見た様に、用語は別として、客体として存在するものと、主体的機能として考えるべきものの 2 つを区別してとり挙げようとする試みである。それ等の諸説の中には、上記 2 つのいずれかにより大きい比重もかけ論じているものもあれば又、

たにその2つを大別し対照させているだけの説も含まれ、論究の深さも様々である。

James, W.⁹⁰⁾, Mead, G. H.¹¹⁸⁾, Lipps, Th.¹¹²⁾等は意識的体験の方にもしる焦点を合わせ、客体的自己の生成及びその内容の説明に力を注ぎつつ、しかしもう一方に主体的機能を考へあわせていたと云えるであろう。即ち、James, W.は、現象的意識的自己("Self")を、「最も広義に述べるなら、およそ自分のもの(his)と呼びうるところのすべてのものの集まり」として定義し、それを構成要素、自己感情(self-feelings)、自己探究(self-seeking)、自己保存(self-preservation)の3つの側面から論じているがその構成要素のところでは「純粹自我」(Pure Ego)なるものに触れ、それに先験的主体的機能と思える意味を持たせているが、それは、「思考の流れ(the stream of thought)」と結論しているのみである。これは Allport, G. W.の先述した自我の諸側面の中、1)に近いものと考へられる。Mead, G. H.は、客体的自己 me

の形成を社会的観察から、態度、役割の経験
 的とり入れから説明し、この"me"を行動を起
 す上での基準と考えたが、その際行為しつつ
 あるのが主体的な自分"I"である。そして
 このIは行為の瞬間には意識されず、事後的
 にmeの中に存在しうるものであるとした。
 この点に、消極的又大雑把な仕方では、主
 に社会的行為の背後に存する主体的機能と考
 えてゐる。Lippmann も一次的自我、二次的
 自我を夫々、二次的諸自我(Ich)に意味を与
 える根源的作用体と、直接体験される客体の
 範囲とする。たゞ Mead 等とは異なりこの一
 次的自我は、意識体験を行いつつある主体と
 して常にともに意識的に扱われえられと
 してこれを意識的自我("Bewusstseins Ich")と
 も名づけるが、この辺りは本来の主体客体の
 概念が重複してやゝあいまいになつてゐる。
 これに似たものに、Koffka, K.¹⁰⁾の Ego と Self
 があり、彼はゲシュタルト心理学の立場から
 Ego は全体的な経験の場の中の区画されたあ

る領域として蓄積され融合して形成されるものであるとする。そしてこの Ego には意識的領域即ち "Phenomenal Ego" と呼ばれるものと無意識的な領域とがあり。又、Lewin, K.⁽¹¹⁾ の人 ("Person") の標に中心部と周辺部との分比が示され、この中核的部分に "self" と云う名称が与えられる。更に、この標に客体視されてゐる Ego が、同時に緊張体系 (tension-system) として環境と相互作用を行う執行者 (doer) だとしてゐる真がそうである。

これ等の諸論に比して、上記の客体と主体の2側面も互に明確に区別しようとするものに、

Symonds, P. M.⁽¹⁵⁹⁾, Bertocci, P. A.⁽¹⁵⁾, Chein, I.⁽²⁴⁾, Dilgard, E. R.⁽⁸²⁾ 等の理論がある。Chein は、self を内省的自覚 (awareness) の内容とし、Ego を動因-認識構造 (motivational-cognitive structure) を有する執行者とし self を支持し高める働きをするものと見てゐる。これに対し、Bertocci⁽¹⁵⁾ は、用語が全く逆転して、知覚、思考、記憶等複雑な活動と総合的につかさど

る主体的機能と *Self* , 二の *Self* によって知られる主体を *Ego* と称してゐる。そして、*Self* はその基礎に遺伝的条件をも含み持ち、こゝで環境との間に不断の適応的關係を展開させ乍らその個人に独自の人格を生ぜしめるが、環境との交渉を通じて能動的に内在化させて行く社会的文化的な価値基準と *Ego* は主に反映してゐるとする。Bertocci にあつては、この称に、*Chien* と用語が逆転してゐるのみならず、*Self* と *Ego* の各々に附せられた意味の比重も、*Chien* と違つて主体的機能である '*Self*' の方にかけてゐる。Symonds⁽¹⁵⁹⁾ は、*Ego* を、知覚、思考、記憶等の群からなる欲求充足達成のための一連の行動をするもの、*Self* を、自分自身に關する主観的体験のあり方として区別してゐる。そして、*Self* は *Ego* の機能のあり方によってその内容が規定されてくるものでもあり両者間には相互的關係をも考へてゐる。これは、後に第四章でも触れるところであるが、Hilgard⁽⁸²⁾ も同様な着目の仕方をして

いる。即ち彼は、Ego として Freud 派精神分析における如き主体的機能の概念を想定し、その Ego の働きによって生成せしめられる自己像 (self-image, self-picture, self-concept 等の呼称が与えられている。) をこれと区別している。しかし、この自己像の規定に因しては、Ego の無意識的防衛活動による影響を重視して慎重かつ正確であるとする所から、内省的意識的所産としての自己像はとりあらず肉体的資料から推定する“推論された自己” (inferred self) なる概念を提唱している。

とにかく、この標にして、いろいろな研究者がそれぞれの方で、主体客体2つの側面をほぼ区別しようと試みている傾向を見ることが出来る。即ち、Ego-as-process 乃至は Ego-as-doer とでも云うべき主体的機能的名ものと self-as-object とでも稱すべき客体的所産の2つは、一応概念的にまず二大別されて来る。両者の関係は別に後章で述べるとして、私は混乱した用語の中から、2つの側面の中主体

の方に Ego と云う用語を当て、「自我」と云う訳語をそれに対して用いる。そして、主体の方を Self とし、「自己」と云う訳語を当てることにする。この様に本研究で用いる「自我機能」と「現象的自己」とは、上記の如く基本的には二大別される「自我」及び「自己」と云う概念を基底としている。従って、「自己」は、哲学的にはもとより心理学的にもかなり広大な概念であり、例えば Jung, C. G.^{(94), (95)} の "Self" の様に心的全体性 (psychic totality) に向って統合的に機能していくものや, Fromm, E.⁽⁹⁾ や禅の心理学で述べられる "True Self", "the Great Self" 等^{(124), (125)} いう人間の生物・心理・社会学的な総体的可能性を極限的に開発したものの、更にそれが一個人の人間内にとどまらず大自然・宇宙的次元にも登高った概念など相対する規模の大きいものがあるが、それ等と比すれば本研究における「自己」は上記の如くかなり限定されたものである。現段階では一応この様に範囲を限った2つの概念を用

いゝ人格適応の研究と試みた。

＜第二章＞「現象的自己」について

「現象的自己」("Phenomenal Self") は Snygg⁽⁵³⁾, D.⁽⁵³⁾; Combs, A. W.⁽²⁷⁾; James, W.⁽⁹⁰⁾ 等の用語でもあるが、この概念の定義は「自己」に関する諸理論の展望と考察を通じて明確化することにする。

第一章で述べた標的客体としての意識経験的自己に関する研究の「史的至過」については、我国では北村⁽⁹⁹⁾が、その中に上記の「自我」に相当するものをもいくらか混在させ作らではあるが、かなり詳しく述べている。そこでは、1700年代から1800年の初め頃までさかのぼって、連合心理学、作用心理学、ゲシュタルト心理学における各意識的現象及び自己に関する意識的把握の研究、更には哲学の現象学的立場における主観的意識的在界の自然な流れと統一性の研究が「自己」の研究に

重要は関連を持つものとして展覧されてゐる。
 ・又 Wyllie, R. C.⁽¹⁶⁷⁾ は James, W. (1890)⁽⁹⁰⁾ に流れ
 を築し、Calkins (1915)⁽²²⁾ の自己心理学 (Self-
 Psychology) に致つて形を得た後、行動主義・
 客観主義の隆盛によつて停滞し、やがて1900
 年の半ばに近くなり尤もに非指示的心理治療法
 が発達して来るに伴つて再び自己心理学が重
 視されるに至る至過を概観しており、その間
 機能主義者達によつて、内省的方法は捨てら
 れずに来たこと、又、ゲシュタルト心理学に
 よつて現象学的立場が維持され一般心理学の
 中にそれが注入されて行つたこと、そして又
 精神分析学派の中でも主に新フロイト学派に
 属する人々によつて「自己」が重視され理論
 的展開が行われて来たこと等を含めて、結局
 アメリカを中心とした所謂「自己心理学」の
 流れをたどつてゐる。二つとも、むしろ Wyllie⁽¹⁶⁷⁾
 の述べる如き流れに属する形になるが、本研
 究での限定された「自己」の概念に直接的な
 関連性を有すると思われる研究の中から主要

なものも概観することにした。そして、それ等についての整理と考察を次の様な諸観点から行ってみる。

- 1) 「自己」の意味する内容についてはこの様に述べられているか、又どの様な側面から捉えられているか。
- 2) 人格内での位置づけ、適応上の機能的役割についてはどうか。
- 3) 又その形成についてはどうか。

[I] その内容及び研究の諸側面

「自己」の基本的意義については第一章で大雑把に述べたが、個人の内的世界、主観の世界を尊重してそれを一つの研究の枠組にしようとする現象学的接近法を基調としている。

^{153, p59, p78, p111)} Snygg D. & Combs, A. W. は、「個人がいろいろな経験に際して知覚し把握しているところの全現象的場 (phenomenal field) の中で、自分 (I) に関係あるものとして自覚しているすべてのものから成っているのが現象的自己 ("Phenomenal Self") である。」と述べ、又、「現象的自

己」はその個人だけが有している内的枠組であり、その個人が知っている自己そのものである。他人がその個人をどんな風に見ていようと、個人にとって完全な現実感を与える自分はこの現象的自己である。^(153, 179)」と述べるが、第二章で述べた James, W.⁹⁰⁾の考えと照応できるものである。又 Rogers, C. R. も、個人は不断に変化している経験の在界の中心に存在するものであり、この経験の在界即ち現象的場の把握は、必ずしも完全に意識化し盡されるものではないにしても、その個人自身のせいによって行われうるものであり、それこそが、当人にとっての現実にならざる、そこから、自己に関する認知が、次第に me, I, myself として分化して来て自己概念 ("Self-Concept")^(136, pp481-524)を形成すると述べている。

Self はこの様に経験的な現象の場から自分に関する主観的現実として分化生成するものである。しかし、この self に関して、意識化の度合をどの程度に考えるか、又周辺部と中

核領域とを明細化して考えようとしているか
 どうか等については各研究者により差異がみ
 られる。即ちまず前者に因して云えば、かな
 りはっきりと意識され自覚されている「自己
 」のみを考えようとするものに、Stephenson,
 W.⁽¹⁵⁶⁾ の「自己内省」という一つの行動によつてそ
 の人が語る自分自身⁽¹⁵⁵⁾、Stagner, R. の主観的
 な「自己像」(“self-image”)、⁽¹⁵⁵⁾「自己概念」(the
 concept of self⁽²⁴⁾)、Chen, I. のいう直接感知
 され自覚された内容としての「自己」(“Self”
)、Sarbin, T. R.⁽¹⁴³⁾ の認識構造 (cognitive structure
)としての「経験的諸自己」(“empirical selves”
)、Lipps, Th.⁽¹¹²⁾ の先に述べた、直接知覚され
 体験される「二次的諸自己」、Cooley, C. H.⁽²⁸⁾
 Mead, G. H.⁽¹¹⁸⁾ の対社会的関係を通じて学習的に
 とり入れられ形成されるところの、自分を客体
 視した「鏡映的自己」(“the reflected or looking
 -glass self”)や“me”、又 Jersild, A. T.⁽⁹²⁾
 の「その人に知られたその人」(“the individual
 as known to the individual”)つまり内省的

自覚によって対象化された“自己”があり、
 又、James, W.⁹⁰⁾の“自己”も、自己感情 (Self-feelings) 等感情的側面をもとり挙げているところからすれば、単に明瞭な意識のみならず、もう少し広い層への拡がりも予想されるが、先述した如き定義等からは意識面への焦点づけが明らかなのであろう。Lundholm, H.¹³⁾の“主観的
 自己” (“Subjective self”) や、Sherif, M. & Cantril, H.¹⁵⁰⁾の“自我態度” (“Ego-attitudes”) と称する自己評価や社会的価値のとり入れに基づいて生成する客体としての自己、又、Bertocci, P. A.¹⁵⁾の価値の集合体としての客体的自己 (“Ego”) 等は多少その説明が不明瞭で、無意識面とも自ら含めた自己が想定されている可能性とれる箇所もあるが、やはり、それほどはっきり限定されてはいないから、意識化されている自己を指していると言えとっておくべきであらう。又、Snygg, D. & Combs, A. W. の現象的自己は、“自覚 (awareness) のレベルに低いものから高いものまでの中にある”^{153, P58)}とされている

且上記の諸説より詳細な述べ方がなされているが、
 “完全に無意識化してしまふことけない”として意識の範囲にとどめられている。
 (132)
 こうした諸説に対し、明らかに無意識面への
 の松かりを考慮しているものには、Rogers, C. R.
 Symonds, P. M. Hilgard, E. R. がある。Rogers
 の場合は、至験と云うものは彼の概念である
 有機体 (“organism”) の中で瞬間瞬間に生じて
 いるあらゆる事柄であり、それと意識的に感
 知して、象徴化 (symbolize) することによって
 現象的場 (phenomenal field) が生成されるわけ
 であるが、それか全至験を写し出すことは不
 可能ではないにしても常にそうとは限らな
 いと述べる。^{(135), (136)} 自己はその現象的場から分化し
 て来るものである故、従って、明確に意識さ
 れたものである場合もあれば、又、漠然と不
 鮮明な場合更には無意識的な場合もあるとす
 る。故に、現実の自己至験が、どこまで広く
 かつ正確に象徴化されて把らえられているか
 と云うことが重要な問題になるが、当面研究

対象とされるのは常に、歪曲されてそして知覚された (perceived) 自己であり、現象学的接近法を忠実に守る形でかかる自己への焦点づけが行われている。2. Symonds⁽¹⁵⁹⁾, Hilgard⁽⁸²⁾ は意識的な自己像が、「自我」の防衛作用により無意識的に歪曲されてしまう可能性に注目して、意識的にある自己概念を掘いていって、無意識的には反対の観方と自分自身にしているかも知れないこと、又個人が現に有している意識的自己についてそれが防衛的所産であると云うところまでは自覚し得ないのではないかと云った点を論じている。殊に Hilgard⁽⁸²⁾ は先章でも述べた通り、意識的自己像の持つ意味に疑問を提出しており、それは無意識的な要因に規定される面が大きいので、非内省的な資料から間接的に、本当の自己概念を推論すべき点としていっている。その他比較的最近の傾向として、意識的自己のみならず、“投影された自己” (“projected self”^(166, p252)), “知らず識らずの自己評価” (“unwitting self evaluation”^(167, p255))

“基本的な自己概念” (“basic self-concepts”) 等 Lytle, R. C. の云う非現象的な自己 (“non-phenomenal self-concept”^{166, pp250-274}) の操作的実証的諸研究がみられる。

この様に、「自己」に関する諸説には意識的レベルから無意識的レベルに到るまでのいろんな段階のものが含まれており、その中で無意識レベルへの研究と操作的方法を通じて進めて行こうとする一つの流れがある事は確かである。しかし、一方目を転じて、精神分析学の分野でいくらかとり挙げられていた「自己」理論を見ると、その内容については次に取り挙げるが、精神分析理論そのものがそもそもその範囲にして深い無意識に関する研究を詳しく進めて来たものであるだけに、そこで触れられていた「自己」は、無意識的力動性を背景にしていたから、却って意識的に定義されることによつて、理論全体の中での特別な意味が与えられていた。勿論、精神分析学派の「自己」は、所謂自己心理学にくらべると

全体から見た理論的比重が、「自我」や無意識に比しごく軽いものであり又その説明も不十分だと言わなければならないが、この様に、「自己」がむしろ意識的なものと見られているのは興味深いことである。この点については後にも四章でも考察するが、本研究で対象とする「自己」は、上にめた意識から無意識レベルの中では、意識的現象的な自己に限られている。

次に「自己」に周辺部と中核部を考へようとする理論に因しては、⁽⁵³⁾ Snygg, ⁽²⁷⁾ Combs, ^{(135), (136)} Rogers, それに ⁽¹⁰¹⁾ Koffka の場理論的考へ方、更には ⁽⁹⁰⁾ James が挙げられるが、それ以外では、特にこう云った明細化を行っていないものが多い。

^{(27), (53)} Snygg と ^{(27), (53)} Combs によれば、先に紹介した彼等の「現象的自己」の中でよりよく分化しより恒常的な部分から成っているものとして「自己概念」(“self-concept”)を考へている。従って現象的自己がかなり周辺的なものであり、その時々状況によって変動し得るものである。

に対して、"自己概念"の方は、より重要な意味で、「自己」と認知されたものから成っており体制化されている度合の高いものとして考えられている。Rogersも現象的場には因にあたる領域と地になつてゐる部分とかあると述べ^(136, p. 501)、この差異は先にとり挙げた意識化の度合とも対応してゐるが、因的な部分ができるだけ包括的であり現象の「至驂」もありのまゝに受容したものであることが、適意上重要視されている。又 Koffka⁽¹⁰¹⁾の場合、第一章でみえ通り、客体と主体との考え方が比較的未分化であるが、現象的な内部領域を一方「自己」(但し、"phenomenal ego"と云う呼び方がなされてゐる。)と考えておりその中でも中心部と周辺部とか分化してゐて、中心部こそ、客体的自己でも又同時に主体的執行者("doer")でもある"Ego"としての重要な中核をなすものとされている。更に James では「自己」がある階層をなしてゐると考えられており、身体的自己など物値的(material)

なものも基礎とし、精神的自己を最も上層に置いてゐる。又、その精神的自己の中で、知的過程等より欲求や意志決定など所謂力動的な要素に中心的な位置が与えられている。^{90, pp 291-296}

以上の如き中心的・周辺の^しという^し観^し念からすれば、本研究における「現象的自己」はより中心的なものを指しており、その点 Combs²⁷⁾ や Snygg¹⁵³⁾ の「現象的自己」とは異なるものである。

次は「自己」の内容及び研究的観念について諸説を纏めてみる。

Rogers は、「自己」として自覚されてゐるのは、結局、自己の存在 (being) と機能 (functioning) とを指しており、^{136, pp 497-501} 大きく要約すればこの二つにまとめられることになるが、この二つは誤るすと思われるものかもっと詳しくいろいろな研究者によつてとり挙げられている。そのとり挙げ方は研究者により必ずしも組織的であるとは限らず、又詳しくの点でもかなりの差異がみられるが主なものの中からいく

つかとみることにする。James は「自己」の構成要素として3つを挙げているが、1) 物質的自己としては、身体や衣服、家、財産など具体的な所有物に因するその個人の認知の仕方と考へ、2) 社会的自己として、仲間からどの様に見られているかに関するその個人の意識的受けとり方を、3) 精神的自己として心理学的な能力、諸傾向、例えば知性、感覚情緒、欲求、意志などについての自己の特性に因する認知のあり方を考へている。^{90, pp291-296)}

これとや、似通ったものに Sarbin⁽¹⁴³⁾ の1) 身体的自己 (somatic self) 2) 感覚受容器と運動的遂行器 (receptor-effector 又は sense organ-musculature) の「自己」 3) 社会的自己があり、発達の後者程遅く形成されると述べている。又 Stagner⁽¹⁵⁵⁾ も「自己」の内容を成すものに、体格、知能、気質等本来的に備わっている属性とそれに加えて James の2) や Sarbin の3) の様に社会的対人関係を媒介にした対外的評価のとり入れによって作られる自己の

重要性を指摘しているが、この点に對社会的
関係の反映として生じて来る自己内容を重視
する人には Chein や Bertocci 等かなり多くがあ
げられる。Mead 等が論じている如く本来、
「自己」はそのどの様な内容においても對人的
社会的な関係を通しての形成が考えられるわ
けである。従つて、社会的自己に關しての
對人的評価や他人の認知を考慮するといふ
のではなく、ここでは、社会的存在としての
自分のあり方に關する意識を「社会的自己」
の意味するところとした方がより妥当ではな
いかと考える。こうした「自己」の内容につ
いて、2893人の男女生徒学生を対象に自由
記述式の調査を行った結果から詳細な分類を
試みているものに Jersild の研究がある。そ
れは十分系統だったものではないにしても、
内容を大巾に把らえ網羅している。即ち、身
体的諸特性、健康から、衣服、家等物質的な
面、家族・学校での対人関係からもっと一般的
な社会的行動様式や態度、知能、成績及び趣味

味、特殊な才能、宗教、人生観等に因するもの、更に人格特性として、情緒的諸特性や自己統制のあり方等が含まれている。^{92) pp. 22-84)}

本研究における「自己」の内容は上記の広い範囲に及ぶものから出発して、次第に人格の機能的方面に集中する方向をたどっている。

これは中四章でも触れるところであり又、中二編で詳しく示す通りである。

次に、「自己」はどの様な観点から研究されているか又、どの様な側面から問題にされるべきであろうか。これは、次に述べるところの人格における「自己」の位置又はその適応的役割の問題と密接に関連して来るものであるが、「自己」がどう言う側面から重視され問題にされているか、それ等の諸側面をとり出して置く。

自分自身を客体としてみることは畢竟自分を認識的な又感情的な意味において評価 (evaluate) することであると云っても良いのではないだろうか。これは「自己」が対人関係的所産

であることから考えられる。自己に関する
観方 (view) は、常に何らかの相対的評価の
意味あいを含み持つものである。従って

「自己」のあり方として問題になる観念と云
うのは結局この自己評価を基盤にしたものにな
って来る。

まず「自己受容」(self-acceptance) は Rogers^{(135) (136) (138)} をはじめとし
て非常に多くの研究者により「自己」のあり
方の重要な観念として理論的に又治療的実践
において、更に実証的立場から研究されてき
てゐる。これは、現実のありのまゝの自分 (166, p. 61)
“actual self”, “real self”⁽⁸⁷⁾ 又操作的に厳密な
意味では “perceived self”⁽¹³⁸⁾) をとらえて自分
自身が受け容れて観てゐるかに関するもので
あり、微妙な意味あいの違いは存するものの
“自己尊重”とか“自負”(167, p. 40)
“self-esteem”, “self-regard”, “self-respect”^(167, pp. 39-110)
“self-appraisal”^(167, p. 94)), 又“自己適当感”(27), (53)
“self-adequacy”, “好ましい自己感”(“self-
favorability”^(167, p. 40)), “自己満足”(“self-satisfaction”^(167, p. 40, pp. 88-2)

)等に通じるものである。これ等が主観的現象的枠組から問題とされ：“現実的自己”（perceived self）^{169, pp 280-284}，“理想的自己”（ideal self），“他人がみていると思う自己”（‘social’-self），“一般の人々が持っている「自己概念」”（generalized others’ self concept^{169, p 276}）又，“樂觀視した自己像”と“悲觀視した自己像”（optimistic self, pessimistic self^{169, p 285}）等といる。これ等各側面の相互関係とみることによって上記の自己受容のあり方や、自己尊重の程度等が研究されようとしている。

この標に、「自己」がどの程度受容的に評価されとらえられているかということに次いで、多く研究が試みられている観測は、「自己」がどの程度客観性を有しているかと言う“自己客観視”（self-objectivity^{12, p. 349, 169, p. 275-316}）に関するものであろう。これは、他人の観察に基づく資料（この他人や観察法にはいろんなものが含まれてくる。）投影法等自己記述以外のテスト法

から間接に推論される自己像と当人の「自己」報告 (self-reports) との照合によって研究され、殊に、他人による評価や又他人に対する評価と自己評価との関係は、この様な自己像の客観性や、所謂洞察的自己把握の観点からのみならず、“自己受容と他人受容との関係”^(12, p349) や、“社会的望ましさ”^(12, p358) (social desirability) “自己明示” (self-disclosure) 等の問題としていろいろ研究が試みられている。

その他、“自己発達”^(12) 21) 117) 166) 或いは“自己形成” (self-development, self-organization) の問題又、“自己統一性”^(169, pp111-112) (self-consistency), “自己恒常性”^(12, p368, p372) (self-stability), 更に又ごく稀に、“自己の分化”^(93), 169, p113) (self-differentiation) も問題にされている。

以上が、主観的内省的に扱われている「自己」について問題とされている諸側面であるが、その他に先にも述べた様に非現象的な資料により無意識的自己を、防衛性 (defensiveness) の問題として或いはこの自己こそ真に

重要な自己態度 (self attitude) だとして間接的に推論しようとする立場がある。^{(12) (27) (29) (67)}

以上「自己」の内容を成すものと、研究上問題となる諸観点を挙げ若干の考察を加えたが、本研究では、自己評価を主に“現実的自己”、“理想的自己”に関する評価からとり挙げ、それを自己受容乃至は自己肯定の観点と自己把握の正確さ、客観性の観点から問題にすることになる。尚、上述した如き諸観点に基づく具体的な「自己」研究法については後章で述べている。

〔2〕その人格内での位置づけ及び適応的意義

所謂“自己心理学”及びその他自己重視の立場においては、人格理論が「自己」を中心として展開されている。Rogersは「自己」をその人格理論全体の中の中核的概念とし、行動理解のための最も便利な観点が、その個人の^{(135) (136)}内的枠組即ち「自己」に他ならないと述べる。

。 Snygg, Combo も現象的場がすべての行動を規定するものであり、その中で中核的な「自己」は個人の行動に重大な又強力な影響を与えるものであることを力説する。^(27, P.127) その他、
⁽¹²⁷⁾ Jersild, Raimy, V. C. 等同じ観念に立つ人は多く挙げられるが、彼等は皆、「自己」を個人が持つ唯一のユニークな枠組であり「²⁷ 個人にとっての完全な現実 (complete reality) ⁶⁸」を生成せしめるもので、その個人にとり頼りになる判断や行動の基準となり、精神的健康、人格適応上鍵となる働きをなすものであると主張する。
 。こうした系列の人々以外に ⁽¹⁵⁷⁾ Sullivan, H. S. は「自己体制」(「self-system」)なしの人間存在を考へることにはできない⁸⁷⁾と述べ、その他 ^{(87) (88)} Harney, K. ⁽¹²⁾ Adler, A. ^{(67) (68)} Fromm, E. 等新フロイト派に属する人々に、それぞれの仕方での「自己」重視が認められる。更に、正統派精神分析学の自我心理学においても、必ずしも十分的研究が⁸⁷⁾ 盡されてるとは云えないまでもいくつかの理論的実践的研究もこの「自己」に関

してみることもできる。即ち、Idartmann, H.⁸⁰⁾ の“自己表象” (“self-representation”) 及び、自我 (Ego) 組織に属し自我の有目的的な機能にとり重要な方向づけも与えるものとしての“自我興味” (“Ego-Interests”) の大部分意識的かつ「自己」に近いものとして挙げられる他、Schilder, P.^{148) 149)} Fredern, P.³⁷⁾ 等の“自己至験” (“Self-experience”), 殊に Fredern の“自我感情” (“Ego-feeling”), “自我境界” (“Ego-boundary”) 又、Erikson, E. H.^{35) 36)} の“自己同一性” (“Self-Identity”) のそれである。これ等について後章で詳しく述べることにし、ここでは自己に理智的な流れの中の「自己重視の意味を考察したい。

1) まず「自己」は人格全体に統一性を与えるものとされる。

Stagner は“「自己」はその中にうまく統合されない至験を除外して人格全体にある一定の姿傾向性を与える。そして人格の中心として人格全体に安定性を与える”と述べる。Lecky, P.¹¹⁰⁾

も、「自己の統一性」(“Self-consistency”)なる概念を用いて、「自己」の人格全体を個性的に統一しようとする機能を説明して“人が努力する目標は、統一的組織を維持しようとするところにある”としその中核に「自己」と置いている。Rogers, Jerrold 等も説くところであるが、「自己」は自らの統括範囲内にある至験、即ち自らの構造内容と一致した (congruent) 至験はその中にとり入れ蓄積して行くが、自らと矛盾する至験はそれを排除し意識化しない。これは Sullivan⁽¹⁵⁷⁾⁽¹⁵⁸⁾ の“選択的無関心” (“selective inattention”) であり、又 Combo と Snygg の“外界認知の選択と歪曲”である。この作用によって、その時々外界の状況とは独立した、およそ一定した「自己像」や「自己感情」を存続させようするのであると述べられている。このことは、必然的に

2) 「自己」の恒常性乃至は持続性と可変性の問題につながって来る。

Snygg と Combo に依れば、「自己」は、①本

定した持続性 (stability) と ② 可変性 と言う一見相矛盾した2性質を有するものである。^{153, pp83-96)} そしてこうした2性質の背後には, Snygg, Combo, James, Jersild, Lecky 等の述べる, “自分自身の「自己」を維持しかつ高めたい” と言う基本的欲求 (basic need) ”又, “自己開発 (self-seeking), 及び自己保持 (self-preservation) と云う基本的欲求” が考えられている。^{90, pp307-308)} 従って「自己」を維持し存続する傾向は, 先述した統一的作用と Snygg, Combo, の説明する^(153, p85) “あらゆる組織体が持つ一種の慣性” によるものと結論されるが, それのみならず, 一面変化する性質のものであり, 発展的成長的な方向への可変性として, 「自己」のもう一つの性質が論じられ, “行動の变化, 人格変化を起させるには, 自己概念の変化を生ぜしめるのが最も効果的でつとり早い”⁽¹¹⁰⁾ ことになる。ではこの変化はいかにして生じるか。それは, “社会から期待されている自己のあり方と現実の自己との違いを自覚することにより

又、自己にとって異値的な至験を敢て受容することによって起る。^(150, pp 92-93)” 又より詳しくは、“「自己」が自分に合わないとして至験を意識から除対している状態、即ち不一致の状態 (incongruency) にある時には生じて来る不安も一つの信号 (signal) として受けとり、その不一致そのものを自覚することから、その至験の受容を果し、意識に象徴化 (symbolize) して「自己」の枠を^(136, pp 104-15)広げる” という形で生ずるのである。

これは右義の学習と成熟の過程として考えられるであろう。しかし、かゝる成長的な「自己」の変化は決して容易に生じるものではなく、もう一つの特性である存続傾向が、この変化によってブレーキに力になっており、かゝる変化に抵抗しそれをも強く防ごうとして発達させるのが、いわゆる防衛型である事も述べられる。

3) 「自己」は上の二性値を担いながら、人格の中心に位してその行動に指針を与えるガイドとしての役割を果している。即ち、個人は

自らの「自己」を唯一の枠組とし基準としてすべての行動を、或いは少なくとも努力して行こうとする大切な行動のすべてを起す。⁽²⁷⁾（「自己」によらないで起す行動に言及する自己研究者もいるが、それ等の行動はおおむね周辺的なものと考えられている⁽¹⁵⁰⁾か又は、その個人にとって脅威や不安を与える標本有機体的反応と考えられる。）従って行動全体にある統一的な一貫性のある姿を与えしめる。しかも、たに単に指針を与えるのみならず、“行動もその方向に向けて統制し、かつ活性化する（energize）。非自己的動因よりも、一戸効果的に行動を導く（*motivate*）⁽¹⁵⁰⁾。”として二の標に自己を維持存続させる方向のみならず、更に、「自己」をより高め開発させていく方向へも個人を動かしているのである。そして、

4) 人格の適応性と「自己」のあり方との関係は次の標に結論づけられている。

^{27) 92) 110) 135) 136) 153) 168)}
 Rogers, Combs, Snygg, Jersild, Lecky等の説をまとめると、人格の心理学的適応にあって

あるべき「自己」の姿としては以下の様な事項が要求されることになる。

① まず、現実至験がすべてできるだけありのままに認知され、意識から排除されないこと。即ち、過度な防衛がなく常に新しい至験に対して開かれており、現象的場自体においても「自己」が、ありのままの自分をできるだけ洩れなく正確に写し出していること。

これは換言すれば、自己客観視、洞察的自己把握の問題であろう。Rogersによれば、有機体 (organism) の感覚的、臓器的至験の中で、現在の「自己」組織とそのま、一致しない至験をも知覚し吟味して、意識への象徴化 (symbolization) ^(36, p. 515) が包括的に正確になされることであり、有機体の至験と「自己」との不一致によって生じる脅威 (threat) や不安が処理されうることにあたる。Gross, L.⁽³⁷⁾ は自己の洞察的把握 (insight) を、⁽³⁸⁾ “それを受け入れることが情緒的に抵抗をもたらし、又自尊感情に反するものであっても、自分の中にある特

性又同時に欠けている特性をも意識に許容することである”と説明している。又二の自己客観視に関しては、Allport⁶⁾⁹⁾や Adler¹⁾²⁾等もその重要性を論じている。

② その様に意識的に象徴化された至験が「自己」とできるだけ一致しうる標本、なにか柔軟性を有した「自己」であり、そういう「自己」が全体として受容され、肯定的に価値づけられていること。

これは、自己受容、自己尊重の問題であり、これは「自己」のあり方として、適応上最も重視されている点である。Rogersの“十全に機能する人”¹³⁷⁾、Combs²⁷⁾等の“適当な(毎日の)人柄”(adequate person)の不可欠な条件としてこれを挙げているのはもとよりであるが、

Jerrild⁹²⁾も、①及び②は、現実の自己が有する潜在的資質を発達させ、生活全体に調和した統合的な形で個人がそれを用いることを可能ならしめるものであり、健全な自己愛、自己受容は精神的健康にとって不可欠な条件だ

とする。その他新フロイト派の ⁸⁷⁾Harney は、神経症が補償的に形成している“仮幻の自己” (idealized self 又は pseudo self) をとり除き、ありのままの自分に直面させ、“真実の自己” (real self) の成長を促進することをも治療理論とするが、そこで、ありのままの現実の自分に対する尊重の念を重視している。又 Adler も自分の状況を正しく評価し認識することから優越・重視を求める努力と生産的に発現させて、劣等感情を克服し自信 (self confidence) を得る方向に動いていくことも適応的成長とみている。^{1) 163)} これ等は、この自己受容、自己尊重の問題に関連づけられうるだろう。

③上の自己受容の中に社会性の問題が附加される。即ち、次にも見る通り自己の形成を考察すれば、自己の中にはすでに対人的社会的要素は包含されているわけだが、「自己」がただその個人のユニークな枠組であるのみならず、それが本来社会に向けて開かれたものであることが、ここで再確認させられる。即

ち自己肯定が、単に孤立的個人の枠内に止まるのではなく他人と共存する社会的存在としても、好ましい価値のある人として肯定視されていることがそれである。²⁷⁾

これ等の3要件に纏められるものを「自己」が備えていることに人格の適応が帰せられており逆に人格の適応は「自己」の中にこの様な形で反映されているとも云えるわけである。上の3要件中最も多くの人々によってとり挙げられ理論的実証的研究の積まれているのは②であり、③を特別にとり挙げている人は最も僅かである。又④に関しては実証的研究が自己心理学の枠内ではもう一つ充実した形で行われておらず、方法的にも狭く限られた点や無理があつて適応との関係が実証されにくいことは *wylie*^{162) 275-279)} も指摘すると二つである。しかし、④のみならずこれ等①及び③も大切な要件であることは、後の第3章及び第4章における考察を通じて次第に明らかになり、これ等も含めることによつてよりよく理

解される。

以上、「自己」の人格内における位置とその適応的意義について諸説を参照し乍ら考察したが、要約すれば、「自己」は個人の行動における唯一の現実的枠組として、人格の中で最も重要な位置を与えられ、特に自己心理学においては、「自己」は中核的な座に云わば君臨しているとも云え、人格全体に統一性を与えるときともに、その持続性、可変性の鍵を握るものであり、行動全般のガイドとしての役割を果たすとみなされている。そしてこういう働きを効果的になしうるための「自己」のあり方についても述べた。即ち、客観性、受容的肯定的価値づけ、社会的適応感が、そのための主たる「自己」の要件となって来るのである。

この様に「自己」の重要性がかなり詳しく論究され、全体としての意味は理解できたが、たゞ、これ等が正常な或いはそれ以上に健全な適応機能の方向にのみ志向されすぎている

嫌いがあり、不適応的方向へのもっと突っ込んだ考察がほしい気がする。即ち、例えば、「自己」の持続性、可変性の問題に因しても、不適応的「自己」に固着せざるを得ない様な閉鎖性、又可変性について、後退的な変化の起る可能性、むしろ後退することによって寧ろ安定を保つより仕方がない様な状況についての考察なども必要ではないかと思える。この点、本研究では、自我心理学の面から、この方向への理解を補うことにする。

〔3〕その形成について

「自己」の形成については、かなり大雑把乍ら、自己心理学的説明がなされている。

まず、「自己」の源も先天的に求めるのではなく、対人関係を通じて発達する社会的経験的所産と考^{(12) (92) (125)}えている。そして、乳幼児期における養育者 (mothering one) との関係の重要性を至極から、その後の対人関係の拡大及び深まりを通じて、社会的文化的環境の学習とともに

に形成されるものだとする。勿論、その他に生れつきの素質も無関係ではなく、更にその素質の発達がかかわって来るとの考え方も含まれており、例えば、*Jerard* は知覚、想像力、概念化、価値の評価等の諸能力とその発達も、「自己」の発達を規定する諸要因だと述べる。しかし、社会・文化的環境との相互作用がもたらす影響力の方をより大きく考慮するのが全般的傾向である。この様な観点で、自己概念発達のための重要な基盤やその大雑把な過程に關しては次の様な考察がなされている。まず、「自己」発達の大切な基盤となる時期は乳幼児期の前言語的段階 (*pre-verbal stage*) に始まる。⁽⁴³⁾ 身体的経験がそれであり、他の人の体と異なった自分の体の認知、身体像 (*body image*) 或いは身体的存在としての自己概念 (*a conception of his physical person*) がその出発点となり、これが自他の区別の⁽⁴⁷⁾ けいまりとして重要な意味を持つ。この様に前言語的段階ですでに自己概念の形成が開始

されていることは、子供の行動から、子供自身
 が自分で何かをやり遂げた時に喜びの表現
 を観察できること等から確かめられると述べ
 ている。^(12, p345)その後言語が発達するにつれ、「自
 己」形成は進むわけであるが、それがどの程
 にして行われていくかについての典型的図式
 とも云うべきものが、最初の重要な他人 (sig-
 nificant other) 即ち養育者との関係に見られ
 る。子供の行う自然な欲求表現は養育者によ
 って必ずしもすべて受け容れられるとは限ら
 ず、“良い”(good) 或いは、“いけない”(bad)
 のいずれかに分類される。“良い”としてく
 れる時の養育者は“良き母”，そしてその時
 の自分は“良き私”(good me) となり、こ
 れは是認と優しさの至極、換言すれば所謂“
 ユーフォーリア”の状態でもある。これに対し
 “いけない”とする養育者は“いけない母”，
 その時の自分は“いけない私”(bad me)
 となり、この方は、否認と緊張・不安の至極
 である。^(12, p345)これは、Combs⁽²⁷⁾によれば、“適当さ”

(adequacy)の至験。“不適当さ”(inadequacy)の至験となる。この二つの両極的至験が Sullivanの云う安定への欲求(security-need)に結びつき、「自己」形成、人格形成の全過程を貫いて行くことになる。^(158, p6)特に前者の至験は自己発達の母体となる重要なものである。これに対し、後者は、前者に対してこれの対置されることか、自己形成に不可欠な意義を持つものであるが、前者に比してこちらは意識化を拒否される傾向がある。そして又、その至験が再生されることも仲々困難だと説明される。これ等が先にも述べた“選択的無関心性”であり、⁽¹⁵⁷⁾⁽¹⁵⁸⁾“意識の分離(dissociation)”である。この二つの作用によって「自己」は一応の安定を得ているのである。

この標に「自己」は、養育者及びそれ以外の人々をも含めた家族内の人間関係、近隣-学校-社会等の諸集団における友人同僚から年長及び年少者そして異性等との様々な人間関係を通じて、身体的又心理的な成熟の過程に

沿って段階的に形成されて行く。現段階がどれ程望ましく充満した形で成就されるかにより次の段階における成長が規定され、その意味で乳幼児期など極く初期の対人関係のあり方は極めて重視されている。^(27, pp134-144) (但しこの点に關する詳しく深い理論的掘り下げは主にネオフロイディアン等精神分析学派の領域になる⁽¹⁶³⁾⁽¹⁶⁴⁾。)結局、「自己」の形成は素質的特性やその発達に規定される面を無視することは許されないが、対人関係を通じての社会的文化的価値づけにより、次々肉づけされる形で進んで行くものとして理解される面が大である。

以上、「自己」について、その研究に關する全体的な歴史の流れ、「自己」の内容及び理解の諸観見、人格内の位置づけ及び適応的意義そしてその形成の各問題点から諸理論をまとめて考察した。本研究で「現象的自己」と名づけた概念は、各箇所での意味内容を規定した通りであるがもう一度まとめて見るとい

下の通りである。

まず、「現象的自己」という呼び方は、これが James に始まる歴史性を有した一般的な用語であることから採用したものであり、この語を用いている幾つかの研究の中特にどれかの理論・概念規定をそのまま、当てて用いたものでない。

意識化の度がかなり高く、かつ周辺的よりは中核的であるところの、自分自身に関する平均的な自覚のあり方をこの「現象的自己」は指している。これに含まれる内容は、結局その個人の存在 (being) 及び機能 (function) 全般であるが、次々に人格機能そのものについての自覚のあり方に焦点をける方向に研究を進めた。又研究の観念としては、[2] で述べた如き適応的意義を問題とし、「現実的自己」「理想的自己」の二つから自己評価のあり方をとり挙げ、これを自己受容乃至は自己肯定性と自己把握の客観性の側面から主に検討することにした。但し、これは後述する如く

「自我機能」の研究と合わせて行うものである。

結論として、自己心理学的立場からすれば、

「現象的自己」が個人の行動における唯一の現実的枠組として人格内で最も重要な位置づけがなされており、これが適応上決定的な役割を果たすものとして、適応研究上最も重要な枠組であると考えられている。この標に主に正常な人格内で、「自己」が果たしている積極的な役割については一応明確化されているものの、それでは不適応者の貶価的な或いは不正確な「自己」がどの標にして生じ、又それが人格全体に対して有する機能連関がどの標なものであるかについてはあまり論究されない。結局、適応、不適応が、直ちに、「自己」なる意識的現象像に敏感に反映されたものとして捉えられており、あくまで現象的関連性が検討されようとするにとどまっていると云えよう。勿論これは現象学的接近法に添った研究法の特徴であり限界⁽⁵¹⁾であるが、「自己

「自我」を主体として生ぜしめられている主体的過程に
 ついては、大よそ「自己」と区別されるべき
 ものとして言及されながら、2つの機能的関
 連性については十分触れられず、漠然と、執
 行者 (doer) 的なものが背後にあると考えられ
 たり、或いは主体的機能が一種の動因概念とし
 て片づけられているのがせいぜいである。と
 ころが一方では、先述した如く、比較的最近
 の傾向として、無意識的な防衛の作用等と同
 題とし、そうした要因に左右される以前の無
 意識的自己の把握に関心が寄せられているが
 (27, pp 439-466), (67, pp 250-254)
 、自己心理学的立場から理論的研究も不備な
 ま、にこの様な方向に進むのはどうであらう
 か。事実方法上の問題や実験結果の解釈上の
 問題で、^(67, p 274) この研究にはあまり松りがみられて
 いないが、私自身は、「自己」の問題を現象学
 的接近法と呼ばれるやり方の一つの大きな利
 点である「個人にとっての経験的な現実性」
 の理解を重視する立場をとりたい。従って、
 「自己」に関しては、上述した如く、あくま

でも意識的なものも問題とし、又別の枠組から主体的機能についての詳細な検討を試みたいと思う。

<第3章> 「自我機能」について

(1) 「自我」概念発展の厂史的展望

「自我」即ち人格の主体的な機能について最も本格的な詳しい研究がなされたのは精神分析学派によつてである。そこでは多くの実践的理論的研究の厂史が積み重ねられ詳細な説明が試みられ、今日の自我心理学 (Ego Psychology) に到っている。尤も、Freud, S. の仕事は主に精神の無意識内容や衝動のあり方の究明を中心とし、それに比すれば自我は才一義的に重視されず研究が相対的に遅れた事が認められるが、ここだけそうした Freud の業績の中でとくに「自我」の研究に焦点を合わせ、それ以来の自我概念発展の過程を概観し整理しておきたい。

精神分析学の発達に因する歴史的研^{78) 79) 132) 163)}究はいくつか見られるが、それを「自我」に焦点づけて行おうとしたものは少数で、主に、Hartmann^{76) 79) 80)}, H., Rapaport, D.¹³²⁾に代表されると思う。両者はそれぞれの仕方で Freud による「自我」研究もほぼ3段階に分け、更にその後の発展、現段階における自我概念を説明しているが、ここでは両者の段階わけを参照してまとめてみる。

第I期

1887年頃から大抵1900年に到る以前の段階で、ここでは自我機能(Ego)がいくつか偶発的に記述され、Hartmannも述べる如く、Freudの自我研究の萌芽期とも云うべきものであろう。しかし、ここでは、「自我」はまだかなり未分化であり、人(person)、他人に対する自分自身(one's own person)、意識等時としていくつかのものを指した。たゞ、自分についての自覚(awareness)と云った現象学的な意味には用いられず、その後もFreud

は自分についての主観的経験は自我の機能に
 よるものではあつても自我そのものではない
 との考へ方をもつてゐる。又 Freud は當時可
 びに哲学的用語として、或に、意識とか自由
 意志とか云つた意味あひを担つてゐたこの語
 を臨牀的経験と直接につなぐににくいものとし
 て引用符つきで用ゐたりもする。^{80, p282)}結局まだ
 けつきり定義されない乍ら、自我は生理学的
 には「神経の集合体」(a group of neurones) 又心
 理的には「觀念の集合体」(a group of ideas) と
 考へられた。その機能に關しては、防衛、現
 実吟味 (reality testing), 知覚、記憶、思考、
 注意 (attention), 判断 (judgment) がごく大雑
 把にとり挙げられたが、この中彼は防衛の機
 能に最も注目した。⁴⁸⁾即ち當時の考へでは、個
 人による外的現実 (external reality) の把握が
 そのまゝ、觀念の優勢な集合体 (dominant mass of
 ideas) 即ち意識となつて存在するが、これと
 矛盾する経験はすべて意識から分離され、記
 憶・想起が不可能になるとされ、又その経験

に関連する感情 (affects) は外的現実及び当人の意識に受け容れられない苦痛に満ちたものとして溜り、“不安”を形成すると述べられている。これは當時、Breuer, J. 等と共に盛んに行ったヒステリー-の臨床的觀察や治療を通して主に得た発見であり理論づけである⁽¹⁸⁾。たゞ受け容れられずに溜って行くものが感情であり衝動備給 (drive cathexis) ではないとは現在の自我心理学と異なるが、外的現実の重視や、防衛自体が無意識的に作用することへの洞察がなされていたこと、又一次過程二次過程の区別が行われ始めといった点等が注目される。この様に Freud の自我研究の萌芽を可能ならしめたものは単に臨床経験のみならず、心理学、哲学による影響が Hartmann によって指摘されている。即ち、極く簡単に云うと、Herbart から主に“抑圧” (repression) の概念を、Schopenhauer や Nietzsche から無意識過程に関する考えを、Breuer, Janet から無意識の防衛機制を、Meynert から一次過程二次過程、自我形

成、自我の統御機能等広汎なものを学んだと
 されている。^{80, p275)}

Ⅱ期

1900年頃より1920年過ぎまでにほぼ相対する。
 ・Ⅰ期では外的現実を云わば不動のものと
 考えていたが、分析を進展を重ねるに従い、患
 者の報告が現実の経験ではなく空想(fantasy)
 である場合を発見すること等から、その空想
 を生ぜしめている機構(agent)、及びその活動
 過程に興味を転じ、その結果本期最大の特徴
 である本能的衝動(instinctual drives)の発見と
 研究が行われることになる。即ち簡単に触れ
 ると1910年頃までは殆んどリビドー理論(性
 衝動のエネルギー)に終始^{(49) (50) (51)}し、このことから
 Freudの理論全般が汎性欲説(pansexualism)
 と見做されてしまうほどであるが、この性本
 能(種族保存本能)を極めて重視するⅠ次
 本能理論⁵¹⁾の中にも、もう一方に自己保存の本
 能^{(51) (52)}と称し自我にかかわる本能的衝動の概念を

対置させる。但し後者は人間にとり無害であるのみでエネルギー的にも規模の上でも弱小なものにすぎない。しかしその後1914年から1918年頃にかけて多くの戦争神経症を治療の対象とすることから、性的衝動以外に破壊乃至は死の本能に基づく攻撃衝動を考え、⁽⁵¹⁾ 二次本能理論を展開しようとする。そして前本能理論から快樂原理 (pleasure principle) を後者から反復強迫の原理 (repetition-compulsion principle) を発展させ、この2つによって人間の行動を説明しようとしたのがそれである。⁽⁵²⁾ この存在本能的衝動理論の陰になり下らも、「自我」に関する研究は前期よりいくらかでも進んだ形で認められる。それは、1) 二次過程 (secondary process) についての概念⁽⁵²⁾、2) 現実原理 (reality principle)^{(52) (53)}、3) 抑圧過程 (repression)⁽⁵⁴⁾ に関する研究である。

1) . これは後の自我心理学への発展にとって持つ意味は防衛の概念と同じく極めて重要とされるが、現実関係 (reality relation) をつか

さとり本能的衝動に課題を提する意識的過程に他ならない。自我がこうした過程に従って機能し衝動に対し意図的有目的々な働きかけを行いうると云う後の理論的展開のための基礎的考えをここであらうことが出来る。

2) 1911年の論文で⁵²⁾ Freudはリビドーが快樂原理により一次過程で活動することを再び強調する一方、自我はむしろ現実原理に従うことを指摘し、現実に適うため現実吟味を行うとともに統制的な働き(control)をすることに関与している。

3) 抑圧過程を分析し、これを精神エネルギー的又力動的な観点から、現在の自我心理学における抑圧意識にとどまるだけのエネルギーが減退して無意識に後退してしまうことであり、前意識的備給(hypercathexis)が後退しその問題となつてゐる衝動に対する反対(逆)備給が永続的に確立されるものと考え、更にこの反対備給が対抗的に働く作用も無意識的だとした。⁵³⁾ (註 hypercathexisは過重或いは過剰充當と訳されることもある。)

この期に自我に關係したいくつかの重要事項が研究されたが、この期の自我は衝動に對抗する有力な独立的執行者 (doer) としての役割を十分担ったものではなく、むしろ本能的衝動の红星とでも云うべきもので時には衝動の影響にかすみつつ、現実原理の影響下に辛うじて受動的闘争を試みる程度のものに考えられていた。ただこの期には自我も衝動やリビドー的な面とのつながりにおいて理解しようとする所が前期の自我概念と根本的に異なる点とされる。即ちこの期に Freud はリビドーの発達を段階的に詳しく研究したが、⁽⁵²⁾ そのリビドー発達の起りに従って自我も現実吟味の機能等を次第に発展させていくことに触れており、これは彼の門下の Ferenczi, S.⁽⁵³⁾ によってもより詳しく研究されようとした。Freud が、ナルシシズムに關する理論⁽⁵⁴⁾で、“自我本能” (Ego-Instincts) や “自我リビドー” (Ego-libido) の概念を提示したのもこの一連のものと解されるが自我を本能的なものと考え、リビドーやその

他のエネルギーを担いそれによって発動するものとされておりその真現在の自我の概念が中性化された衝動のエネルギーを自我備給 (Ego-cathexis) として有するものであるのとかかなり似通った面を持つが、現在の概念に比すれば非常に未分化なものである。衝動と自我との間の葛藤も互に本能的な性質のものか同列で相争っていると言う風に述べられている。しかし、リビドーの障害が自我のエネルギー的備給 (energy cathexis) に影響しその結果起った自我の異常な方向への変容が逆にリビドー過程の障害と二次的に惹起せしめることを精神病患者の分析から洞察した⁵³⁾ニと、利己主義 (egoism) と自己愛 (narcissism) の区別及び両者が自我に対してリビドー充足的な形での動因的力 (motivational forces) を有すること、又自我は対象に対するリビドー備給と云う形において機能するが、この対象備給 (object-cathexis) よりも自分自身に対するリビドー備給 (self-cathexis) の方が先行するとの

弗エ等は この期で注目 に値するものである。
 但し 後者の自己備給は自我備給 (Ego cathexis)
) と重なり合っておりナルシシズムに関する
 理論は不明確なものを後まで残している。^{80, p287)}
 以上の如くこの期では本能的衝動面に関する
 考察がかなり進められたのに比し自我に関し
 ては新しく興味深い研究がいくつか行われ乍
 うも本能的衝動から分化した独立的なものとし
 てその組織や機能が概念化されるには到っ
 ていない。

Ⅲ期

1920年過ぎ (大抵 1923 年頃) 以後である。
 1920 年を過ぎると超自我概念の導入等により
 全体的な人格理論が形成され始めた。⁵⁸⁾ 1925
 年頃までは Freud にとって理論拡張の時期だ
 とも云われている。そして 1923 “自我とイ
 ド”⁵⁹⁾ において彼は全人格の構造及びその機能
 的過程に関する理論を発表し、イド (衝動の
 集積)、自我、超自我の各概念を明確化し三

者の力動的関係も明らかにしようとした。その内容はあまりにも有名であり改めて述べるまでもないが、簡単に要約すれば下記の様になる。即ち、構造的には、エス（無意識）、前意識、外界につながる意識の3領域が考えられ、快感原則を担った衝動の集積であるイドはエスの領域で云わば沸きかえる興奮の総体の如き様相を呈して存在し、自我は無意識から意識の領域にかけて、又超自我はエス領域から自我の領域にまたがるとどこかある部分を占めて存在する。この三者の中で自我はイドと超自我そして外界の現実を調停する働きをつかさどるものであり、イドがその本能に従って欲求を充足させるべく自我領域に侵入しようとするれば、それが超自我によって許容されるか外界の現実には適合するかを検討し危険のない限りにおいてそれを認め運動機関を道具として使用するにより欲求充足を果させる。だがかかる危険のない程度と云うことが現実には非常にむづかしく、大抵の場合、

自我は、イドの快感原理を至上命令の標にした執拗な強い攻勢と超自我の厳しい管理、更に外界の現実的要請と云う三者の力関係の中でもまれ続け葛藤状態に身もゆだねているとされ、衝動を外界の基準に適合した形に变形して解放すると言う積極的な解決策を生み出し得ない場合、抑圧、制止 (inhibition)、反動形成 (reaction formation) 等の防衛機制を衝動に対して行使すると証明する。

又三者の発生及び形成を概略すると、まずイドは人間誕生の最初から存在し云わば生命的エネルギー発動のための発電装置の標本ものである。(生物学的色彩が強い。) これに対し、外界との接触即ちまず身近な人(養育者)等への同一化により欲求充足のための現実的手段を学習することから自我形成が始まり意識領域も次第に形成される。又この自我形成とほぼ同じ時期に超自我もでき始める。つまり、欲求充足の現実的手段の中には文化的規範、社会的価値基準が含まれ、これが両親

のしつけや訓練を通じ、厳しい両親像等として具象化され、同一化の形で個人の中にとり入れられ、この標に内面化された社会的モラルが一体となつて超自我が形成され、これはかなり複雑な形で死の本能に通じる破壊的な厳しさでいつて自我を拘束する。

以上がこの段階での自我と、それをもとりまく精神的諸構成要素との間の力動的又構造的な関連の大雑把な点であるが、ここでの自我概念の不十分な点として Rapaport, D. は次の様な指摘を行う。^(32, pp)

① 自我は依然として、イド、超自我、現実の諸力に結果される合力的なもの (resultant) であり又衝動を馬と例えるなら自我はその無力な騎手として馬の望むところに進むことを余儀なくされる存在でもある。^(59, pp 82-83)

② イドについてはある独立した遺伝学的基盤が考えられているのに対し、自我はイドから分化して来たものの以上に考えられていない。

③ 又、イドに含まれる性本能的衝動 (リビド

一) や死の本能(タナトス: Thanatos) 的攻撃衝動⁵⁷⁾に肉しては、その変遷(特に前者についての)が理論的に究明されているのに対し、自我発達については、漸生説的(epigenetic)な概念化がなされていない。

④ 自我の持つ防衛機能があまり一般的に理論として十分展開されていない。

⑤ 意識の構造的概念化が十分もりにまわっていない。

こう云った諸点の挙げられていたが、1925年以後になると次第に自我概念も充実する。

まず不安に肉する考察が必ず初期の不安の概念と大分異なり、自我が不安の唯一の座(seat)だと考えられる様になった。即ち、自我、イド、超自我、外界の關係によって不安が生じてくるとこの不安を自我が危険信号として用い主導的に防衛⁶¹⁾を行う。更に、発達が進むに従い、受身的に経験した不安を適応のための予見^{61) 63)}として能動的に用いる様になると述べる。自我は従来の様に過小評価されな

くなり、衝動的なエネルギーを用いて（但し
 そのエネルギーをそのまゝ用いるのではなく
 非性化（desexualize）或いは非攻撃化（deaggre-
 sivize）の形に変容して）自我は独自の機能
 を果すものであること。自我が様々な防衛を
 掌握しており衝動によって促進される行動が
 現実との関係を危険にする時衝動に対する手
 段として、それ等を無意識裡に行使すること
 等を理論化し、防衛機制も自我の働きとして
 正當に位置づけた⁶¹⁾。又後に自我心理学におい
 て明らかにすると二つであるが、自我は自ら
 の目的追求のために、単に現実原理のみなら
 ず快感原理を用いることを指摘しているのも
 興味深く、第二期では本能的衝動の方に中心
 的役割を譲つていた外的現実（external reality）
 が再び重視されるに到った。^{61) 62)} 結局この段階に
 おいて Freud はこれまでの各期に試みに概念
 化を最終的に達成したとも云えよう。即ち自
 我は現実と本能的衝動或いは超自我との関係
 において、単に諸力の調停者ではなく調和的な

解決ももたらうとするものであり、より大きな独立性を持つに執行者 (doer) とされる⁽⁶⁴⁾⁽⁶⁵⁾。
 二次過程や現実原理についても更に考察が進められ、自我は主に現実との関係から発達するものではありながらもそこに生れつき存在する生物学的基盤も大雑把乍ら仮定され、自律的統合機能 (synthetic function) も暗示された。⁽⁶⁴⁾⁽⁶⁵⁾

Freud, S. はこの様に自我の概念をも発展的に果して行きオラ期において一応最終的段階に達した⁽⁶⁶⁾が、この期の完成は Freud, A. によって行われたと云えよう。即ち、彼女は精神分析学の理論的実践的興味をはっきりと「自我」の機能そのものに据えた。深層のエスや超自我の内容及び力動性 (dynamics) の理解はそもそも自我を通してしか行われ得ず、心的過程はすべて自我がかわる二とにおいて展開する。従って精神分析学はもはや深層心理学ではなく自我研究の学問であり、精神の構造や過程は自我に焦点を合わせる二とによってお

のづから最も有効な形で理解されることになった。そこで彼女は、「自我」について防衛の概念を詳細にしかつ組織化するとともに、自我にとって感情 (affection) が有する役割を研究することにより Freud, S. が精神分析的自我心理学のために敷いた基礎を拓けた。

以上、概括的に、Freud 理論における「自我」概念の発展経過をみた。精神分析学の専門的用語は殆んど説明を加えないままに用いたが、次の自我心理学理論のまとめの所で必要にたじ適宜簡単に説明しておく。

〔Ⅱ〕自我心理学における「自我」概念のまとめ

精神分析学における「自我」重視の必然性が認識されたか。Freud, A. ^{46) 47)} により方向を定められた「自我」研究は、その後約30年間に、^{76) 77) 78) 80) 81)} Hartmann, H., ^{128) 129) 130) 131)} Rapaport, D., ^{105) 106)} Kris, E., ³⁷⁾ Federn, P., ⁸¹⁾ Loewenstein, R. M., ^{32) 33) 34) 35) 36)} Erikson, E. H., ^{38) 39)} Fenichel, O., ^{146) 147)} Schafer, R., ^{LIFE C 151} Nunberg, H., 等により進めら

れ。自我心理学 (Ego Psychology) として現在に
 到っている。これはもともと正統派精神分析
 学 (フロイド流) に属するものである故。新
 フロイド派や、上の第Ⅱ期に出た Jung, C. G.
 や Adler, A. 等初期の偏向者の理論の標に分
 派したはおらず、フロイド理論も正統的に基盤
 とするものではあるが、これに属する上記の
 如き各研究者の理論内容を見るとかなりのち
 らばりがあり、⁽¹⁶³⁾ ⁽¹⁶⁴⁾ 具体的に分派した理論と重なる
 面もかなり有している。Klopfer, B. も Jung 派
 理論との比較において指摘することく、自我
 心理学の諸理論を総合すれば、他派の理論と
 近似したものである普遍的な、人格機能に属する
 理論が描かれて来る様に思える。それだけに
 自我心理学における諸理論はかなり統一性を
 欠いており整理が容易ではないが、現段階に
 おける「自我機能」の考えを一たこゝでまと
 めておき、本研究でとりあげる「自我機能」
 の概念の明確化を試み、問題点をしぼりたい
 。上に掲げた標々人々による自我の諸研究を

和なりに綜合してみると、それ等は次の様な諸側面から行われてゐると考えられる。

- 1) 力動的側面 2) 發生的 (genetic) 及び形成 (formation) 的側面 3) 構造的側面
4) エネルギー経済的 (economic) 側面 5) 心理-社会的 (psycho-social) 發達の側面

大体これ等の諸側面が、適応及び心的健康 (mental health) の觀察から考察され、正常者から精神障害に及ぶ対象範囲について理論的展開がなされてゐる。上の5つの側面は必ずしも整然と分類し得るものではない。互に重複し合う場合が多いので以下の説明も十分整理のついた形ではなく、時には繰り返しや、又いくつかの側面をひきまゝとめて行つてゐるものが含まれるかも知れないが、要旨を述べてみる。

1) 力動的 (dynamic) な側面

自我により独立的そして能動的役割が附せられるに到つたことはすでに述べた通りである

が、本能的衝動（性的衝動と攻撃的衝動をや
 かり一応二本柱として考えている。）が、自
 らの主として生物学的な生命実現のために活
 動し現実的に欲求充足を果すに到る過程にお
 いて超自我及び外的現実の要請を考慮し衝動
 の目的遂行のために必要な手段を行使するの
 がこれである。従って自我はエスの中に存在
 するいろいろな衝動（これは後の構造的側面
 においてとも再に触れることであるが、衝動は
 最も生々しい形においてただ二種類存在する
 のではなくて、次々と衝動の派生物——drive
 derivatives^{80) 129)}——が生じ各々の派生衝動が自らの欲
 求充足を求めて自我を刺激する。）と常に全
 面的に受け入れその発現を見守るのではなく
 衝動を操作しており、それによって超自我、
 現実との均衡を得させる。この操作が無意識
 的に行われる防衛であり、従って防衛は葛藤
 状況に置かれた自我の取る病的な非常手段で
 はなく、正常な自我が衝動に抗する手段で
 あり、自我組織を形成して行く上で不可欠な

ものとされる。そして防衛の型について、
 Freud, S. の標に抑圧のみを重視するのでなく、
 いくつかを併比させ詳述する。その主なものは、
 ① 抑圧 (repression) ② 拒否 (denial)
 ③ 逃避 (escape) ④ 退行 (regression) ⑤ 分離 (isolation)
 ⑥ 仕切り (compartmentalization) ⑦ 反動形成 (reaction formation)
 ⑧ 打消し (undoing) ⑨ 投影又は投射 (projection) ⑩ とり入れ (introjection)
 ⑪ 合理化 (rationalization) ⑫ 観念化 (intellectualization) ⑬ 置き換え (displacement)
 ⑭ 昇華 (sublimation) 等である。^{(46), (70), (100), (146)} 二れ等の詳しい説明は省略するが、②, ⑨, ⑩ 等がなり
 原初的 (primitive) で未成熟だとされる型のも
 のから ⑫, ⑬, ⑭ 等がなり高等な又 ⑭ 等理想的
 型のものが型別に大雑把に比較されたり。
 又、④, ⑤, ⑦, ⑫ 等を強迫的防衛機制 (obsessive-compulsive defense mechanism) ⁽⁴⁶⁾ として一括
 されたりするのを見るが、強んじのものか、
 自我形成過程を通じて一時的にしろ或いはかた
 り持続的にしろ出現する可能性があること。

又、そうしたいろいろな防衛機制の行使が自我形成に参与し、結局、エネルギー全消の所においてとも触れる様に、あまりにもある型の防衛が自我形成途上で持続的に用いられすぎ多量の精神エネルギーを消費して、その個人の中に強く固着してしまふと自我が疲弊し以後の発達が制限されたり生産的機能が障害されたりする結果になるが二の様にあまり盛んに用いられすぎず、防衛がむしろ一時的な形で成功的に用いられるとそれにより自我機能が豊かに発展していく。例えば、拒否は乳幼児期にこれが用いられる場合は、外部の条件が快的なものから不快な或いは苦痛の方向に変化したのもそれを無視し相変わらず快的な状況が持続してゐるものと防衛的に思い込むことにより欲求充足を自分に適った持続的な形で得ることもでき、それによつて自我発達のための土台となる基本的安定(basic security)^{36) 80) 100)}を達成できることになる。又、投影も、妄想等の病態化傾向のみならず、対人的共感性や敏感な

現実の意味 (reality testing) の能力にかゝる面
 を、とり入れれば、破壊的衝動発現の阻止のみ
 ならず同一視による社会的適応法の獲得も可
 能にする面を、更に、観念化は情緒の締め出
 し、エスとの内的疎通性の遮断のみならず論
 理的思考の発達を促す面を有する等、いろいろ
 と積極的な意味を有している。この様に、
 防衛機制は本来否定的な意味あいのものである
 毛頭考へられていない。たゞ、Eissler, K. R.³⁰⁾ も
 述べる如く、"防衛機制は自我を保護するか
 破壊するか、いずれかの道をとる。"わけであ
 り。云わば両刃の剣とも云うべき性質を有し、
 結局成功的 (successful) に用いられるか不成功
 な使用に終るか^{84) 100) 146)}の観念から問題とされて来る
 わけであるが、この成否は2)でも述べるとこ
 ろの、生れつき遺伝的に備わった自我の一次
 的な自律装置 (primary autonomous apparatus) の幼
 きの成熟と生活史を通じてかかわって来る環
 境的条件との力動的関係によって規定される

上の標に、衝動の発現をそのままの形で認
 めない環境に對して、自我が、その環境から
 否定されることにより不安や恐怖が生じたり
 精神内界に葛藤的緊張を生じるのを避けるた
 めに衝動の側に防衛機制も云わば安全工作と
 して構じ、その結果環境への適応に成功する
 ことによりその防衛機制は適応的⁷⁷⁾な合目的性
 を獲得して自我の自律的機能に転じる。これが
 2) 及び 3) でも述べる⁸⁰⁾ところ、自我の二
 次的な自律の機能 (secondary ego autonomy) であ
 り防衛と適応の兩目的を同時に遂行するが、
 Idartmann, H. によれば、この標に、環境に對
 して自分自身を善化させることによりどちら
 かと云えば順応的適応を果すやり方 ("fitting in",
 "Autoplastic") のみが人間の適応標式ではな
 く、同時に環境そのものを適応的に変化させ
 自分自身の独立性を恒常的に維持する能動的
 な面 ("Alloplastic") もも有するとする。この
 後者に關係の深い自我機能が、やはり後述す
 る如く、一次的自律機能であり、一次的な自

我の自律装置が内的に成熟して行き乍ら同時に環境からの肯定を受けることにより一歩発達を促進され安定した反復的自動的の機能と見え、前者とは異なり、後天的な葛藤至駭とは本来的に無関係な形で発展して行き能動的適応を果す上で重要な役割もする。勿論、先述した通り、この一次的自律の機能は二次的自律の適応機能の発達にも自ら加担しているわけであり、この二つが自我の力動性にかかわっている。

しかし、自我の力動的働きとしては、これ等適応的自律性の確立 (automatism) と云うことの他に、随意的に柔軟な弾力的機能もとりあげねばならない。これは構造的側面と密接に⁽¹⁰⁶⁾関係するものであるが、Kris, E. Schafer, R. 等による⁽¹⁴⁷⁾“自我の働きに基づく一時的、部分的な退行” (“temporary and partial regression in the service of Ego”) 及び、“精神機能のレベルの移動” (“shifts in the level of psychic functioning”) の概念によって説明される。

二二では Freud, S. の称に意識、前意識、無意識と云う局所論的見地に立たず意識性 (awareness) と云う考えを用い⁽¹³¹⁾、無意識から意識までを連続的なものとして見做しており、健康な自我は適直自在に自らの連続した層的組織のいろんな段階における機能を行しうると考える。後述する如く、二次過程的な機能から、一次過程の方に一時的に退行して機能し再び二次過程に戻って退行状態から現実水準への回復を果す。殊に創造的思考が行われる過程では必要條件と考えられており、Freud, S. も芸術家の創造性に因して既にこれに触れていた⁽⁵²⁾。大切なことはこの退行が非可逆的永久的な退行ではなく、一時的なものであり、根本的には自我の制御下にあつて、再び二次過程の方向への移行 (progression) と伴ない自我の生産的機能にプラスすることである。退行によつて生々しい原始的な衝動に触れ、それを生産的機能のための本質的源として利用し、自らの統制下でそれを解放せしめる通路を与え^{(106) (147)}

二次過程によつて社会化され洗練されるに猝づけ
 けを行ふと云ふことがすべて自我の機能的過
 程に属するものでなければならぬ。これは
 又、成熟した情緒を伴う生産的仕事による自
 己実現 (self-realization⁶⁰⁾) に他ならない。これ
 をどの程度行いうるかが、自我の力動的働き
 の健康さ、能動的適応性の基盤として重要な
 關係を持つて来る。自我の行使する防衛機制
 が衝動を抑える上に効力を持たなくなると、
 衝動に吞み込まれた形の退行を行つたまゝ、上
 への移行 (progression) が不可能となる。又、
 衝動との間に葛藤的緊張を持ち続け常に防衛
 をゆるめることができない状態にある時は、
 自我が随意的に退行して下層部と疎通を計る
 裕り等なく自然な衝動になじむことは自我に
 とつて非常な危機をもたらすか敗北を結果す
 ることにもなりかねない。前者は自我の健全
 度が相当ひどく損われて精神病적인病態化に
 向う場合と關係が深い。防衛法としては投
 影や拒否又いゝ強迫的機制等が最後のあが

さとして行使されたりする。後者には抑圧や
 観念化等の極端な形が関連づけられ内的疎通
 性の著じるしい制限や拒否が認められる。Ra-
 paport, D. は、“環境からの自我の自律性を保
 護するのは衝動に他ならず、他方衝動から自
 我の自律性を守るものは環境に他ならない”
 と言う含蓄ある論述を行って⁽¹²⁹⁾いるが、衝動と
 親密な疎通性を自我が能動的に有することは
 自分を創造的に実現して行くと言う積極的な
 働きと同時に環境から来る様々なストレスや
 その激しい変動から自らを守り、常に環境に
 左右される受身的な被影響性の強い存在であ
 ることから個人の独立的自律性を保障する働
 きをも果すことになる。従って自我のこの弾
 力的機能はたに芸術的な創造のみならず、も
 っと一般的に正常で豊かな精神生活或いは行
 為に関係するものであり、例之は機智やユ-
 ーモア、新しい事柄の工夫等も可能にする。又
 、同様に Rapaport, D. は“豊かな情緒生活ニ
 是強い自我機能を示す。”⁽¹³⁰⁾と⁽¹³⁰⁾するが、情緒者(

affects) と も 深い 関係 を 有 する 。 即 ち 、 自 我
 が 弾 力 的 に 疎 通 でき る と 云 う こ と は 、 自 我 組
 織 の 各 層 に お け る 種 々 な 派 生 衝 動 の 活 動 に 伴
 っ て 生 じ る 情 緒 の 種 々 な ニ ュ ア ン ス に 通 じ て
 い る こ と で あ り 、 そ れ 等 を 敏 感 に 受 け と め る
 こ と に な る 。 ^{38) 129) 130)} 更 に 、 そ の 情 緒 を 時 に は 自 我 に
 と っ て 危 険 信 号 と し て も 受 け と め る こ と が でき
 き 、 自 我 の 安 全 性 が よ り 万 全 に 保 た れ う る 。
 最 後 に ニニ で も う 1 つ 述 べ な け れ ば な ら な い
 も の に 、 綜 合 的 機 能 (synthetic function ,
 integrative function , organizing function , harmon-
 ization 等 と い る い る の 呼 び 方 を し て い る 。) ^{3) 4) 14) 34) 36) 45) 72) 77) 80) 103) 107)} が
 あ る 。 ニニ は 5) と も 関 係 が 深 く 再 び 触 れ る が
 上 に 述 べ た 標 本 , 対 外 的 , 対 内 的 な 力 動 的 的 効
 き す べ と を 含 み そ れ 等 を 統 一 的 に 綜 合 す る と
 も 云 う べ き も の で 適 応 機 能 の 最 た る も の だ と
 さ れ る 。 ニニ は Hartmann, H. に よ れ ば , “ 調 和
 さ せ る こ と ” (“ fitting together ”) , “ 平 衡 ” (“
 equilibrium ”) 等 と も 称 さ れ , 精 神 機 構 の 複
 雑 さ か ら , そ の 中 に は い る ん な 種 類 の 平 衡 が

考えられねばならないとして次の様なものをあげている。①個人と環境との間の平衡、②本能的諸衝動間の平衡 (vital equilibrium) ③精神諸組織間の平衡 (structural equilibrium) ④全体的な平衡、……②と③は所謂精神内平衡 (intra-

psychic equilibrium) でありお互に関連の深いものであるが、①もこれ等に加わって結局三者は相互依存的なものである。④は最も高いレベルの平衡とされ、この機能は自我組織の上戸部の“自我興味” (Ego-interests) と結びつけて考えられるが、更に諸自我興味間の葛藤をもも綜合しようとするもので適応とは、④の平衡即“真の適応”とも云える程密接不離な関係にあるとされている。結局、①～③の平衡をつかさどるのはそれぞれの総合的機能であるが、更にそれ等諸種の総合機能をも含めた全体を統合する最も高度な総合機能が④でこれこそ最も典型的な意味での調和 (fitting-together, Anpassung, Zusammenhang) だとされる。^{77) 80)}

従って平衡にはいろいろなレベルのものがあり

又常に破られては再生に向つて動く過程的なものと考えられている。従つて Idartmann は Cannon 以来ホメオスタシス (homeostasis) と呼ばれているものと似ていることを認め、そのあるレベルを表わすものとも考えている。^{80, p329)}

この様に平衡のレベルがいろいろあることについて、¹⁰³⁾ Menninger, K. A. も正常な水準から神経症更に精神病の種々の段階から最後に非可逆的な破局に到る崩壊の水準までホメオスタシスも各々分類し、又 Beres, D.¹⁴⁾ は総合的機能に非常に原初的 (primitive) な段階から後の自我発達により高度な段階が考えられると述べ、この総合機能の発達には、他の自我機能の発達 (例えば、衝動の制御や、二次過程の発達等)¹²²⁾ が関係するとする。他に、⁷²⁾ Nunberg, H, Glover, E. も総合機能に言及するが、全体としてこの機能に関する説明は不十分であり、又諸説間にも内容的な或いは機能的レベルの上での差異も認められる。たゞ、精神内界及び外の環境諸間の平衡を全体的につ

かさとり、統合的の適応を目指す自我の機能も不完全ながらも考えようとしているところは興味深い。

2) 発生及び形成に関する側面

Hartmann は自我機能に2種類の自律性を考える。自我は出生後、発達の最初の段階ではエスと未分化であり、その未分化な母体から次第に分化して発達して来ると考えられる⁸¹⁾。この最初の段階にエスの本能的衝動とは異なった独立の源が既に存在するとし、これを一次的自律の自我装置^{77) 81) 85) 103)} (ego apparatuses of primary autonomy) と考える。ここには遺伝的素質(従って身体的素因との関連も深い。)が含まれ、知覚、記憶、知能、運動機能等の他に、感覚、衝動の閾(threshold)が関係して来る。これは個人が生れ落ちた典型的な環境(平均的な、予期しうる環境—average expectable environment—換言すれば、その個人をとりまく生物学的、心理的、社会、文化的環境の云々は伝統的パターンの好なもので、細かい差異

や変遷は一概含めたいでおく。これに対し、
 予期しえない環境 — the average not expectable
 environment, atypical situations — に対置
 させられる。) に対して系統発生的に保障さ
 れている適応の手段である。^{77, p.23)} 最初から葛藤的
 至験に先立って存在するものであり、葛藤を
 解決した結果得られる適応機制と異なるより、
 基本的なものである。一次的装置は出生後の
 身体的成熟(特に中枢神経組織の成熟)とと
 もに次第に成熟をとげて行き、環境との相互
 作用を通じ乍ら、学習的に“葛藤外の自我領
 域”(conflict-free ego sphere)を形成して行
 く。この標に一次的に自律した自我機能の発
 達があることにより、エス及び外界に対する
 独立性と能動的適応が保たれる。Freud, S. 己
 1937年には、自我の根源的な個体差が遺伝
 的素因として存在することと予見している。
 一次的自律の自我機能が、生物学的成熟を常
 に基盤とし、母-子関係と云う生命的共生の
 世界及び原初的な人間関係の世界も至験し更

にこの対人関係を拓げて「史的社会的な世界」を至騷する二とを通じて、發達して行く「具體的な至過」は例えは、⁷¹⁾ Gerell, A. や ¹⁵⁴⁾ Spitz, R. A. 等の乳幼児の詳しい觀察にみられるところである。

二次的自律性 (secondary ego autonomy) は、これに対して、先天的な自我装置に直接関係なく、先述した防衛機制が適応的に葛藤解決を果すことにより衝動から相対的な自律性を獲得し、二次的に自律した自我装置 (apparatuses

of secondary autonomy) を作って行き、「葛藤外の自我領域」を^{77) 81) 85) 103)} 拡大する。この様に葛藤状況における防衛機制が転じて衝動の中に再びまきこまれる心配のない適応的な自律機能に転じることを、Hartmann は「機能の変化」^{80, p. 123)}

(change of function) と称する。但しこの二次的自律性は一次的なそれと異なり、衝動の活動と相対的な関係にあるものであり、例えば思春期の様に衝動が^{80, p. 123)} 強盛化する時には一時的に自律度がかなり低下したり又壊れること

も生じる。かゝる自律化 (automatization) の他に、“機能の変化”に含まれる諸側面として
 “中性化” (neutralization), 即ち、非リビ
 ドー化 (desexualization) 及び非攻撃化 (de-
 aggressivization) が^{77) 80) 128) 130)} 挙げられねばならない。

機能の変化は同時に衝動そのものを生じし
 形からより中性的な環境に対してスムーズに
 発現していきやすい形に変容する仕事を果し
 ていることにもなり、従ってそうした衝動の
 活動に伴って生じる情緒 (affects) も衝動の
 変容にあじてより中性化されて微妙な繊細さ
 を増し所謂洗練された形に変容する。この過
 程を Fenichel, O.³⁸⁾ は “taming” と呼んでいる

。この標に中性化、自律化の過程を通じて自
 我は、衝動を自らの機能に役立ちうる標変容
 して自らの目的に使用しうるように次々と正
 常な統一の貯蔵を行って行く他、衝動の圧力
 から相対的に独立した適応機能を自動化して
 備えて行くこれ等が一次的自律の自我装置と
 合^わって発達的に尸的な自我組織のヒエラル

キ一を形成して行く。二二で大切なと思うのは、衝動が中性化され、エネルギー的に自我に備えられて行くのみならず、中性化された衝動はもとの衝動の派生衝動として自我組織の中にとり入れられ、各々自我にとっての動因 (motives) となつて行くことである。これに因して詳しくは構造的側面に関連づけて述べる。

こうした自我組織の形成について個人差は如何なる点から生じるか。それは結局、一次的な自我の自律装置の違いと、個人ととりまく生物・心理・社会的環境の特殊性及びそれとのかかわりあいにおいて生じる至験の違い(二二の至験とは精神内界におけるもの及び対外的なもの両方を含む)によつて説明されよう。そして一次的な自我の自律装置の発達成熟は生物学的基盤によつてのみならず、対環境との関係における学習的至験によつても規定されるものであり、後天的至験のあり方で例えば、どの防衛機制をどれ程持続

的に使用するか、或いは環境に対してどの様な反応を示すか)は、一次的自我装置によって基本的に規定される面を多く含む。従って、一次的装置の基盤の上に立って衝動を自我になじませ、役立たせる形で統制して行きたから (taming) 二次的自律装置を形成して「葛藤外の自我領域」をできるだけなく開発して行くことが自我発達上の課題となる。⁷⁷⁾⁸⁰⁾⁸¹⁾⁸⁵⁾¹²⁹⁾

3) 構造的側面

自我は一次的自律及び二次的な相対的自律の装置をあわせ持った葛藤外の領域であるが、発達の形成過程とそのまゝ、内包した層的な構造を有するものであることは上述した通りである。構造の内容は下層部から上層部に到るに従っていくつかの面で変比している。まず変容されて組織内にとり入れられ自我にとって動因となった派生衝動の中性比の度合は上層部に到るほど高度であり、又上層部ほど意識度が高いから、それ等の動因がその個人に

よって内面的に自覚されている程度も高まっている。従って上層部に行く程、自我によって社会的価値基準により適合する形で中性化され統制的に変容された形の衝動がかなり鮮明な意識的自覚の下に存在する。これが、“自我動因”(Ego motivations) 或いは、“自我興味”(Ego interests) と称されるもので、Rapaport, D. は個人の精神的構え(attitudes), 希望(wishes), 目標を目指す精神的努力(strivings), 価値感(values)等がこれに属するとする。^{77) 80) 129) 131)} 又、Hartmann, H. によれば、自我興味はエスに含まれる本能的衝動の特性に根ざしていることは確かであるが、だからと云って容易に逆戻りしてエスの法則に従って働くのではなく、これ等は自我が衝動と現実と超自我間には調停を達成することによって生成せしめられたものであり、従って自我の目的のために中性化されたエネルギー(neutralized energy)で作用するものであるとされている。^{80, pp136-138)}

次に、自我構造のPによって自我が機能する

仕方が連続的に異なった様相を呈する。これは所謂一次過程、二次過程の概念によって説明されるが、下層部に到るほどより一次過程に近い仕方で自我は作用し、又逆に上層部に近づく程、より二次過程的仕方で作用する。

そこで、これ等2つの過程に関する説明を簡単に紹介しておくと以下の如くである。
41) 77) 81) 129) 146)

一次過程 (primary process) は本来エスが活動する仕方であるが、ここでは、生々しい衝動が、快樂原理 (pleasure principle) に導かれて、即時的な欲求充足を求め奔放かつ流動的に活動し続ける。 (fluid-free drive energies) 自我の統制力は及ばず、思考様式も現実性や論理的法則性を持たない。
80) 128) 129) 自他の区別が不十分で両者が混同されている。これは精神発達の初期の段階に属し自我機能の未成熟な状態である。

二次過程 (secondary process) では上と異なり衝動が自我によって中性化され統制されている。従って、衝動 (この場合は生々しい衝動

よりも派生衝動が対象になる。)の欲求充足は、快樂原理よりも現實原理(reality principle)に従って迂回的間接的な仕方では果されることになる。思考様式も現實的合理的であり、自己内省的自覚を伴う。そして自他の境界が明確である。^{37) 128)}

以上の様に自我心理学における自我は器達的尸的な組織を有するものであり、最終的自律装置の学習的成熟とそれに加え、衝動・超自我・現實の諸関係がそのまゝ盛りにまねながら衝動も中性的に変容し得た手段(即ち防衛機制が成功して自律的な適応的自我機能に二次的に転じたもの)、中性化した衝動の内容(即ち動因)及びそのエネルギーをとり入れて連続的に構造を築き上げていくと考へられているところが興味深い。

4) エネルギー 経済的側面

自我は、リビドーや攻撃衝動のエネルギーを生じるのではなく中性化して用い、それによ

つて機能することはいすでに述べた通りである。
 。従って、中性化されたエネルギーをすでに
 どの程度備えているかと言うこととその後更
 に中性化しうる能力が問題になるわけだが両
 者は相互依存的なものである。そこで Hart-
 mann はまず一次的自律装置の如何、(例えは
 欠陥があるか否か等) と初期の自我発達のあ
 り方 (精神分析学では最初の養育者との関係
 が後の自我発達の土台をなすものとして非常
 に重視される。) がこの中性化の能力に重大
 な関係を有するものと考え、最初からこの能
 力が低く中性的エネルギーの貯池が下なけれ
 ば次の中性化を遂行する能力も当然低くなり
 自然自我発達が阻害される場合 (ある種の精
 神障害者等) も考察している。^{80, pp 192-206} 従って、基盤
 となるべき中性化の能力やその結果生じたエ
 ネルギーの備えは根本的に重要なものとなる
 がエネルギー全済の観点からすれば次のこと
 が問題とされるべきであろう。

ある防衛機制を反復して固着的に行使し続け

る場合、自我はそのために多大の中性的エネルギーを消費し続けることになる。これが衝動に対するエネルギーの“逆備給”(或いは反対充當とも云われる。 counter-cathexis) である。この逆備給は、専ら攻撃的衝動のエネルギーの変容を行って (deaggressivize) これにあてられるが、この変容能力に關係するものが、上述した基本的要因及び、超自我の欠陥(未分化な破壊性等が指摘されている。^(14) 80)) とされるが、ともあれ、逆備給が続けられる程それだけ“自我備給”(Ego-cathexis これは対象關係 - object relation - 及び自己内省や精神内界と弾力的にかかわる時の云わば能動的な、自我のエネルギー使用を指す。従って、未分化な或いは退行的なナルチシズムとは異なり、後者はもう一つ不明瞭な呼び方ながら、Self-cathexis ⁸⁰⁾ とも云われる。) が減少し積極的な自我機能が減退する。こうして対象關係が制限され縮小して来ると、防衛活動は本来外界との關係において衝動に對し行われている

ものである故、外部との関係が弱まるにつれそれだけ次第に脆弱になり不安定化することによって抑えられべきエスの衝動が自我領域に侵入し、中性的エネルギーよりも非中性的エネルギーに呑みこまれてしまう (flood)。これによって現実吟味力等自律的な対象関係をつかさどる機能は全体的に低下し (部分的にはいろんな形で残存するのが普通である)。
)、現実関係の障害 ^(4) 37) 60) 80) については現実喪失 (break with reality 或いは reality-loss) が結果されることになる。この時に防衛と対象関係等積極的な自我機能が相互に悪循環的に弱化し、この間防衛はたゞ不安定に脆弱化するのみならず、種類の上でも "拒否"、"投影" 等、より ⁸⁰⁾ 原初的な未成熟なものに変転して行くとされ、結局、逆備給、自我備給とも減退しエネルギー的にも疲弊して自律的な自我機能全体が次第に解体に向かう。この時に、防衛は二次的自律機能に転じる積極的な面と逆に中性的エネルギーも過剰に消費して自我全体も危機に

渉せしめかねない面をあわせ持つものであり、殊にエネルギー-至済の観点からは後者が問題とされて来る。^{80, pp191-196}又: Fiedern, P. は“自我境界”(Ego boundary)なる概念を提出し、更にこれについて、外界との境界を形成する“外的自我境界”(outer egoboundary)とエスや超自我と精神内界における非自我(non-ego)との間の境界である“内的自我境界”(inner ego boundary)の2つを考えたが、上記の如き自我備給の減少はこの境界に対するエネルギー-備給(boundary-cathexis)の減退を来すとする。³⁷⁾その結果、外的境界の備給が減ることによって外的現実の口味能力の低下、自他の区別の不鮮明化、外界に対する興味の減退及び現実感の喪失をきたし、内的境界備給の減少により衝動の侵略が生じて妄想や幻覚等が起り全体としてやはり自我組織がぐずれて行くの説明する。

5) 心理-社会的(psychosocial)な発達の

側面

自我の形成が力動的な現実関係を通して進められることはすでに述べた通りであり、外的現実即ち、生物学的・心理的・社会文化的な環境の重要性が強調されるが、この環境との関係そのものはあまり詳細に論じられておらず、又自我発達に精神内界 (intra psychic) に焦点を合わせて自我組織の機能的発展としてみ^{られて}来た。これに対し環境そのもの及びそれとのかいわり (現実関係 ≡ 対人関係) 方をとって詳しく研究し、社会的存在としてのあり方から自我形成を捉えようとするのがこの立場である。Idartmann や Kris, Loewenstein 等は、例えば先述した“平均的な予期される環境”等の概念によりかゝる観点からの理論化を試みようとしたが、結局これ等の理論は Erikson, E. H. によって補われねばならないとされる。Erikson の説はもう一つ全体として組織化されておらず、又いろんな用語や概念がそのまゝでは伝統的な自我心理学の中は明確

に位置づけられにくい点などが指摘されうるが、Freud, S. の生物学的に理学的なりびどー
 発達に忠実に並行させながら心理・社会的な
 発達も段階的に詳しく論じており、Freud の
 心理・性的観念 (psycho-sexual point of view) を
 更に社会的に拡張発展させたとも云われる。
 ここで何度か用いられる心理・社会的という
 言葉は結局社会的な現実との関係も意味して
 おり、そこに含まれるのは殆んど対人関係と
 考えてよい標である。

彼の環境概念はほゞ Hartmann 等のものと同
 標であり、生物学的欲求充足にかゝる面、
 心理的な意味での人間関係、文化的価値基準
 を担った歴史的社会的面のすべてを含むもの
 と考えられ、人は生れつき自分もとりまくこ
 うした典型的な環境 (平均的な予期しうる環
 境) に対して消極的積極的な意味で適応しよ
 うとする傾向を有するとされる。この環境と
 の関係において展開される心理・社会的発達
 の段階を心理性的発達段階に準じておつに分

け、これを“生活周期”(life cycle)或いは“漸
 生説的発達図”(epigenetic diagram) 各段
 階における特徴的な重要な対人関係のあり方
 社会的存在を適応的に実現していく過程を詳
 しく追完する。³⁶⁾それは段階的な各時期におけ
 る環境を代表する重要な人々(care-taking
 persons)とその時期特有の心理・性的成熟に基
 づく特別な欲求(phase-specific needs)を担っ
 た個人が関係しあうことによりその環境に伝
 統的な社会文化的基準に照して本来の心理・
 性的存在としての必然性を実現する手段を学
 び獲得していく。これが同一視(identification
)及び同一性形成(identity formation)と呼ば
 れるものであり、同一視による役割の獲得が^{そのための}
 基盤をなしているとも云える。各時期の解決
 はそれぞれ前時期の解決の仕方に強く影響さ
 れ、同時に次の時期における発展的な課題解
 決に影響を及ぼす。この点を理論的展開は所
 謂新フロイド派の文化論者のそれとかなり似
 通ったものとなるが、^{(57) (63)}異なる特徴は次の表で

あるとされる。即ち文化論者によれば個人は本来榮生学的な意味では非社会的 (asocial) な存在であるのに、軀によって社会性を与えられていくと考えられるのに対し、ここでは、個人は榮生学的に社会性を身につけていく (一次的自律の自我装置に因連づけられる) と考えられ、社会環境との出会いによってその榮現法を学び、榮現の仕方について影響を受けて行く事により (2) で述べた“機能の老化”と因連づけられる。) 社会のメンバーとして根を下ろして行くと考えられる。榮達段階は、心理・性的榮達段階である①口愛期②肛門期③男根期乃至は小児性欲期④潜伏期⑤性器期に対応させ乍ら、但し⑤を思春期と性器成熟期に二分し更に⑤の後者に3段階を附して計8つに分けられるが、その各期における心理・社会的な重要課題 (psycho-social crises) 又対人関係で重要な意味を持つものかとり挙げられる。それ等を一部紹介すると、

(1) 幼児期では、基本的信頼(対)不信 (Trust vs M-

istrust) , 母親的存在 (maternal Person) (2) 児童初期 (early childhood) では自律(対)にあり、疑惑 (autonomy vs shame, doubt) , 両親 (parental persons) (4) 学童期では、生産性(対)劣等感 (industry vs inferiority) 近隣及び学校の人々。 (6) 青年期 (young adult) では親密さと連帯(対)孤立 (intimacy and solidarity vs isolation) 友人、異性、競争相手、協力者。各々その時期に解決されるべき課題であり、環境を代表する重要な人々及び機関 (institutions) とされている。
36, pp 50-100)

そして思春期頃までに大体重要な人々との関係を通じての同一化による社会的不適応手段のとり入れは一通り済まされるがそれ等を統合し、真に自分のものとして身につける本格的な同一性形成は思春期末より始まり19才～24才頃はその形成をめぐっていろいろな葛藤や危機的状況が顕在化して来ると述べられるが、様々な同一化から同一性形成に向う経過は大体次の様に説明される。(“同一性”の意味は

まだ十分明らかにしていないが、その形成至^{36, pp 101-164}過を概略的に述べたのが最後にまとめたい。

)

○乳幼児期

母親的役割をもつとめる人 (mothering adult) との相互関係において子供は主に口唇を中心とする感覚器官及び筋肉の働きを通じて“とり入れ” (introjection 食物の攝取) と“投出” (projection 食物の吐き出し及び肛門期に達成される排泄) を経験する。母親的環境 (maternal environment) はこの程にまず生物学的次元で感覚的に豊かな満足を与える (sensual enrichment) から子供の生存を支持しはじめるわけであるが、かかる感覚的経験が恒常的に安定した形で与えられることが環境に対する基本的信頼感 (basic trust) を生み、逆に、こうした環境側の同一性が安定した自己感情即ち自分がいっつも同じであると言うこと (sameness)、まわりから支持されていると言う感情 (infantile narcissism) を子供に経験させ

る。この中に母親の体及び気質に因する初期の感覚的経験の同一性と連続性の如何は、基本的信頼感、幼児自己愛を規定し、これがその後、自我発達、自我の同一性形成の決定的な基盤となる。基本的信頼感に基づいてこそ、欲求充足を果させてくれる母親への同一化が生じ、それによって母親の用いる手段を自分の中にとり入れ行使するようになり、能動的な活動をせしづつ自己選択的にマスターし、自・他の区別が明確に観念化されえくる。そして、環境に是認された一個性的存在であるとの所謂自尊感情 (Self-esteem) が確立して行くが、かかる基盤が成立しない場合は、自他に対する不確実感、不信感が基本的な問題となりその後の発達に重大な支障をきたす。

○ 幼児・児童期

子供は遊戯年令や学令を通じて、家族、近隣、学校で年少児から大人に至る様々な年令、世代の人々と接触することにより実験的な同

一化をいろいろと行いながら、価値を認められ、いろいろ役割を多面的に試行してみる。こうした至験を多く持つことにより将来の自分のあり方を期待しはじめ、そのあり方の心理・社会的な適合性を至験的に確認していくことによりそれを自己同一性の一部とするに至る。

○思春期以後の同一性形成

これまでの発達過程で得た同一化群を集大成し (assembly) 又選択も行って社会人として受け容れられる新たな新しい自分のあり方を結晶させる (crystallization)。思春期に始まる本格的な同一性形成は容易な仕事ではなく、この期の末頃には一時的に危機化した状態を呈する。これまでに一応確立されていた可愛い少年少女 (little boy or girl) としての同一性が心理・性的成熟等を基盤として破壊され、飛躍的に、もっと成長した子供或いは大人的存在であるよう周囲から要求される。この際にこれまで比較的なだらかな至過をたどって

た心理・社会的発達がこゝで不連続化する
 ことにより精神的危機がもたらされる。この期
 にはこれまでの各発達段階における課題解決
 への努力の標式と、同時に各段階で残されて
 いる問題性が共に一度に再現して来る。勿論
 、新しい同一化を達成することによりそれま
 でのすべての少年的同一化群もそこに従属さ
 せ一人前の社会性を確立すると言う難事業が
 即座に果されうるわけではなく、おのづから
 ある猶予的な中間期間 (intermediary period) が
 暗々裡に認められており、その間に試行錯誤
 的な或いは遊戲的な同一化の試みが慌たしく
 繰り返り行われることにもなるが、これ等
 の事は、過剰同一化 (over-identification) や同
 一の葛藤 (identifications conflict) や同一性の松
 散 (identity diffusion) 等を出せしめがちであり
 、神経症的な同一性の葛藤 (identity conflict)
 、無政府状態的に病的同一化の出現する精神
 分裂病、更に又、反社会的性格異常者等の、
 価値に反逆した形の否定的同一性 (negative

identity)等を結果する温床にもなっている。
 かゝる深刻な危機を、たゞ単に一過性の青春
 期特有の徴候として脱し去ることが出来るた
 めには、乳児期以来の各段階における同一化
 の課題が解決されていなければならない。同
 一性形成は常に安全な土台 (safe pole) から土台
 へと云う一段一段を築き上げる形で行われる
 ものである。

以上、大雑把に“同一性形成”の過程を述べ
 たわけであるが、これは結局自我が、その素
 質 (Ego-apparatuses) に基づいて衝動を環境の
 基準に照して変容させつゝ、適応の能力を発展
 させ、社会的存在としての自分を構築してい
 く過程に他ならない。従つて、生物学的意味
 も多大に含んだ“とり入れ” (introjection) に
 始まる同一化の機制に負うところが大きい。
 が単に同一化群の総和ではない。Erikson は
 同一化による社会的適応手段の獲得のみでは
 十分機能的な人格は結果されず、同一化の機
 制が持つ有用性には自ら限界があるとしてい

る。同一化群の中からその個人にとって有意義なものを選択しそれ等を、ユニーフに合理的に凝集した全体的な形態に著化させ (Configurate) 恒常化するのではない。"同一性" は自分自身の中に個性の連続があること (persistent sameness within oneself — self sameness —, or continuity of personal character) そして他人と共に、ある本質的な性格を一貫して担いあっていること、この両方を含み持つことにより、自我に、個性の連続、人格の統合 (synthesis) への無意識的な努力 (strivings) を行わしめるとともに、集団の理想及び集団の持つ一貫した特性 (group's ideals and identity) からはずれないようそれ等との内的連帯性及び帰属性 (inner solidarity) を維持させる意味を有するものである。この様に、同一性 (identity) と云う言葉そのものにはあるあいまいな響きもまぬがれない点が指摘されるが、要するに、上記の如き生活周期における各期に特徴的な心理・社会的是様を至順しながら

自我が開放し又獲得して行く、社会的現実関係における、順応的及び能動的両方の意味での適応性を指していると考えられる。そしてこれは、身体的素値 (constitutional givens)、持ち前の衝動的欲求 (idiosyncratic libidinal needs) 恵まれた能力 (favoured capacities)、重要な同一化 (significant identifications)、一貫した役割取得 (consistent roles)、効果的な防衛 (effective defenses) 成功した昇華 (successful sublimations) 等を徐々に総合又再総合 (resyntheses) して発展的に構成して行く (configure) 形で確立されて行く。

同一性の感覚に満ちている時は前意識的に心理・社会的な幸福感 (well-being の感覚)、身体的なくつろぎ (at home) の感覚、安心して前進できる (knowing where one is going) 感覚、確かに人から是認されていると云う感覚をもたらし得られる。これ等の感覚は絶えず失われたり得られたりするものでもあるが、思春期以後、同一性確立を最大の課題とする危険な

時期（先述した通り24才位まで）を無事至過して行くことにより次第に連続的なもの恒常的な感覚となつて行くとされる。

又、同一性は自我の主體的な社会的適応機能の側面から見られた場合、“自我同一性”（Ego-identity）と称され、又、意識的な客体化された、自己像や自己感情的な側面からとり挙げられる時、“自己同一性”と称され、この二つの明確な概念化、区別はなされておらず、任意に交代して二つの言葉が用いられているが、同一性に自我的側面のみならず自己的側面をも考えようとしている所は興味深く、自我と自己との関係も考察する章でもう一度問題にしたいと思う。

ともあれ、“同一性”は個人のユニークな社会的価値及び、心理・社会的な発達の方史につながるものであり、適応的な、相互的対人関係の発展にとり基石となる重要な概念である。

以上、自我心理学における現段階までの自我

概念を、私なりに5つの側面から纏めてみたが、超自我 (Super Ego) 及び自我理想に関する考え、及びそれ等と自我との関係を次に簡単に補足しておく。

〔Ⅲ〕超自我と自我理想

自我心理学においては超自我そのものの形成及び機能に焦点づけた理論展開はなされていないが、Freud, S. は、社会・文化的影響が永久的にその個人内に内在化されて働くのを超自我或いは自我理想の機能として次の様に述べている。即ち、”子供の超自我は実は両親を模範としてではなく、むしろ両親の超自我に基づいて作られ、超自我の同じ内容をひきつぎ、結局、長年にわたる価値、伝統の担い手となる。……この様に世代から世代へと伝えられることにより、人類は完全に現在において生きるのではなく、超自我の観念は過去を不巧にする。種族や民族の伝統が、徐々に現在の影響を奪い新しい発達に屈服していく

ものでありながらも、それ等が超自我を通じて働くかぎり、人間の生活に重要な役割を演ずる。”そして又一方、“自我理想は集団心理学的理解への重要な道を開くものである。これは個人的側面と社会的側面とを持っており、家族、階級(class)^{62) 65)}、国家(nation)等の共通の理想でもある。”この様に超自我と自我理想は、Freudにおいては、特に明確に区別されず、同義的な用い方もなされているが、これ等が精神構造内で無意識から意識の領域にかけて連続的に存在する中で、無意識的な部分を前者とし、主に意識的な部分を自我理想と云う風に区別したり、又、種族発生的な面を強く有する方を超自我、個体発生的な方を後者とする等、両者を区別して考える立場もあり、殊に最近の傾向では自我重視の立場^{80) 121)}から両者が区別されようとしている。

超自我は、両親が有している、“一せねばならぬ”、“一してはいけないう。”を同一化を通じてとり入れることにより形成されるが、これ

は罰による両親の愛情喪失へのおそれに基づいて、むしろ自分の中に両親の態度をとり入れてしまうことにより、両親によって愛される幼児的な万能の状態(omnipotence)を再獲得しようとする機制から形成されていく。そして無意識領域に存在し、それ自身で力を有し自我の衝動に対する対処の仕方を厳しく管理する。時として、自我の自由な活動を拘束し、衝動に対する消極的な防衛体制を強化させ、神経症の中に見られる如き、自我機能の開放を制限する過度に強い超自我作用の例も存在する。それが権力を行使する仕方は、愛情喪失の不安や罪悪感を生ぜしめることである。この様に、超自我は個体発生的に初期のとり入れ(introjects)と関連して形成されるが、云わば、“盲目的”(blind)な道徳性を、頑固に報復的に懲罰的に担う内的な機関(agency)であり、その中には未分化な原始的内容が含まれるとされる。

これに対し、他方、自我理想は、やはり“一せ

ねげのぬ"と云う良心 (conscience) に相当するものではあるが、そして又、その形成の基盤を超自我のそれに置いてはいるものの、特定の厂的時期の理想とももつと可塑的に結いついており個体発生的な要因をより多く担っている。両親以外に、その後の成長過程で出会う重要な人々 (significant persons) との同一化を含み超自我より柔軟に、各発達段階に応じて修正されていくものであり自我の現実吟味 (reality testing) の能力と密接な関係をも有する。自我にとってあくまでも積極的な意味を持ち、超自我が自我に対して衝動の抑圧を強いがちであるのと異なり、むしろ昇華を助長するものである。又、超自我と異なり意識的である。^{(58, 80) (21)} Erikson は自我理想を自己同一性と比較して⁽³⁶⁾いるが、それによると、自己同一性は、各発達段階における心理・社会的危機を通して形成された"自己表象" (self-representation) を吟味、選択し統合したものである。それは、社会的現実の中での現に多少

とも達成されているがしかし永遠に修正されて行くべき、自己の現実感覚 (sense of the reality of the self) ^{36, p.129} である。他方自我理想は、それに向って努力されるべき、しかし永遠に完全な形で達成され得ないところの、自己にとっての理想的目標であるとされる。従って、上述した自我の層的構造において上層部を構成する意識的な自我動因と非常に関連の深いものであり、場合によってはその中に含めて考えてもよいものではないかと思われる。この様に自我理想は超自我と一た同じ起源を持ち乍らその後自我がその形成に関与するところ大であり、逆に又自我の社会的適応機能に積極的に加担し促進的役割を果たすものである。

〔IV〕自我機能の健全性と適応

自我機能の健全性は結局、上に纏めた5つの側面から把らえられるわけであるが、“自我”がそもそも、外的枠組より行動(広義の)を説明し、或る無意識にまで及ぶその心理的機制を侵

定するところから生じた構成概念である故、
 その機能は基本的にはここで総括した称に論
 究されるとしてもかゝる“自我”の機能を発
 現型としてとらえる時には研究者によりその
 次元等^{9) 10) 11) 12) 14) 36) 80) 100) 129) 130) 159)}にかなりの差異がみられる。“自我の
 強さ”(Ego-strength)と称するものの概念規
 定も、結局それは自我機能の顯在的及び潜在
 的な機能の健全性を指しているのであるが、
 そこに盛り込まれている側面及び次元が研究
 者によって多少とも違っている。ここでは、
 自我の概念についてはすでに総合的に基本的
 な考察を行ったのでもう少しその機能の発現
 様式の面から、より具体的に自我機能の健
 全なあり方及び病理学的な不健全性を示す諸
 現象も諸家の考えも参照して、まとめて考察
 してみるが、それによると結局次の称に諸側
 面が機能的発現の健全性にかゝるものとし
 てとりあげられて来る。

1) 現実吟味 (reality testing) : 現実をあり
 のまゝに正しく認知し把握する。そして客観

的な毎日を判断を下す。そうした能力である
 か、これは⁸⁰⁾ Hartmann, Rapaport^{(129) (130)} 等強人どの
 自我心理学者達によって指摘される。Baugh-
 man, E. E.⁽¹²⁾ 等はこれを知覚的技能 (perceptual
 skill) と称する大きな概念の中に含めて考え
 ており、又 Klopfer, B.⁽¹⁰⁰⁾ はこの機能をただ単に
 知的認識的な面においてのみならず情緒的な
 面をも、情緒的現実吟味 (emotional reality test-
 ing) として含めて考えている。

2) 対象 (現実)、関係の能動的な活発さ：
 これは、対象関係 (object relation) において集
 中的なとり組み方 (concentration) ができるこ
 と、注意のエネルギー充当 (attention-cathexis)^{(129) (130)}
 が十分備わっていること (これは先述した中
 性的エネルギーの一部である。) 外界に対し
 て敏感な感受性を有する⁽¹⁰⁰⁾ こと等である。その
 他、更に、情緒的な面で、現実と接触してい
 る感情、強い現実感覚 (strong sense of reality)⁽¹⁰⁾
 があること、感情を⁽¹⁴⁾ 二めつ対象関係が持つ
 こと (emotional involvement)^{80) (100)}、対人的共感性

(empathy⁽¹⁰⁰⁾) が生々として豊かに存在すること、
情緒表現が率直であること (spontaneity⁽¹⁰⁰⁾) 等
がこれに含まれる。

3) 制衡機能 (control) :

Beres, D.⁽¹⁴⁾ の述べる衝動の調節と統制 Baugh-
man, E. E.⁽¹²⁾ の衝動の制止 (inhibition) 等無意
識の衝動が自我領域へむやみに侵入して来る
ことのないう防壁に成功しているか否か、
その防壁の種類や、防壁が機能的変化 (change
of function⁽⁸⁰⁾) によって適応的に自律化 (automatiza-
tion) している度合、更に防壁の維持に反対充
当 (counter-cathexis) のエネルギーが消費され
すぎているかどうか、従って防壁が固執的
であるよりも柔軟な可塑性を有している程度
がここで問題となる。故に、エスの衝動も外
80) 100) 106) 147)
的現実や超自我の要請などと見合わせて必要
に応じて制止する作用も自我がどの程度自律的
に失敗なく又柔軟に効率よく行っているか
と云うことである。この中柔軟性、可塑性に
関しては、自我心理学で特に強調される点で

もあるので、特に一項としてとりあげることにする。

4) (制禦機能の) 弾力性:

これは先述した“自我のゆきに基づく一時的部分的な退行”の機能であり、自我が衝動の接近を反対充当によって防衛的に喰い止める一方ではなく、自ら随意的に衝動に接近することと認め、原始的な衝動を生産的機能のための本質的資源として利用し得るのみならず、この標にエスへの検閲(censoring)を一時的に弱め反対充当を軽減させることにより、その分のエネルギーが、意識化への過重(剩)充当(hyper-cathexis)にも与えられ得、エネルギー至済の見地にも適うと同時に、その過重充当エネルギーを用いて、自我が自ら退行状態を解いて再び現実水準の機能(二次過程)に前進することになる。^{80) 100) 129) 130) 159)}この標に随意的な柔軟性を有する制禦をどこまでなしうるかも自我機能の健全性に因する重要な指標となる。

5) 衝動の分化, 迂回的な欲求充足(衝動

解放 — discharge — の猶予) 法の発達 :

これは自我組織の発達と云わば等価であるが衝動が中性化され又社会化されて派生衝動に分化して行くに従い、短絡的 (short-cut) に衝動を解放させ欲求充足を果そうとするのではなしに、二次的な快感 (pleasure) を長期的な目標設定 (long-range goal) の下に迂路的に獲得することを目指す。予期 (anticipation) の機能や現実原理の発達^{80) 129)} がこれに関連づけられる。又 Klopfer, B. の述べる制御機能の中の外的制御¹⁰⁰⁾ も、社会的基準を配慮した情緒反応の制御を意味する以上、衝動解放の猶予及びその仕方が社会化されていることを指すに他ならない故、ここに含めることができよう。

6) 自我組織 (Ego organization) の発達 :

自律的な自我動因 (Ego motivations) や自我興味 (Ego interests) のヒエラルキーの出来具合がここでも問題となり、又二次過程の発達も含まれる。又 Erikson³⁶⁾ の考える同一性形成 (自我同一性及び自己同一性) がどの程度なされて

いるかと言う観点からでもこれに言及できようが、結局、自我が、その形成過程で最初の基本的な段階から決定的な外傷体験に見舞われることもなくその後の各形成段階を一つ一つ成功的に積み重ね乍ら“葛藤外の自我領域”をより広く形成し自律性を発展させている程度に因するものである。

7) 感情 (affect, 又は, emotion) のあり方
 “affect”とか“emotion”の定義はいろいろ論議^{(5) (13) 20) (100) (130)}をかもすと二つであるが、とにかく、精神力動の傾向 (psychodynamic tendencies) を示すものであり、既に述べた如く、自我機能及びその形成・発達に深いつながりを有する。感情は、自我、超自我との力動的関係の中にある衝動の欲求に基づいて生じるものであり、自我はそれと至極させられある機能的要請 (functional demands) が感情から発せられたことになる。しかし自我はたゞ単に受身的にその要請に従うのではなく自ら感情を馴らし³⁸⁾て行く (taming)。これが社会化され中性化された氷

生衝動の形成、衝動防衛の成功からそれを自律的適応機能に転せしめること等にも、対応するわけで、感情の分化、成熟は即自我機能の分化発達につながる。感情は馴致させられて行くことにより、単に心的力動の副産物であることから次第に密接に自我機能に加担する役割をとるに到り。例えば不安(anxiety)が自我にとり警報的働きをしたり、又いろんな感情が状況に応じて自我にある行為を促さしめる推進的役割をとる等する。結局、感情が分化し豊かになりと主体的に経験されており更に感情の嵐(affects storm)に吞み込まれ圧倒されずにある安定性(inner stability, security)と耐性(tolerance)を有していることか、自我の健全は分化発達や精神内界との柔軟な疎通性(intra communication)と有する健全な弾力的機能を反映するものに他ならない。⁽⁵⁾ ⁽⁸⁰⁾ ⁽¹³⁰⁾ Alexander, Dr. M. 等は感情(affects)を自我機能全体にかかわるものとして、その信号的作用及び生命(活力)的作用(vital function

も、現実吟味やコミュニケーション等の対象関係や、防衛、行動を生ぜしめる潜在的な動力 (motor potential) 更には記憶等の諸側面にわたり詳述している。

8) 自覚 (awareness) , 内省的自覚 (reflective awareness) : これは二次過程の発達、中性化された自我充当 (備給) のエネルギーの量及び至済を背景とした意識化への過重充当 (hyper-cathexis) エネルギー等により規定されるが、Freud, S. や Hartmann が述べる如く、思考や行動が外的現実のみならず同時に内的な精神の過程の現実によって決定づけられること、即ち、外界と内界が相互に交流し両方の現実 (reality) を綜合した形でなされること、典型的な自我の機能にとつて不可欠な条件であり、従つて外的現実のみならず内的現実をもよく吟味し正確に把握して、両方を綜合的にフィードバックする働き (或いは reflect back) が大切になる。これが自覚の機能に他ならない。

9) 思考:

精神障害は屢々思考の病理学によって理解されようとするが、現実的論理的な二次過程の思考様式の発達、可塑性、批判性、公共性、偏りのない調和、分化した詳細さ及び具体性^{37) 80) 100) 128) 129)}その他面抽象化の能力、観念性を有すること等が挙げられる。

10) 価値基準の許容的なさ:

これは先述した超自我もしくは自我理想の要素がかなり関係して来るが、自我があまりにも高い要求水準や価値基準を背負いすぎることにより生じた緊張感や罪悪感に圧迫されてい¹⁰⁾ないこと、許容的な道徳性^{37) 80)} (permissive morality) 健全な自己愛 (narcissism) 等を指す。

11) 一次的な自律装置:

自我心理学における自我概念で重視される点であり、これも既に述べたが、知能、記憶、隨意運動機能、知覚感覚等の固値、天賦の才能等、所謂先天的に備わった条件 (structural givens) ^{10) 80) 129)} 及びその成熟が二つ問題となる。

12) 生理学的な安定性 (physiological stability) 及び身体的健康:

上記の11)とも関係が深いと思われるが、特に Barron, F.⁽¹⁰⁾等は身体的な機能の健全性を自我のそれと関連深いものとしてとりあげている。

13) 全体的な調和及び機能の総合的な発現既に80~83頁に述べたと二つの総合機能や、平衡の概念が、多少不明瞭ながらこれに該当するが、Klopper⁽¹⁰⁰⁾の両面的な体験型や、能動的現実支配 (active mastery) と自己実現 (self-realization) の両立、又創造性、独創性、成熟等が関係して来る。

以上、自我機能の健全な発現性にかかわると思われる諸側面を、Hartmann, Rapaport, Klopper, Fiedern, Barron, Beres, Erikson, Symonds, Freud, (S.), Alexander, 等による様々な“自我の強さ” (Ego-strength) の概念を参照しつつ、まとめて見た。

結局、上記の如き諸側面がどの程度健全な発現の仕方をしていくかにより、適応性が規定

されるわけであるが、精神病理学的な適応異常とその自我の不健全化の問題は必ずしも理解が容易ではなく、神経症理論、精神病理論が十分統一をみていない、数多く存在する現状である。

まず、正常、神経症、精神病 (psychosis) という適応様式に明確な隔差を示す三群の精神病理学的な位置づけも未だ不明瞭で統一的な見解が得られておらず、自我機能の全体的な健全度が単に量的に異なるものとして理解すべきか或いは質的な違いを考えるべきか、又自我の中のどの機能の不健全化が特に問題とされるか等も十分明らかにされていない。しかし、ここでは自我心理学全般における精神病と神経症に関する見解の主要なものをごく概略的に纏めておく。

精神病 (psychosis)

衝動の中性化の能力の障害、従って自我供給のエネルギーの減少、貧困化を基本的な問題とする。この事には、一次的自律の自我装置

の欠陥、初期の自我形成の脆弱さや歪曲、更に又、外界の現実的圧力、ストレスが過当に強すぎることも時には関係づけられるが、いづれにしても著じるしい自我備給の減少、中性的エネルギーの枯渇現象(12) 37) 60) 80)と云う基本的自我障害が推定される。そこから内的外的自我境界の崩壊37)が次に結果され、即ち、前者は反対象備給(充当)の減少による防衛の弱化、又原初的な防衛法への変質によるエスの侵入、非中性的な衝動(エロスの又攻撃的な)の氾濫による自我の一戸急激な障害をもたらし、又後者は対象関係において、自他の区別を不明確化させ現実吟味の能力を損わしめると共に、対象備給の減少から、恒常的な生々した対象関係をも不可能にさせ初期の一次的な自己愛の段階(たゞ恒常的に欲求充足をもたらしとくれることのみを吾身的一方的に期待する対象関係であり、従って対象は未分化でかなり無差別的)に退行することから対象喪失(object loss)及び現実喪失(loss of reality)を

(4) 32) 60) 80)

もたらす。これ等の結果、幻覚や妄想が形成され、それを現実だと受けとると二つの“にせの現実” (falsified reality³⁸⁾) を築き上げ、空想 (fantasy) と現実が全く混同され、自我と非自我 (non-ego) の区別も消失して行く。又、生々しい衝動の活動による欲求不満と対象喪失との関係し合い、病的な同一視の氾濫³⁶⁾、即ち瞬間的に移り変る表層的対象関係を次々と作り変える現象等が結果される。快樂原則に支配された一次過程が圧倒的であり、本能的衝動の中におぼれている自我においては、その思考の機能にも障害が著じるしく認められ、観念と対象の識別力の障害、即ち言葉の記号性や代理性がなくなり言葉と言葉が表わしている物との関係が歪曲されたり、言葉そのものが物化してその言葉に突然新しい意味が生じたりするなどの抽象的思考等が不能になる。又疎通 (communication) の意味や目的なしに言葉が用いられたり、先述した“にせの現実”や“誤まった確信 (false certainty)” が横行

此に称する内容の所謂“魔術的思考”(magic thinking)が生じる。感情のあり方に關して云えば、精神病では現実との關係においても葛藤が生じやすく安定した状態が保ちににくく、又、衝動との關係でも、不安定な退行的防衛法により生々しい衝動の侵入を余儀なくされてゐる事等から不安は生じやすいが、いたゞうに感情がたかぶるばかりで(emotionalityが強くなる)それを自我にとつての信号(signal)として使用する状態には欠陥があり予期(anticipation)の機能に錯乱が認められる。全般に“現実との生きた接觸の喪失”等と云われる如く精神病では自我と外界との關係の障害が最も重くとりあげられ、それに比し精神内界との疎通(intrapsychic communication)と云ふ点では自我が本能的衝動の侵入に対する防衛力を減退させてしまつてゐる關係上ある意味では内的現実への洞察を正常者以上に有してゐる等とも云われる如く衝動と密着した關係にあるわけであるが、これも正しい意味では洞察

とか疎通と云うものとはほど遠く、殊に全体としてはいかんだまどまりのないうのとなる。正常な“弾力的機能”に比すれば、退行一方であり前進的 (progressive) な機能が認められない。中性的エネルギーの欠乏は意識化や二次過程的機能を促進する過剰充當のエネルギーをも消失させ、従つて、自覚や内省をも不可能にする。こうした自我の障害が生じてても、全体として均等に自律的機能が損われて行くよりはむしろ、その中いくつかは損われ、又部分的に健康な自律機能が残存する（一次的及び二次的に自律した自我装置の中のいくつかのもの）と考えられるのが普通であり、又一般に損われにくい機能（例えば、記憶や知覚能力等）も存在するとされる。^{(14) (37) (80) (103)} 従つて精神病では相対的にとて振けてよく維持されているもの (hyper function) 又逆に障害をきたしているもの (malfunction) という風に自律機能が不同であるとされる。そして残存する健康な部分及び先に述べた総合機能が自我の病的な崩

壊に向って抵抗しており、自我が疲へいし、
 次第に解体して行く過程の中でもいろんな段階
 における平衡維持への総合的努力が自ら試
 みられていると考えられているが、次第に障
 害が慢性化し精神の活動全体が不活発化して
 やがて最終的な崩壊、非可逆的な解体 (disinte-
 gration¹⁰³⁾) に向うとされる。以上が精神病にお
 ける自我の病態化の要因であるが、Idartmann⁸⁰⁾
 は、超自我や自我理想の形成における欠陥に
 もごく大雑把に触れている。それによると、
 あまり明確ではないが、超自我が野蛮で残忍
 性 (brutality) を有し、未分化で一貫性を欠き
 、自我にとって健全な指針となる標は自我理
 想の発達が認められず重要な同一化が原始的
 な支配力を振ったりして自我の現実的な対象
 関係等をかく乱する場合が指摘されているが
 これは次の神経症の場合ともいくらか似通っ
 ている標である。

神経症 (neurosis)

中性化された衝動のエネルギーによる自我充

当の減少は精神病においてのみならずこゝでも問題になるが当然減少度には違いがあり、
 精神病における如く衝動の侵入に自我が身と
 ゆだねてしまふには到らない。この真では精
 神病も基準とした程度差としてよりもむしろ
 正常者との比較において論じられている標で
 あり、中性化の能力の欠陥、自我にとって専
 用のエネルギー (independent psychic energy) の
 貯池の減少も精神病の場合の標に一次的自律
 装置の欠陥や自我形成初期の決定的な損傷 (
 damage) 等基本的な障害に規定されるものと
 してはあまり考えられていない標である。^{(14) (36) (37) (80)}
 むしろ自我違和的 (Ego-alien)^{(37) (100)} な衝動の防衛に
 消費する反対充当エネルギーの過剰な結果対
 象充当 (object-cathexis) の減少と云つたエネルギー
 至濟的見地からの説明がかなり一般的に
 見られる。精神病の場合外界の現実との関係
 の障害が中心的な病状を形成していたのに対
 し神経症では自我と衝動との葛藤が中心的な
 問題になっているが、このために、自我は衝

動力防衛に忙殺され柔軟に防衛をゆるめながら、
 より本能的性質を強く担っている諸衝動（自
 我組織のヒエラルキーの下層部に在する）と
 随意的な退行によって接近交流するゆとりを
 欠いており、先述した弾力的機能等はかなり
 障害されているものと考えられる。従って、
 Freud, S. 等が“神経症は内界への洞察（insight）
 の質を異化させている”⁶⁰⁾等と述べるのもこの
 点に関連づけられるべきことであろうが、他
 方、反対充当と相対的に対象充当が減少する
 ことにより安定した対象関係も障害され、現
 実の断片化の現象（fragment of reality¹⁴⁾）と呼
 ばれるものも出現する。これは精神病の現実
 喪失とは異なり、外的現実の方が本来衝動よ
 りも重視されているわけであるが正常者の你
 に現実に対し広く全体的に開かれ得なくな
 っている。即ち、‘精神的健康’人の場合は、①
 現実を広く正確に考慮し、生々と現実と接触
 すること（能動的でかつ安定した活潑な対象
 関係）と②外的現実から引込んで、精神内界

と深く接触すること（より本能的な性質の衝動からなる心的下部組織と疎通すること—

intrapsychic communication^{60) 77)} の2つを単一的に (single one とし^{106) 147)}て) 行うことにより、①は自我に対して、本能的衝動により圧倒されることから身を守らせ退行的傾向からより前進的 (progressive) 傾向に向って機能することを可能ならしめ、又逆に、②は自我を外的現実より一たん分離 (detach) させることにより、環境的ストレスから身を守らしめる。この共に両者は相互扶助的に働き合い、又エネルギー的にも固執的な反対充当と軽減させる等によりお互が相手の機能のためのエネルギーを生み出し合う形になって自我全体の効率の良、健全な機能を支えているわけである。これに比すれば、神経症の場合はこの2つが共に制限される事により互に相手の働きを妨げ合う関係にあると云わねばならない。

又神経症における反対充当エネルギーの過剰消費及び全体的な自我備給エネルギーの貯池

の問題に關して、³⁷⁾ *Fiedern* や ^{74) 75) 80)} *Hartmann* の次の様な見解も意外見落すべきでないと思はれる。即ち、中性的な自我充當のエネルギーの中にはリビドー的(エロスの)なもの(desexualized energy)と攻撃的ものの(de-aggressivized energy)とが適量に配分されていないと都合が悪く、防衛的な反対充當に用いられるのは主として、攻撃的衝動の中性化されたエネルギーであることが假定され、又対象関係の中で対象愛的なもの及び対自己(この“自己”は漠然とした意味)関係で健全な自己愛的機能や又衝動親和的な弾力性のある自我の働きに用いられるのが、上記のリビドー的要素のエネルギーであることが大よそ乍ら假定されている。^{37) 28)} 従つて、自我充當エネルギーの中、攻撃的衝動の変容されたものの割合が増すほど、固執的な反対充當や対象及び自己に對する攻撃的破壊的關係への充當が増し生産的關係を育てて行く働きが相對的に低下すると推論されている。こうした傾向が神経症独

得の“自己愛の欠如”(lack of narcissism)と
 呼ばれるものを生ぜしめ、自らの精神内界や
 更には外界の対象に対する“親和感情”(fami-
 liar feeling)の欠如、“しらじらしさ”(soberness³⁷⁾
)、“冷めたさ”等を結果するとも云われる
 。又、逆にこうした傾向をもたらす要因に、
 厳しすぎる超自我形成を考えるのはかたまり一
 般化された見解である。従って罪悪感や、衝
 動との葛藤から生じる不安感情等、感情のあ
 り方としては云わば陰性の方に偏った感
 情過剰が考えられるがこれ等は自我の働きを
 積極的に推進する方向に加担するよりも機能
 を制限する方向に働いてゐる標である。但し
 、一に神経症と云つてもそこにはいろいろの
 型が含まれる故、感情過剰よりもむしろそれ
 等を意識から解離しようとする知性過剰や運
 動過剰等様々な内容が考えられねばならな
 いであらう。⁽³⁾更に、総合機能に関して云へば、
 神経症では、精神病に比しはるかに高い水準
 での総合機能が維持されておる。又自律機能

の全体的な障害がむしろ正常者との程度差と
 いう次元で考えられていることにも基づき、
 不健全比に抵抗して平衡 (equilibrium) や総合
 (synthesis, integration) ³⁷⁾ に向おうとする努力も
 活発だとみなされている。又、Erikson の心理
 ・社会的観念からは、先の超自我及び自我理
 想の形成とも関係するが、社会的是認が十分
 与えられず、それは厳しい自我理想 (超自我
 的意味ある) の強い力の) の形成を促進しても
 、自己愛及び対象者を充足させる面が不足し
 自我同一性の形成が障害されることにより、
 “生存を環境から是認されていると云う自尊
 感情 (self-esteem)” の育成を妨げると考え
 られており、殊に Freud, S. の伝統に従いエド
 ィプス期の葛藤解決等が重視されている。

以上自我心理学における精神病 (主に精神分裂病)
) 及び神経症についての見解をごく大雑
 把にまとめたが、両者の中に含まれる病型の
 差異については言及せず全般的な概略を述べ
 るにすぎないものと云えよう。後に本研究の

対象について実証的研究結果と合わせて再考察する。

<第4章>「自我機能」と「現象的自己」との関係について

これまでの第1, 第2, 第3, の各章では,

(1)「自我」と「自己」即ち, Ego と Self とは用語的にも又概念内容においても未分化な錯綜した面を有しつつも、一方前者を主体的機能の過程 (Ego-as-process, Ego-as-doer) とし、後者を現実至験が主観的意識的に客体化されたもの (Self-as-object) として考えるべきであり、この標本基本的区別は人格心理学的にかなり一般化された一つの通念ともなり、あること、そして(2)「自己」は自己心理学において現象学的な立場を基盤として理論的実証的に研究され、他方(3)「自我」の機能については、Freud, S. 以来の伝統的精神分析学を継ぐ自我心理学における理論的及び臨床実践的研究が積み重ねられているのを見、2つの概

念を別々に考察し纏めてみた。しかし、「現象
 的自己」という内的枠組と、「自我機能」と云
 う仮説的な構成概念を用いる客観的外的枠組
 の2つをよりよい適意理解のために用いるこ
 とを目的とする本研究においては、両者の関
 係を理論的に基礎づけることが最ipの中心的
 課題となるが、この2つを本格的に関係づけ
 ようとする理論は未だ見当らず。同じ self で
 も Jung, C. G. ^{94) 95)} の述べる標_心的機構全体 (psychic totality) としての self と Ego (この場
 合の Ego は本研究で纏めた自我の概念に比し
 狭い内容のものである。) との関係に関する
 研究がやはり精神的健康 (mental health) という
 観点からなされているもの^{92) 93)} のそれもこゝで
 直接の参考にならない。

とにかく「自己」と「自我」とは全く別個の
 立場で夫々一方のみが研究され、各立場では
 一方片方のみが人格における最も重要な概念
 換言すれば適意機能をつかさどる中心的な
 のと考えられて来ている現在、両方をただ安

易に合わせて用い標とすることは、本来同一次元で考えられて来なかったもの、起源も異なる2つの概念を、勝手に同じ平面上に持ち込み、それ等をたゞ單純につなぎ合わせると云うあやまりを犯すものである。しかし、私がここにてこれ等2つの枠組を総合的に用いた研究を試みようとするのは、序論でも述べたところの臨床心理学的実践において治療的立場と診断的立場との間に何らかの統一性を得ようとする期待のみに基づくのではなく、人格適応の理解をより妥當なものとする上で、これ等2つを総合的に用いることが必然的に求められ、その必然性は、まず「自己」理論及び、「自我」理論の中に、既に夫々認められると考えたからである。

即ち、自己心理学においては、「自己」と一応区別する主体的機能の過程を云わば漠然と背後に考えるか、或いは結局「自己」と未分化な形で「自己」の中に機能的執行者 (doer) の面を混入させて考えているか、いずれかの傾

向が諸理論に認められる。後者は、より具体的には、先に「自己」の人格内での位置づけ及び適応的意義に関連して述べた所であるが、「自己」が自らを維持し高めようとする要求(need)を有しており、この要求に基づいて人格に一致した統一の姿を与え(即ち、「自己」に一致しない経験は意識から除外すると云った選択的無関心性等により)、又発展的な方向に人格を導いて行く(「自己」が自らを高め開発する動きを、機会を利用して行く事により)と言う作用、又、「自己」が現実経験をありのままに広く正確に認知し意識的に象徴化(symbolize)して行くことが可能であるか否かが、適応にとって必要な「自己」の条件とされるが、その象徴化の働き等が結局、若体であるべき「自己」の中にいつのまにか含めて考えられているのを指している。従って、本来若体である「自己」もその理論の中で云々は唯一の重要な中心的概念として据えられている自己心理学においても、主体的

機能の概念が、不明瞭ながらとり入れられてしまつてゐるのを見る。このことには、自己研究において無意識的自己 (unconscious self) とか本来の基本的自己像 (basic self concept) 等現象的な観念を越えた研究が試みられようとする傾向が比較的最近の自己研究の動向として認められることも関連づけられようが、これ等はすべて、自己心理学自体が意識的自己のみに焦点をあててゐるのみでは事足りなくなつてゐることを示すものと解される。

又他方自我心理学でも、エスに因する詳しく、研究、これや超自我、そして自我向の精神内力動に因する深い研究を積み重ねながら、更に外界の現実を詳しく分析し、結局対外界との関係及び対精神内界との関係を同時に力動的につかさどる自我の働きに焦点つけた研究を發展させるに伴い、無意識戸から意識戸への連続して層的につながる自我組織及びその形成を考へて来るの強みと無意識を中心としこれを詳細化しようとする研究に加えて意識的

下層にも興味があり、自我動因 (Ego motivations) の意識層に到るヒエラルキーや、意識的な自我興味 (Ego-interests) 等が研究されようとしている。勿論、これ等の自我興味のカ動の意味や有効性 (efficiency) については十分研究され盡しておらず、この事は Idartmann も認めている^{80, p.138)}。その他にも、新フロイト派の本格的な自己重視の立場はもとより、自我心理学における“自己表象”、“自己至願”の概念等まだ未発達ながら、意識的主観的な至願への関心が増しているのを認めるのは容易である。又、Erikson³⁶⁾ や Fromm³⁷⁾ 等は最初から自我と自己をかなり未分化な形で用いるが、これは既に見た様に Erikson では同一性 (identity) の概念が自我同一性としても又意識的な主観的側面としての自己同一性としても考えられており両者が交代的に用いられること、又 Fromm においては、“自我は主体 (subject) であると同時に対象 (object) である。即ち、自我 (Ego) は意識の担い手であり、個人は自分自身

の自我を意識する。--- 経って主体としての自我は様々な形で経験され、現実的に感じとられるものである。(actual sensationがある。)

^{37, 39)} ”と述べているが、自我は個人にとって1つの主観的経験(ego-experience)であり、それは本人にとっての現実(reality)として自我感情(Ego-feeling)又は自我感覚(Ego-sensation)とも名づけていること等がそうである。

この標に自己心理学での意識的現象的な枠組から無意識の方向へ、又自我心理学での無意識的な深層の研究から更に意識的側面をもと云う傾向を各々の文脈において大雑把に認めえまいと考えられるが、その場合、いずれにおいても、相当未分化な形で夫々、主体的機能の配慮、又一方では、意識的な主観的経験の面への関心が認められ、殊に自己心理学での無意識面の配慮としては、これを自我概念と照合させた場合、たゞ自我の防衛機制の一部のみが同様に漠然と問題にされているにすぎない標であり、自我心理学における意識

面への関心に比すればいかにも発展性が少ないものに見えるが、いずれにしてもこの標に未分化な考察の仕方が認められることは研究上の未発達さの問題以外に、自我と自己とが互に明確に割り切り別々のものとしては考えられない密接な関係にあることが関係してゐるのではなからうか。従つて、上に述べた自己心理学及び自我心理学の一つの動向は、それぞれ、全く別の次元及び枠組で進んで来たものである故、お互に相補う歩み寄りの傾向を示すものとしては考えられぬ。又各々が相手側の枠組をとり入れる形でこうした動向を示してゐるのでもなくて各々の立場はあくまでも各々の立場であるに違ひないが、結果的には「自己」及び「自我」の各一方を重視し研究の焦点とするにとどまらなく乃至はとゞまれなくなつて来てゐるのを認めないわけには行かない。

故に、本研究では「自我」と「自己」とを別個の対立的な概念として扱う段階からもう一

歩進んで両者の関係を積極的に考察する方向に進みたい。これ等二つの関係は既に才2章及び才3章で行った理論的考察の過程を通じていくつか示唆されるものかあったと思うが、自己概念についての理論的実証的研究を見ず自我機能全般について理解を進めると云う風に両方向からの考察を行ったことにより、却って両者の関連性が自然な形で浮かび上がって来ると思われ、次に、形成、構造、機能の3つの観点から両者の関係を纏めて考察してみよう。

(1) 自我形成と自己形成について
才2章の[3]及び、才3章(II)の2)と5)において夫々、「自己」及び「自我」の形成を論じたが、両者の形成は似通った又対応性のある過程をたどることも認められる。Erikson²⁶⁾の同一性形成の理論からもうかいては、両者は密接不離な関係(これは次に述べる構造及び機能の面と合わせて論じられるべき問題であるが)の下に表裏一体的に形成されるものと考え

るべきであろう。即ち、乳幼児期から成人に
 いたる各発達段階において、置かれた環境に、
 さわしい仕方で欲求充足を遂げる方法を、環
 境を代表する主要な人物との同一化を通じて
 とり入れる過程がそうである。それは一面か
 ら見れば、環境即ち対外的現実の基準及び同時
 に形成されて行く超自我の要請の下に衝動の
 活動を制御して行く方法を体得し、成功的な
 防衛法を二次的に適応機能に転せしめ二次的
 自律の自我機能として、主に一次的自律の自
 我装置からなる“葛藤外の自我領域”に加える。
 この領域(即ち自律装置)を形成して行くこと、
 又衝動をより社会化し中性的に受容し、又それ
 等を標々の段階の派生衝動としエネルギー的
 にも又自我動因としても自我組織を築いて行
 くこととなる。もう一つの側面からみれば、
 「自己」像の形成即ち、同一性と自己意識の
 面から眺めた自己同一性の形成過程となり、
 対人関係を通じて他人と区別される個性的な
 しかも同じ環境に共存する他人と本質的な面

のつながりうる共通的な性格を担った（つまり社会的に承認されうる）自己の諸特徴を自ら経験し、意識的に自覚して自己像を凝結させて行くこととなる。この点に「自己」は発達論的に見ると「自我」の心理社会的適応機能の発達過程を通じて「自我」形成と密接な関係のもとに形成されて行くものであり、云わば「自我」のできばえをそのまま反映するものでもあるが、この現象的自己を直接的に生成せしめる機能、即ち自分自身を客体視する自我の機能は二次過程に属する内省的自覚の機能（self awareness, reflective awareness）である。これには一次的自律装置（primary autonomous apparatus）に基づく記憶の機能が大きく関係しており未発達な自我ではこの記憶がすべて衝動のまわりに形成され、幻覚的心像等衝動優位の観念として存在するのみで現実とのつながりを欠く一次過程独特の性質を強く担っている。⁽²⁹⁾しかし次第に言語の獲得（欲求充足のため社会化された間接的手段）等に伴

い二次過程も発達させて来ると記憶が現実とのつながりを持って意識的に概念化されるに到り内省的自覚もここから生じるとされている。この内省的自覚とは換言すれば、自分自身に關する現実吟味 (reality testing) の機能でもあり精神エネルギー的には過剰充當 (hyper-cathexis³⁷⁾)、内省充當 (reflexive-cathexis³⁷⁾) がこれに与えられる。自我はこの自覚作用によりともかく自分に関するあらゆる事柄も意識的な現象野 (phenomenal field) においてフィードバックし続ける。こうして作り出されて行く「自己」の内容についてはすでに第二章で述べた通りであるが、その中には対象関係及び精神内界との力動的関係等全般的な自我の機能そのものについての鏡映像 (the reflected or looking-glass self²⁸⁾) も含まれ、これは「自己」の中でも James 等によつては中心的位置を与えられる重要なものである。自我は発達を続ける限り、自己を生成しそれを維持し更に高め発展させて行く。自己はこの標に自我によつてお

のづと生成されるものであり、従って Idartmann
 が、^{80, p36)} “自我興味(この中には自分自身に肉す
 る目的が含まれ、これには「自己」に相当する
 面が考えられる。)は精神組織の発達を示す
 ”と述べる如くどの様な自己を生成せしめ
 得るかは自我機能のあり方、健全度によって
 規定される。尤も、自己形成には超自我や自
 我理想も関係し、これ等は自己批判(self-criticism
)等の形で作用することは無視されるべきで
 ないが、超自我の作用は既に自我形成の中に
 含まれており、こうして超自我作用を含み持
 った自我がより直接的に自己形成にかゝる
 ものと考えてよいだろう。ともかく自我はそ
 れ自身の能力に応じて自己を生成して行き、
 作り出された自己をみずからの映像としてフ
 ードバック的に用いることにより自我自身の
 機能を整え修正しより発展させて行くのでは
 ないかと考えられる。逆に、これを自己の側
 よりみれば、「自己」は自我によりたゞ受身的に
 用いられるものと言うよりは、自己自体が、

一旦生成せしめられて後は、それ自体が独立して自律化し、逆に自我に対して強い影響力を有する標になると考えることも可能であろう。これ等については次の構造及び機能に関する側面から更に考察する。

〔2〕「自我」と「現象的自己」との構造的関係について

自我心理学における自我の構造が、Freud, S⁹⁾の精神構造及びその中の自我の領域とどの標に関連づけられるかはもう一つ明らかでない。Freud の精神構造図はただ主としてエス、超自我、自我の、無意識から前意識、意識にかけての精神領域における位置関係を示すものにすぎないとも考えられ、自我自体の構造については殆んど論じられていない。一方自我心理学における自我は既に見た通り、生得的な自律的自我装置を基盤としその成長と共に地方、衝動を手なづけ社会的適応的に変容させつゝ、その変容の手段を二次的に自律化し適応機能として自我装置に加え同時に変容

した派生衝動を標々なレベルでとり入れてそれ等も自我機能のためのエネルギー及び動因として行き下り、みずからの組織を作り上げて行く。従って、Freud's. の自我よりははるかに大規模な、無意識から意識に及ぶ連続した尸的構造を有するものであったが、この事以上に例えばこれを図示するとした場合どの様な構造図となるか等は明らかでない。従ってこの標に十分明確化されたとは云えない自我構造と、他方、意識の鮮明度や周辺—中核の概念によってその構成が考えられているにすぎない「自己」とを構造上早急に結びつけようとするのは危険であり又、無理な問題でもあるう。

それ故、両者の構造的連関については大雑把な推測を試みることになるが、ここでは次の標に考えてみた。既に第3章(2)の3)で述べた如く、自我構造は上尸部に至る程、社会化・中性化の度の高い派生衝動がより鮮明な自覚の下に、自我動因、自我興味となるたものか

ら構成され、これは Idartmann や Rapaport に
 より自分に肉する或いは外部の他人や物に関
 する目的や希望、或いは又超自我が肉与して
 生じるとされる価値感（倫理や真実に肉する
 もの等）等から成ると述べられるが、^{80) 131)} これ等
 をすべて唯己の概念における「自己」の内容
 として含めることも可能であろう。しかし、
 そもそも自我興味に肉する考察は不十分であ
 り、又この概念と Erikson³⁶⁾ の「自己同一性」に
 おける「自己」の概念（これも大雑把であるが、
 身体的・心理的・社会的存在としての自分の
 認識と規定 — self-definition — とされている。）
 との関連づけもなされておらず、この2つの
 概念の中では、「現象的自己」は後者とより直
 接的に関係づけられうるものと思えるが、い
 ずれにしろ、現象的自己は、構造的には自我
 の下層部よりも上層部とより密接なつながり
 を有するものではあろう。だが、そのまゝ上
 層部のどこかに、即ち、自我興味の中のどれ
 かに或いは自我興味をその内容に凝集させて

含み持つ、より上位のものとして、直接位置づけ自我構造の中に完全に含ませるよりもむしろ、或いは既にまとめた自我構造と非常に密着し、はいても自我にとっての鏡映像的性格から、むしろ自我構造（これ自体が十分明瞭化されていらないが）に埋没させたり、強いてどこかに直接位置づけようとしないう方が今の段階では無難ではないかとも考えられて来る。自我興味が自我組織に含められる以上、「自己」もこれに關係づけられるべきであろうが、簡単に自我興味と同様な位置づけかなされるべきかどうか。これは今後もっと慎重に詳しく研究したい。しかし、いずれにしても構造上も密接な関連を有し、自己は自我の組織全体の中で重要な位置を占めること、又、次に述べる如く、自我にとって重要な動因となるものであることは明らかであろう。

〔3〕「自我」と「現象的自己」との機能的關係について

自我が、本能的衝動の活動、超自我の要請、

環境の現実的要請の三者の葛藤を能動的に解決することにより生ぜしめた変容された派生衝動を動因とする自律的適応機能の獲得により、その組織を榮展的に築いて行きながら、それ自身の姿を自己像に反映させて行くのは既に何回か述べた。従って現象的自己は自我の到達点をもそのまま反映するものであり、これ自体が、現段階までに達し得る最大限の中性化・社会化の度合も含む派生衝動を自律的動因として含み持つと考えられるべきであろう。

。現象的自己は、その個人の生物・心理・社会的な適応標式及び適応能力を客体として具現すべき性質のものと考えられ、更に、自我にとっての自律的動因としての意味を担うことにより、自我機能を方向づけそれを活性化(vitalize)する役割をも自づと有するものと考えられる。この点、「自己」は「自我」にとって重要な意味を有するわけであるが、前者は後者に対してどの様な影響力を持つのか、換言すれば、後者が既に有している様々な自律

的機能(第3章で述べた内容のもの) に加えて、前者との関係においてつかさどる機能とはどの様なものか。即ち自我は何のために「自己」を生成し、「自己」を自らのどの様な機能に役立ていいるかについて考察してみたい。

この問題に関連してとり挙げられるのが、先述した総合機能である。これは結局、対現実関係、対精神内界との力動的関係のすべてを調和的に統一し (fitting together⁷⁷⁾) 環境と個体との間、精神組織の諸要素間、自我の諸機能間全体にわたる平衡をもたらす機能とされていたが、このや、漠然とした広範囲に及ぶ機能の中でもう少し限定されたより明確な形で機能を考えたい。それは第3章[4]の131頁以降で述べた対象関係と、精神内界との統制的でかつ親和的な疎通の機能とを単一化して行いうる基本的な自律機能の健全性を基盤とし主観的客観的に社会からは認識された形で個性を一貫して発現して行く存在であることを可能ならしめる機能、即ち適応的な統合機能と名

づけた機能である。結局、自我はみずからの機能、即ち上述の内省的自覚、自分のことを認知する機能等によって「自己」を生み出すが、この事自体の中に既に、こうした統合機能への志向があるのではないかとすら考えられ、この標にして生成した「自己」にのって自我はここで定義づけた統合機能をつかさどるものと考えたい。自我はみずからの機能を維持し更に発展させて行くために「自己」を必要とするのであろう。「自己」をみずからの鏡映像として見ることにより自我はみずからの機能を整えその個体を生物・心理・社会的に統合された存在たらしめ、そしてそこから更により高次の段階へと個人の可能性を開発させて行くと考えられる。「自己」はこの意味で、自我にとって不可欠な存在であり、現段階で自我の適応的統合機能の重要な指針となり今後の自我の発展方向をも規定するものである。この標に適応的統合機能は、自我の他の機能と異なり、生成された「自己

」と常に対照させ両者の関係に基づいて理解されるべきものと考えられる。自己心理学において主体的な機能を背後の欲求概念或いは動因概念として想定し無意識面への研究を進めようとしたり又漠然と主体的機能者の意味合いをその「自己」の概念に含めてしまったりしていること、又自我心理学において自我組織の意識的な上層部をもっと詳細に研究しようとしたり又「自己」の概念を自我と未分化な形で想定したりしていること、これ等は共に統合的機能を考えようとする方向に向っていることを示すと同時に、かゝる統合機能を考えようとする時には主体的機能に属する枠組と客体化された現象的自己と云う内的な枠組といずれか一方のみでは不十分であることを示すものと解される。

そしてこの様な機能により人格が統合された状態は Erikson³⁶⁾ の述べる同一性の感情 (identity-feeling) に近敵するものは何だろうか。即ちそれは①心理・社会的な幸福感 (well-being の

感情) の様なもの ② 身体的なくつき (being at home) ③ 安心して前進できる (knowing where one is going) 感じ ④ 他人から是認されていゝとの感情等に裏づけられていゝと考えられる。

従つて例えば、自我が「自己」を拠りどころとし、又「自己」に動因としての役割を担わせ乍ら統合的機能をつかさどり上記の如き統合された適応感を得ていゝ状態と云うのは次の様な形をとるものであらう。

即ちある個人 A が、自らの素質に基づき衝動を環境の基準に照して変容させつゝ、適応能力を^{ある}発展させ社会的是認を得ると共に个性的で人格を一貫して表現させて行く現在までの過程で「自分は「有能な指導者である。」との現象的自己像を形成するに至つたとする。するとこの自己像が自我にとって自律的動因としての意味を担ふことになり、A は一貫して「有能な指導者」であるふう自然にふるまふ様になる。即ち自我がこの自己像を指針とし

て杯々な行動もそれに向つて方向づけ、Aに「有能な指導者」たる一定の姿を与える。そこでAはこの自己像に沿った動きをとることにより上述した同一性の感覚を得て行くこととなる。

この杯に、現象的自己と自我とは、その生成及び形成、又構造的意味において密接な関係にあり、そして両者が互に表裏一体となつて適応的な統合機能をはたすことが考察された。

〔4〕両者の関係のあり方と適応について以上、現象的自己と自我とが自己心理學及び自我心理學の動向の中にも示唆されている如く本来別個のものと割り切つて考えられるよりも相互に密接不離な関係も有するものとして両者を合わせて考察することの必要性を述べ、両者の関連をその形成、構造及び機能即ち統合機能の面で認めた。特に人格に適応的な統合性をもたらす意味で両者の関係が重要であることも考察したが、これは正常な発達を遂げつつある人格を一応のモデルとしたも

のであり、この様な「自己」を生成せしめうるかは自我機能の健全性によって大きく規定され、地方又、「自己」のあり方が自我の統合機能に重大な影響を与える。

それを指針とし統合機能を遂行し得る様な「現象的自己」を生成しうる自我はそれ自体の全体的な自律機能の水準が高くなければならず又、⁽⁸⁰⁾ Hartmann や ⁽¹⁰³⁾ Menninger 等が総合 (synthetic) 機能或いは平衡 (equilibrium, homeostasis) の機能と称しているところのどの適応レベルに於いても一応考えられるべき働き（これ等の概念は先述した様に本研究の「統合機能」に比すればもう少し大がかりなものでより漠然とした内容を目指すものと考えられるが）に習って一応いふんなレベルの適応の中に様々な段階での統合の可能性が考えられるとしても統合への努力及びそのための自我のエネルギー一備給の面でのゆとりが基盤になるものとして考慮されねばならない。従って、自我の全体的な自律機能に於る章(四)で述べた如き程

度差の問題。精神病理学的な意味での健全性の問題が含まれる以上、生成される「自己」にも様々なあり方が考えられ、又更にそうした「自己」が指針となって営まれる統合機能にもいろいろな程度、精神病理学の問題が考えられねばならなくなるであろう。

それでは、結局のところ、自我の統合機能は一定「自己」を介してはいるもののみずからの全体的自律機能の健全度によって全面的に規定されそれと正比例的關係にあるとして片づけてよいのだろうか。私自身は、確かに前者が後者によって規定される度は非常に大きいと考えるが、自我が「自己」との關係において営む統合機能は全体的自律機能に直屬させられてしまえば「自己」を括弧内に括、ても同じとするよりは、「自己」は統合機能にとり単に媒介変数として以上の意味を有し一旦生成した後は独立的な影響力も持つと考える。これに加え、自我及び自己の研究法にはおのづからある限界及び未発達な問題が

含まれる故、結局、統合機能の研究には目下
2つの枠組が必要となろう。

そして又適当(序論で述べた様な概念内容の
もの)と最も直結した重要な意味を有するの
が、自己心理学及び自我心理学における理論
展開から見ても、この統合機能だと考えられ
る。

次に自我のかゝる統合機能に役立つ「自己」
とはどの様なあり方のものであらうか、その
条件はやはり先に纏めた自己心理学及び自
我心理学を総合すれば以下の2つに要約され
ると思う。

即ち、1) 自分自身を正確に写し出してゐる
こと。

2) 受容的、自己尊重的感情に裏づけ
られ、それ故狭い個人的枠内のも
のではなく社会的価値基準による
是認の意味も含むものであるこ
と

1) は既に述べた通り自我の内省的自覚に基づ

く自己観察 (self-observation) , 自己検討の機能によるものである。自我は観察者・認知者であると同時に自ら観察・認知の対象ともなる。2重の役割を有するが、自我が客体比された「自己」を統合機能のための指針とし得るためには自我自体もその中で正確な鏡映像としてとらえられていなければならない筈である。又別の云い方をすれば、自らを正確に客体比しうるだけの機能を持った自我でなければ、それに望ましい統合機能を期待することは無理としなければならないとも云えるであろう。2)は健全な自己愛としかもそれが社会化されたいのであることを指している。二の条件を抜きにしては、個人の存在を支持し、より適応的な方向への発展を可能ならしめる働きを自我機能にいと望ましめることは期待できないであろう。

この2つの条件が「自己」の中でどんな風に満たされているかにより自我の統合的機能は規定されると云えようが、この条件の充足自

体が現象的自己像に因する資料を吟味することのみでは検討し盡されたいであろう。即ち特に1)がそうだが、客観的な枠組から得られた自我機能に因する資料とのつき合わせが必要となる。又先述した如く逆に自我の側からも統合機能を検討するためには目下のところ「自己」との照合が有力な方法と考えられる。結局、「自我」に因する資料と「自己」に因するそれとをつき合わせる事により「自己」のあり方それ自体が明らかになり又「自己」が自我に対して持つ意味が正しく理解されることになる。そしてこのことにより自我の統合機能を吟味することも可能になると考える。この際、統合機能をより十分に果し得るための自我側の条件は、既に触れた通り、この統合機能以外の全般的な自律機能の健全性には他ならないであろう。

この様な条件を「自己」及び「自我」の側に夫々考え、この点から両者を吟味しつゝ、2つの資料をつき合わせることにより自我の統合

機能を検討すること、それを通してはじめて人格の適応性が的確な意味でとらえられるのではないであらうか。

たゞ、この様な統合の概念（即ち、integrative function と仮りに名づけておくが、対象関係と精神内界への統制的疎通とを単一的に行いつ、生物・心理学的な個性も主観・客観的に社会から是認された形でしかも持続的に発現せしめて行く機能）及びこれが適応と最も密接に結びつくとの考えはこれまでの自己及び自我に関する理論とくらべかけ離れたものではないにしても現段階では一つの試論である。従って自己と自我との関係のあり方を統合と云う見地からみて、具体的な適応状態と結びつけ詳細に論じる統合、及びこれと適応との関係についての研究のために綿密な仮説を立てるのは容易ではない。だが予め次の事は考えられる。即ち、正常者と、神経症・分裂病等との間には統合機能に明らかな違いが認められ、それは前者が「自己」側及び「自我

「側」の諸条件をよりよく満たすことに裏づけ
 られている筈である。神経症と分裂病との違
 いについては、前者は「自己」側の条件 2) に
 おいてより問題となるのに対し、後者は「自
 己」側の条件が 2) よりもまず 1) において既に
 問題となり、そうした「自己」を生成せしめ
 ている自我機能の全体的な自律のレベルが神
 経症の場合より著いしく低下しているのを
 認めざるを得ないだろう。いずれにしても、不
 適な 2 群では「自己」は自我の統合機能に満
 ち足りていない形のものであるだろうが、この
 2 群間においても「自己」が「自我」に対し
 て持つ意味には各々特徴的な違いが存在するこ
 とと思われる。結局 3 群はそれぞれ異なった
 「自己」と「自我」との関係のあり方を示
 し、統合機能に違いが見出されることであらう
 。しかしこの事は次章で述べる如き本研究の
 全体的な目的及びそれに基づく主要な仮説の下
 に行った実証的研究の累積を通して詳しく検
 討して行き最後にまとめて考察してみたい。

第2部：

本研究の主題

＜第5章＞本研究の目的
第1部で行った「現象的自己」と「自我」の各々に関する理論的研究及び両者の関係についての考察更にこれ等2つが密接な関連のもとにつかさどる統合機能と人格適応との関係についての試論を通じておのづから本研究の意図するものを示して来たと思うが、結局こうした理論的探究から、人格の適応にとって最も重要なのは統合機能でありこの機能は自我がみずからの形成過程を通じて生成せしめ発展させて来た現象的自己像を指針とし準拠枠とすることによって言みうるものであると考えるに至っている。従って、適応の研究にとり、客体化された「現象的自己」を追究しようとする内的枠組と主体的な自我機能を客観的に検討しようとする外的枠組の2つを合わせて用いることは必然的に必要であること

及びこれ等を合わせて用いる時の用い方に因する観念については、統合と云う見地から理論的基盤が用意されたわけであり、これを実証することが本研究の大きな目的となる。しかし、この研究では、更にこの様な理論的見地から適応の実証的研究を行うのみならず、その基本的方法、即ち「現象的自己」に関する資料を得る具体的な方法及び主体的な自我機能の全般的な健全性を推定する方法として更にこれ等2つの資料をつき合わせ統合性を検討する方法も得、特に前者の方法はできるだけ確かなものとして確立することをももとう1つの目的としている。これ等の目的を含み持ち乍ら実証的研究も段階的に積み重ねようとするものである故、結局、より具体的に以下の様な段階的下位目的に分けられる。

1) 「現象的自己」と云う枠組からの資料を適応度を異にする対象群について得る場合、一貫して同じ反応のパターンを各対象群についてとられることが出来るかどうかを検討し

その結果も次に述べる仮説と照合しながら、
オ1部で述べた理論に基づいて十分考察する
こと

2) 「自我」の全般的な自律機能(一応統合
機能も除外した残りの)について客観的な方
法による測定を試み、その方法によって理論
に沿った形で一貫してこの機能の健全度が測
定され得ているかどうか検討すること

3) 1)、2)の目的が果され、2つの方法が、
測定法として信頼できる、又理論的に妥当な
ものとして得られた時、これ等2つの資料を
つき合わせて両方の枠組を綜合することによ
り統合機能も分析し各対象群の特徴を吟味す
る。この2つの枠組の相補的な用い方、上の
2つの結果の照合法は、統合機能に因する「
自己」側の条件、「自我」側の条件も有効に
検討しうる標工夫し、この標に両方の枠組を
綜合的に用い統合性を検討することゝ適応研
究により一戸有効であることも実証する。

そして更に、適応度を異にする各対象群の統

合のあり方を、もう一度「自己」及び「自我」の各条件及び統合的意味に還元して詳しい考察を試みる

本研究の目的も具体的に分割して述べると以上の様になる。

二二では本研究の理論的課題ももう一度繰り返すことは省き、序論と本論に述べたこと及び中一節全般にわたり論究し纏めたことをも全面的に課題として背景に担った上で、具体的に目的とすると二を述べた。

< 中六章 > 研究仮説

上記の目的の下に実証されるべき仮説は大きく云って以下の様なものである。

1) 「現象的自己」について

明らかに適応度を異にする対象群間ではこの現象的自己のあり方に違いが認められるであろう。即ち、適応群は不適応群にくらべて、より肯定的な自己評価を示し、社会的文化的

な価値基準が内在化したものと考えられる「理想的自己」との隔たりがより小さく即ち社会的にも是認された受容的な自尊感情 (higher self-acceptance, higher self-esteem) を伴うと考えられる自己像を有しているであろう。又不適応群の中でも適応レベルの違いにより自己像のあり方には何らかの違いが認められようがこれ等は諸実験で一貫した結果となろう。

2) 「自我機能」について

適応度の違いに対処して、全般的な「自我の自律機能」即ち、対象関係の能動的な活潑さ及び正確な現実吟味の機能、精神内界の無意識的な衝動面の統制とそれへの弾力的な親和性即ち二次過程の発達と一次過程の可塑的利用、衝動の分化、自我組織の調和的発達、感情の分化と豊かな成熟性、知能等一次的自律装置の健全性、超自我の圧力に対する耐忍性等の諸機能も総称した全体的機能の健全度の差異が認められるであろう。そしてこの客観的測定はロールシャッハ法によって行いうるで

あろう。

3) 「現象的自己」と「自我機能」との関係
について。

適応群は不適応群とくらべ、統合機能のための「自己」側の条件(即ち、1)自分自身も正確に写し出していること、2)受容的、自己尊重的感情に裏づけられそれが狭い個人的枠内にとどまらず社会的価値基準による是認の意味を含むものであること)及び、「自我」側の条件(即ち、自我の他の自律的機能が全般的により健全であること)が共により十分な形で満たされているのを、双方の照合により認めることができるであらう。これに対し不適応群では、こうした条件がいろんな形で満たされず、結局、「自己」が自我の統合機能にとって十分な役割を果たしうるものとはなっていないと考えられる結果が得られるだろう。又この枠にして分析される統合性が人格の適応を最も敏感かつ的確に反映するであらう。以上3点が本研究全般にわたる主要な仮説の

総括である。これらの仮説を更に具体的に詳細化する必要のある場合は実証的研究編の各章で実験目的の中に補足的に含めて述べることにする。

第3部：

本研究の方法について

<第7章>対象及び行方と手続

適応の基準を明確に設定することは容易でないが、正常者群、神経症群、分裂病群の3群と、社会的にほぼ自明な形で適応差が認められている3種の対象として用いた。正常者 (normals, 以後Nの略号で示すことが多い) 群は高校及び大学生又一般社会人として普通に生活している人々から成り、神経症 (psychoneurotics, Pと略) 群は、精神神経科病院に入院中の森田代神経症患者、又分裂病 (schizophrenics, Sと略) 群はやはり精神科入院中の

定型的分裂病と診断された人々から成っている。これ等各群を、知能・性別・学歴・年齢等の面で、可能な範囲内においてなるべく条件を整一化するように努力した。各実験はいずれもこれ等2つ（正常者群と神経症群）或いは3つの群を対象としている。

各被験者に対し次に述べる標本テストを個別的に施行した。

＜第8章＞「現象的自己」のテスト

本研究で、「現象的自己」はあくまでも意識的レベルにおいて即ち個人にとっての主観的な現実性を有するものを取り挙げようとしており、防衛的歪曲を受けない無意識的な「自己」を間接的資料から推測しようなどとはせず、「自己」研究に關する限りはあくまでも所謂現象学的接近法の枠を守ろうとするものであること及びその所以についてはすでに述べた。そして研究の観点は、「自己」の個人的な内容ではなく、そのあり方即ち「自己」

の直感的条件として理論的考察を行つたこと
 の①現実経験を正確に写し出していること
 ②内在的な社会的価値基準に承認された肯定的
 価値づけ即ち自己受容乃至は自己尊重、の
 2条件もどの程に満たしているかを検討する
 ことに置かれるが、①は他の客観的資料（こ
 こでは自我機能に関するロ・テスト資料）と
 のつき合わせにより検討すべきものである
 故、意識的な自己そのもののテストでは条件
 の②を問題とする。従つて、認識的及び感情
 的な意味合を含む自己評価のあり方が自ら研
 究対象となり、既に述べた如く、「現実のあ
 りのままの自己」と「是非こうありたいと思
 う理想的自己」の2つ及び両者の関係もテス
 トしようとするものである。

意識的自己のテスト法として従来から存在す
 る各方法は ⁽¹⁶⁷⁾ Wylie, ⁽¹²⁾ Baughman & Welsh 等によ
 り詳細に展覧されたとめられているが、大別
 して、Q分類法（Q-sorting or Q-sorts）^{(12, pp 353-355) (167, p 41)}、形容
 詞のチェックリスト法、^{(12, pp 350-352) (167, p 65)} S.O.D.法（semantic differ-

(175)

(167, p89)

(167, pp 65-95)

(167, pp 65-95)

ential method) , 質問紙法, 評定スケール法
面接資料を収録して研究する方法, 等である
・そしてこれ等いずれの方法を用いる場合でも「現実のありのままの自己」(PS[> Perceived Self]と記号する), 「理想的自己」(IS[> Ideal Self]と記号する)の2側面からの研究は可能であるが, ニニでは評定スケールの質問紙法を用いることにした。それは次の様な理由による。まずニニでの「自己」研究は先にも述べた如く個々人の「自己」の内容を知ろうとするものではない故面接資料を利用する様なやり方はとらない。又意識化された主観的現実となっている自己像を問題にしようとする故, 投影法やその外的対象とかいわれている個人の行動観察及びその対象関係の成果(広義の作品とも云うべきもの)或いは夢の内容分析等から間接的に無意識に及ぶ「自己」も正しく把握しよう試みるものでなく, 従ってS.D.法は直接意識に迫ろうとするよりは間接的に云わば無意識面をも含

(12, pp 352-356) (167, pp 262-264)

み持つ正確な自己感情を測定しようとするやり方であるから除外されてくる。そこで残りの方法であるが、②分類法と形容詞のチェックリスト法（後者はやゝ S.D. 法に近い性質を有するが、形容詞そのものの選べ方が S.D. 法の場合の如く直接的意味内容のものを集めるのと異なり、自己感情、自己観を直接的に示す形容詞が集められる点で違ってくる。）の場合は刺激語として、一般的な意味で肯定的な即ち好ましい自己観を意味する語或いは文章と逆に否定的即ち自らを好ましくない（unfavourable）とする意味のものが予め用意されてしまっており、テスト結果は、2種類の刺激語或いは文章を各々いくつづつ選択したかの量的比較により肯定的自己評価か否定的なそれかに割切ってとり扱われる。従って大抵の場合、この様なやり方による PS 分類或いはチェックのみで「自己」が肯定的に価値づけられているか否か、一般化して把握されようとする点にもなり、IS に関するテスト

トを同じく施行してPSと比較するほどもなく、
 「自己」の価値づけ方についての資料は得ら
 れた事になる。それと現実に関分類法を用い
 てPSとIS等の相関も調べる研究もRogers⁽¹³⁸⁾一派
 の人達により多くなされているが、Q分類は
 結果の整理殊に数学的処理のためには非常に
 便利に作られているもののそれだけに却って
 被験者にとってはテスト施行時の手続が非常
 に煩雑であり私自身も数年前実際にこの方法
 を用いてカウンセリング中のあるクライアント
 の動きの至過もとらえようと試みた事があ
 ったが、施行中には被験者の注意がかなり分
 散手続そのものの方にふり向けられねばなら
 ず、従って自己に対する関心を充分保ちなが
 ら内省活動も続けその中で自在に自己報告(
 self-report)を行うと云う自然な流れ(これに
 つか、る「自己」の資料もできるわけありの
 まゝで得る上で非常に重要な点)と思われる
 。)が妨げられ又時間的にも長時間にわたる
 ので被験者も不必要に疲労させる嫌いかある

。これはPSとISの両分類を行わなければならない
 のことであり従ってこうしたやり方も避ける
 ことにした。そこで、結局本研究で用いる
 こととした方法は、具体的には第二編に示し
 ているが、次の標本ものである。質問項目は
 身体的特徴、気質、性格、能力等にわたる個
 人の存在(being)及び機能(function)につい
 て一人称記述を行なった文章から成っており、
 研究を進めるに従って項目内容は次第に人格
 の機能に因するもの更に明確化して自我の標
 本的自律的機能が意識に反映されて自己像を
 構成するに至ったものに焦点づけて作成され
 た。従って後になるほど項目内容そのものが
 云わば被験者に広く通用する公共的な意味を
 持つて来うるが、それまでの段階の質問項目
 も、価値づけの基準は個々の被験者にゆだね
 るとしても内容が全被験者に広くかゝわりう
 るものであるよう配慮した。‘価値基準’換言す
 れば項目が意味する‘好ましさ’(favourability)
 の基準は一般化した形で予め設定しない。で個

々人に任せるため、“はい”、“いいえ”の2種類に割り切った答之を要求することせず、数段階の評定スケールを用い、かつ段階臭以外の位置にも必要に応じて使用しうることにし、できるだけ自由度の高い評定法を用意している。この事と共に、各項目毎にPSとISの評定を計2度づつ行わせて行き、その項目が現実の自分をどの程度指しているか、又“是非こうありたい”と云う理想的立場から見た時、その項目がどの程度自分のことを指しているか、を相互に考え合わせ乍ら評定させ2つの自己の間の一致性、隔たり具合を報告させることは、結局各人が有している内在的価値基準に基づいてどこまで自己を肯定的に受容し尊重しようとしているかに関する資料を自然な形で提供させることになる。こうしたやり方は被験者の側にとっても平続そのものが平易であり、又一般的基準ではなく自分の基準に従って内省的な評価を行いうるので応答の行為そのものが余分な抵抗なく

比較的スムーズに進行するのではないかと考
えられる。更に、PSとISを夫々区別しながら
これ等2通りを評定させることは、いずれか
一方のみの評定を求める場合にありかたに他
方の意味も含み持った反応の混入してくるお
それがなく、この標に反応の意味が夫々明確
に保たれることは結果を使用する検査者の側
は勿論、被験者にとってもあいまいな反応を
みずから自覚した場合に生じがちな反応意欲
の減退が

防がれる点で望ま

しいであろう。この標にPSとISの2種類の同
時評定法(上述した如きスケールでの)は、
反応の現実-理想水準を明確に保ちながら、
自分の基準で自由に反応することも可能にす
る。そして、得られたPSとISの一致性が、自
己受容、自己尊重と云った自己心理学的意味
から適応上の重要な指標となることを示す実
証的研究も数多く存在するが、本研究におけ
る標に分裂病者をも含めて、正常者、神経症
と合わせ計3つの適応差のある対象群をとっ

て行われた研究は少数である。従って、PSとISの両評定の関係が有する適応的意味は、各群の資料をたいて現象的に肯定的(positive)な評価も示すか或いはその逆であるかを整理しながら蓄積して行き最後に総合的に検討することとする。又、「自己」が現実経験をどの程度正確に反映しているかの問題とともに、この肯定的価値づけに因する問題も、主体的自我機能に関する客観的資料と密接に含ませにふって研究していくこととし、次には、この標本やり方を通じて行う被験者の自己報告(self reports)の資料が、「現象的自己」の研究上どの様な意味或いは制約を持つかについて考察したい。

ここで用いる質問紙のみならず大抵の質問紙法における被験者の応答は、「“私は〇〇である。”①と自分のことを思っている②」と報告したものの③に他ならない。ところが多くの場合、個人の応答は、“私は〇〇である。”の私を彼に変えて“彼は〇〇である。”かの如くに受

けとられようとする。このことについては後の第二編の「自己」に関する実証的研究の部分でも述べるが、この様に①のレベルを正確に①のレベルとして受けとらないで結果を処理し解釈しようとするのは、本来質問紙への反応が主観的な内的枠組から与えられたものであることを忘れ、それをあたかも外的枠組から与えられた客観的資料であるかの如く受けとって誤った用い方をすることになるが、本研究では、あくまでも②までのレベルをそのまゝ、内的枠組に関する資料としてとりあげようとしている。しかし③の問題即ち、こうして得られた資料が自己報告であることに關して最近論議がかわされる様になっている。つまりここが問題となるのは、結局、被験者が自分自身で意識している②までの内容を質問紙に対し更にはその背後に存在する横者に対してありのままに報告しようとするかどうか即ち意識的防衛(対人的な)に関する事柄である。無意識的防衛即ち、被験者が自分のこと

と主観的にとらえている内容であるところの
 ①が、本当のその人の姿であるか或いは外的
 枠組から客観的にとらえられるその個人の特
 性と正確に符合するものであるかどうかは問
 題としない。たとえ、自分自身を間違つて或
 いは歪曲した形でとらえているとしても、と
 もかく意識内に描かれていゝる自己像が報告の
 段階で防衛されるとすればそれをもとの標に或
 いはどの程度のもゝとして考えるべきかの問
 題である。Combs²⁷⁾等は自己報告におけるか
 る問題点として、(1)自覚 (awareness) の明瞭さ
 (2)表現力及び表現のために用意されていゝる材
 料或いは方法 (3)社会的な期待 (social expectan-
 cy) もしくは社会的望ましさ (social desirability)
 即ちありのまゝに報告することから結果され
 る社会的な評価や処遇、或いは他人から寄せ
 られる一般的に感情や思惑等を考へて無難な
 標に報告を制限したり偽つたりする傾向、(4)
 (1)被験者の協力 (coöperation) (5)脅威 (threat) か
 らの自由さ及びその人の人格の適当さ (adequacy)

)の程度、等をあげているが、(2)は既に述べた如く方法のところでできるわけである。(4)は方法そのものとも関連するが、手続き及びテスト施行時の検査の場面構成の仕方或いは神経症や精神分裂病患者を対象とする時には病院側に十分理解を求め協力を得る標にすること等も間接的だが重要なかゝりを持って来る。この標にしても尚かつどうにもならぬ非協力的態度や(1)に挙げられている自覚の不明瞭さ等は結局(5)においてとりあげる人格の適応性の問題に含めて考えられねばならないものであろう。本来その適応性が研究の課題である故、適応度の違いによって自己報告の仕方に違いが生いて来るとすれば、その違いこそ十分吟味されねばならない問題であり、これは自己報告の資料の累積と、主観的自我機能に関するテスト結果との対比を通じて後に検討しようとするところである。これ等のことから、さしあたって問題になるのは(3)であらう。この点に関してまず考えられること

は、 N の標本適応群と P, S 等の不適応群とでは、
 仮りに各群が意識的防衛をいくらか効か
 ずとしてもその程度及び効かす仕方に違いが
 あるだろうと云うことである。即ち、 N 群で
 はこのテストが大学の成績或いは社会的評価
 に無関係であることは各被験者により容易に
 納得され得、又検査者の個人的関係もこのテ
 ストの施行及び結果により何ら影響を受ける
 に足るほどのものではないことは明らかである
 故、かゝる種類の防衛を働かすことは他の2
 群に比し最も不要である。これに対し他の2
 群(この2群間にも詳しく見れば差異が認め
 られるかも知れないがここでは一応一
 まとめにして考えておく。)ではこのテスト
 が医師の評価、殊に退院等重要事項に關す
 る診断のための資料になるのではないかと
 のおそれを屢々抱きがちであるが、この点に
 ついては医師の協力を得てこうした警戒心を解
 く標本一応場面構成したつもりである。各群
 のかゝる防衛的意味合いも、結局のとらや

はり累積した資料全体を検討し、3群を比較考察することによつてつかひの知ることゝ可能になるものと思われるが、テスト方法の考察や手続においてもできるわけにうした要因により影響を受ける度合が少なくても目標に工夫は試みておいた。先述した如く、各項目毎にPSとISの計2つの評定を行わせ、各人の基準に基づき2つの自己内の隔たりを表現させることは、この“隔たり”そのものに一般的な社会的望みしさ等がさしあたつて予想されたいことから、この“隔たり”を個人が実際に意識しているもの以上に小さく或いは大きく歪めて表現しようとする様な防衛はあまり考えなくて済むとも考えられる。

この様なことから、本研究の方法を通じて自己報告として得られた資料は、質問紙法そのものが有する不可避的制約をいくらかは受けたものであるとしても、「現象的自己」に関する資料として扱うに足る物とし、それをあくまでも内的枠組から検討せうと試みた。

<第9章>「自我」の全般的な自律機能のテスト

これには投影法の1つであり、自我心理学に基づいて解釈理論が打ち立てられていると二つのロールシャッハ法を用いる。投影法に属する理論的考察もここに新たに展開することは省略するが、ロールシャッハ法(以下R・テストと略する)は、これが投影法であることにおいて既に次の標本臭で他の内観的(subjective)方法や行動観察法等よりも自我機能測定に適した意味を有すると考えられる。

1) 刺激状況(テスト材料及びテストの場面構成)の新奇さ、あいまいさ、即ち、これまで強くと経験したことのない新たな対象、それも明確な公共的特性を有していない対象に対して大へん自由な取り組み方を要求されることになる。被験者は、この標本に未知な、そしてあいまいな対象関係(object relation)においては人格内のある特定の機能を選択的に用

いることにより、明確に方向づけられた課題解決を行う形での取り組みは不可能となり、結局人格の全体的な機能も動員した個性的な取り組み方もせざるを得なくなる。又対象関係ではあつても、対象(テスト材料)及び、テスト状況そのものが被験者に対して投げかける現実的要請がこの様に非常に自由度の高いものであることは、精神内界と関係すること (intrapsychic communication 或いは大雑把な意味で object-relation に対する self-relation と云われる場合もある。) により内的な資源 (resources) 或いは材料をとり出してくることが要求することになる。従つて精神内界への疎通と対象関係との協同作業により内界からとり出された素材と外的対象との間の個性的な妥協を果すことが、こうした刺激状況における課題解決法に他ならず、これこそ自我機能全般の関与を促すものである。

2) 1) と関連するが、テストの目的が被験者にとり具体的に与えられないものであること

から、テストに対する一定の意識的な構えの
 用い標がなくなり、結局テスト—まかせのナ
 イーヴな反応が喚起されることとなる。従っ
 て無意識的な面の諸特徴が、自由な想像活動
 (free play of imagination)⁽¹³⁹⁾を通して象徴的に表
 現され得る。“投影”は二の意味を多く含む^{(44) (139)}。

逆に、投影法が本来この1)、2)で述べた如き
 特性、即ち無意識層に及ぶ精神内界との疎通
 を重要な要因とした自我の自由な活動な全体
 的機能を促すものであることから、こうした
 自我機能が制限されている度合や障害されて
 いる特徴を読みとることが可能となるう。

3) テスターとの人間関係、反応の言語的伝
 達、刺激材料が大雑把ながら存している客観
 的特性等が、社会的現実性を担うものとして
 殊にこうした全体的にあいまいな刺激状況で
 は重大な意味を持って来る。これ等の条件が
 存在することにより、現実吟味 (reality testing)
 の能力等自我の現実関係の機能が顕著に浮き
 彫りにされうる。

4) 投影法にはテストに対する反応を解釈する理論的枠組が存在し、それ等は直接自我機能に焦点を合わせたものばかりではないにしても、深層心理学的観点から内的欲求や無意識的動因もとりあげこれと環境即ち外的現実との関係をも力動的にとらえようとするものが多い。

ロ・テストを本研究で用いるのは、先に目述べに如く、これがこうした投影法の特性を十分担っていること、更に結果の解釈をはっきり自我機能のあり方に焦点づけ自我心理学的解釈理論を一応確立していること、それに加え、私自身が臨床と研究の面で約8年にわたりこのテストになじんでいることによる。

ロ・テストにより自我機能が洩れなくとらえられるとか、すべての被験者にわたり一様に人格の諸側面がこのテストの反応として反映されるものかどうかは別としても、被験者が本テストの非構造的(unstructured)な刺激材料を構造化する仕方、即ちインフのしみとも

云うべき図版のどの様な領域・属性を用いる
 れをどの様な概念内容にあてはめようとする
 か。又その概念に附する明細化 (specification)
 等は才一部で述べた自我機能の諸側面に対処
 させて解釈しうる資料を提供してくれる。以
 下、R・テストでとらえうると考えられる人
 格の諸側面、これと自我機能との関連づけを
 私自身の至験 (臨床及び研究面での) もも背
 景としながら、概括的に述べてみる。反応が
 チェックされる諸側面は、反応時間、反応の
 位置づけ (Location)、反応の規定の仕方 (反
 応決定因と呼ばれるもの、Determinant) 反
 応内容 (content)、平凡性-独創性、反応と
 図版の物理的条件との一致性 (形態水準 Form
 Level)、反応全体の豊かさ、偏より具合
 、可塑性、回復性等であり、これ等を自由反
 応段階 (Performance proper) 質問段階 (Inquiry)
 、類推段階 (Analogy Period)、限界検査段階 (Testing-the-Limits) にわたってチェックし、こ
 うして得られた資料にのいて、量的分析、反

応の継起及び個人に特有な反応の流れをとらえようとする継列分析、精神分析学的な象徴(symbol)の考え等をもとり入れた内容分析の3種の分析を行う。

ここでは上述した4エッラの諸側面の中、反応時間、平凡性-独創性は背景に置いて参考とするにとどめ、又反応内容に関しては、精神分析学的な観点から象徴的意味をとらえようとする形の内容分析は精神分析的解釈の基盤や熟練が必要と思われたため強いて行わないこととして内容は記述的レベルにおいてのみとりあげ、これを反応決定因と結びつけて検討することにした。特に重点を置いたのは反応決定因と形態水準であり、これ等特に前者は一時的な至験によって左右されないところの自我機能¹⁰⁰⁾の基底的な特性を反映するものであることが和自身のR・テスト至験からも確認できる様にある。

こうして反応の4エッラを行ういくつかの側面が有する自我機能的意味を重層的に示すと

以下の様になる。

1) 運動反応

これは図版が有する客観的屬性、即ち、形・大きさ・色彩・濃淡等の物理的条件以外のものに基づく反応であり、「動き」と云う屬性を主観的につけ加えようとするものである。従つて、そこには内的な想像過程が含まれており、自我がより下戸の領域に接近してそこに貯蔵されている内的資質を利用する機能が予想される。より原始的な衝動性に対する対し方、その方に接近しそれを現実原則の支配する世界に持ち帰りそこで通用する形のものに仕立てあげる力の質及び程度がこの反応の中に示唆されている。一に運動反応と云つても、その内容が人間・動物・無生物に大きく別かれ、これ等の中いづれに結びついた運動反応であるかにより異なつた解釈が考えられる。それはほゞ以下の様なものである。

人間運動反応 (M と記号される。)

他の運動反応と共通して云えることであるが

上述の如く、反応を活性化するのは衝動の原始的力 (archaic forces) から生ずるエネルギーに比較的自由に接近しそれを設け上げて利用していることを示すものに他ならないが、この標に衝動性に接近してそれを外界とのか、わりに用いいると云うことは、かゝる原始的力に対する自我の耐性 (ego tolerance for archaic forces) を予想させる。又同時にこの標により衝動的な戸に及ぶ内的資質の使用の結果する満足は、それが非常に生産的創造的な形をとる場合は勿論のこと、たとえそれが、一時的な空想活動 (fantasy activity) に終る場合でも、現実の欲求不満状況に対する耐性 (frustration tolerance) をもたらすと考えられる。特に人間を内容とする運動反応は、知覚そのものが、他の動物運動や無生物運動を見る標に単純で大雑把なもの或いは至極漠然としたもの (例えば、動物や無生物の場合はたゞ飛んでいる、走っている或いは火が燃えている等運動内容そのものもごく限られた単純で充分

化なものであり、動物それ自体の知覚も左右
 対称形であれば大体蝶々らしく見えるなど、
 無生物の場合も同様、大抵大雑把である。)
 ではなくこれ等と比すればはるかに複雑で分
 化度の高いものであり、知覚機能 (perceptual
 skill⁽¹²⁾) の発達が前提となる。又この反応は人
 間への同一視傾向と深くつながり、他の動物
 等とは異なる制禦機能を有した人間として自
 分を感じていること、及び自分と区別される
 他者への共感性 (empathy) をうかづわせるも
 のでもある。これ等のことは自我発達と密接
 な関連性を有しており、最初に述べたところ
 の運動反応全般に共通して考えられる二つの
 特性をも、この人間反応はより高次の形で強く
 担っており、こうした点から、この反応は、
 Klopfer⁽¹⁰⁰⁾ により、内的安定性 (inner stability)
 , 情緒の統合 (emotional integration), 自己実
 現 (self-realization) に因する重要な指標とし
 て位置づけられ、自我機能中最も高等なもの
 がかわるることによって生ぜしめられる反応

とされている。

動物運動反応 (FM と記号される。)

本能的衝動は、動物に関する神話、夢、その他の慣用的表現によって象徴的に表現されることが考えを前提とし、従って、本能的衝動を意識から徹底的に排除しようとする場合は動物を運動的に見ることをしないと云う考え方を要する。故にこの反応は、かゝる衝動に対する親和性乃至自覚 (awareness) に関係するもので、M 反応に比しより前段階的な意味で、本能的衝動の扱いかい方、自我組織への組み入れ方、換言すれば情緒の統合に関する自我機能のあり方を示唆するものとされる。他の反応とのつり合いが、この事に関しては重要な問題となり、例えば FM のみが多すぎる場合には、衝動を過度に受け入れすぎていること (over-acceptance of drive impulses), 幼児性等も考える必要が生じて来る。又、M よりも原始的 (primitive) な意味で、"圧力に対する耐性" (stress tolerance) の役割も附せられている。^{100, pp 578-579; pp 265-266)}

無生物運動反応 (m と記号される。)

この反応に關する解釈は他の二つに比すれば、それ程実用化されてゐないとも云えるが、自我の本能的衝動に対するかゝり方に関係する反応であると考へられる点では前二者と共通する。だが m の場合は、欲求充足を求める衝動の活動による葛藤及び緊張、即ち、諸衝動間のそれ及び衝動と環境の圧力との間におけるそれ等に関連づけられており、その葛藤と自覚する自我の機能、換言すれば、かゝる衝動の活動が生む葛藤状況も自我にとつての警報としてとり挙げ利用する自我の“警報体制”(warning system)を意味すると考へられている。従つて、この反応は不安感情とも密接な關係を有する。

2) 濃淡反応 (shading response)

これは次の色彩反応と同様、図版に備わる客観的属性の中、情緒に働きかける刺激要因に対する反応である。濃淡は接触感 (contact sensation) を喚起することが至驗及び實驗的裏づけ

により認められており、この接触感¹⁰⁰は被験者
 に対して基本的な情緒的安定 (basic emotional
 security) への欲求を喚起すると考えられる。
 従って、この刺激に対する感受性、形態の要
 因と統合して一つの反応に仕立てあげる仕方
 が、発達初期の愛情欲求の充足即ち最初の養
 育者との安定した一貫性のある生物・心理的
 関係に基づく基本的安定感と外界に対する根
 本的な信頼感³⁶⁾換言すれば自・他に対する同一
 性の感情の基盤³⁶⁾がどの杯に形成されたかをま
 ずうかかわせる。そして自我発達はこれを母
 体として進んで行くか、かゝる母体のあり方
 と同時に、愛情欲求をどの杯に分化させ自我
 組織の中に組み入れているか、才一部で述べ
 た本能的衝動 (この場合は破壊的攻撃衝動よ
 りもエロスの衝動) の活動により生ずる情緒
 を自我がどの杯に変容させ馴らしているか (taming) にかゝる反応とされる。それ故、
 習慣化された生活感情 (prevailing mood) のあ
 り方 (例えば依存感情、対人関係における不

安感、浮くかいわらない表面的な情緒的関係の持ち方等)や、この衝動的欲求に対する防衛のあり方もこの反応からうかわれて来る。

濃淡反応はかゝる解釈理論を可能にするが、この事と結びついて反応するものも、接触感に直接関係する表面組織的反応(c, cF, Fcの3種に記号される。)、又、濃淡も立体感や遠近感、又拡散してゐる感じ(例えば、霧とか光等)に用いる反応(k, kF, FK, 及び、n, と記号する。)等に分類されてゐる。

3) 色彩、又黒白反応

濃淡反応が個人の内部に存在する情緒的期待(愛情欲求に關する)をとり扱う自我機能を反映するのに対し、情緒の実現性(emotional actualities)を扱う自我機能を反映するのがこの反応である^{100, pp 275-287; pp 582-587)}とされる。即ち、色彩は、現実の日常場面においてもそうであるが、図版中最も目立つ属性で、これこそ正に外界に顕在しながら最も強く情緒的反応を誘う刺激に他ならない。従つて色彩反応は現実の生活場

面における情緒刺激(多量に対人関係における)に対する反応性の度合とその性質に関連づけられる。この反応は、どの程度明確な(definite)形態概念の中に色彩が統合された形で与えられるか、即ち色彩刺激に圧倒され形態性への配慮なしに受身的に反応してしまう傾向をどの程度含むか又、形と色との統合に不自然さや無理はないかと言った事。更に、どの標本値の色彩が選ばれそれがどの標本反応内容(概念)と結合されるか。色彩に対する感受性やこの刺激に対する反応に認められる情緒の深さ、率直さ、強さ又その質の一次過程的な原始性や、二次過程的な中庸性(moderation)等に基づいて吟味される。(記号化の種類は、FC, CF, C, F/c, F↔c, C/F, C↔F, C_n等、その他、色彩反応を継続的に追ひ色彩反応の力動性も、色彩無視、色彩回避等5種類に分類する二つを行う。濃淡反応についてもこれに似た形で反応の力動性が吟味される。)そしてこれ等の分析に基づいて、本能

的衝動の強さ及び表出の活潑さ、対人的な情
 緒交流の自由さ、深さ（皮戸性：superficiality
 に対するもの）外界の現実的条件を配慮し社
 会的基準に基づいて反応を統制する自我の能
 力等が推定される。色彩反応は、運動反応と
 並んで自我機能の解釈上重視されるカテゴリ
 ーであるが、結局、内部から発動して来る本
 能的衝動と外部からの情緒的衝動（emotional
 impact 或いは challenge）とも効果的に統合的
 に処理しうるかどうか、情緒の統合と現実吟
 味とを融合しようとどこまで努力し又それを
 果しているかと云った点の自我機能に關係
 づけられるものである。従ってこの反応も、
 他の運動、濃淡等の反応の出現の仕方と合わ
 せて検討する場合自己実現に向う高等な自我
 機能も推測する上での一つの指標となりうる
 。

4) 反応の形態水準 (form level)

これは知覚の正確さ、即ち図片に対して反応
 概念がどの程度適合しているかと云うことと

それを検査に対して伝達する能力及び伝達の仕方によって規定される。^{100, pp 152-154, 357)}ロ・テストの刺激図版は全体として非常に曖昧さを有しているにも拘らず、そこにはある種の明確さを有する輪郭や様々な形態が含まれておりそれ等が纏められ構造化されることによって他人に伝達可能な概念化が行われるわけである。(ロ・テストは二の意味で適度な曖昧さを具存するよう巧みに作成されたテストとされ、例えば雲模標テスト等の様に刺激があまり曖昧すぎると反応の構成を促進する作用が弱く又、ここで行う如き形態把握の正確さを検討することも困難となる故、刺激内には適度の定形性又反意を促進するリズムの標本ものが含まれていくべきとされている。)が、図版との一致性(congruency)は運動・濃淡・色彩等の各反応について吟味される。従って、この形態水準評定からは、いろんな外的・内的情緒刺激による被影響性にもかかわらず、外界の客観的条件を検討しそれへの適合を志意向

しようとする能力。即ち自我機能の中の現実吟味 (reality testing) の機能、一次的自律装置と関係の深い。知覚や知的能力又知的統制力^(100, pp 568-570)思考力。現実支配力 (active mastery) 等が推定され得よう。これ等は自我機能全体の健全性 (Ego-strength) に大きくかかわるものである。

5) 形態反応 (F と記号される。)

これは 1), 2), 3), で述べた各反応の意味からみてこれ等と逆或いは裏側の意味を担う反応として^(100, pp 269-270)解釈される。即ち、これは図版の客観的属性中情緒を喚起する要因にか、わらない形で、結局図版中の輪郭のみ或いは形態要因のみをとりあげて概念を構成する反応であることから、この反応が全体の反応数中で占める量的比重が大切であるが、非個性的に情緒を抜きにして社会的に統制された反応をなしうる能力を失つて又二の反面、自覚性を欠く皮肉なF反応性。固く収縮的な (constrictive) 適応様式を反映する一つの指標となる。しか

① この反応は全般的に、自我機能の積極的な面（創造性など）よりも消極的乃至は不健全性にかゝるものと考へられる。

6) 反応の豊かさ、偏倚の度

反応領域、決定因、内容の各分布状況を値量にわたって吟味すること、又更に反応の平凡—独創水準を検討することから、自我の一次的自律装置即ち素質的側面及び至騷に基づく二次的自律機能の全体的な豊かさ、活潑さ、自由さ、平衡性等がうかゞえる。

7) 反応の可塑性、回復性

反応の力動的な文脈を上記の標本諸側面について追跡し又限界検査等によつて反応の潜在的な可能性を検討することにより、自我の退行 (regression) — 前進 (progression) の移動機能 (shifting)、や平均的な機能効率の他により基本的な潜在能力をうかゞうことが可能になる。

以上に述べたのは、ロ・テストにおいて反応を4エ・ックし吟味する諸側面が持つ自我機能

的意味の中本研究に關係する主要なものとして又私自身の口・テスト経験からも確認できるだけの明解さを有するものである。そして各側面をごく概括的にまとめたが、各々が更にいろいろな記号比によって示される通り詳しく下位分類され得、諸記号の組み合わせ及びそれ等⁹量的質的検討を通じてのことによつて、一次的自律装置、発達⁹の極く初期の基本的安定、(basic security)同一性を確立する問題、その後これを母体とし又一次的装置の成熟をも基礎として、本能的衝動に対するかゝり方及び外界の対象に対する受身的更に能動的な關係の持ち方の両面を相互循環的に発展させながら本来の自分を適応的に開発する方向に二次的自律の自我機能を発達させ自我組織を形成している仕方を才⁹章の(II)及び(IV)で述べた標⁹を觀⁹から推定する試みがなされる。即ち、現実吟味、能動的でかつ適応的な制禦を伴つた対象關係、衝動に対し成功的防衛法を確立し二次的に自律した適応的な制禦機能を

有しつつ衝動性にも弾力的に親和し、そこから創造のための心的エネルギーや内的資質を汲み出したり、外的現実の圧力に耐えるための内的な想像生活を生み出す機能、衝動の分化・中性化、それと対峙する情緒（感情）の分化と成熟、深くそして活潑な自発性を伴う情緒反応、統制のとれた偏倚のない知的機能、機能全体の自由さ、豊かさ（Klopperの述べる自己実現傾向）等が夫々、諸指標の組み合わせから解釈される。

本研究ではこうした個々の面を後の実証的研究の部で述べる標にいくつかのカテゴリーにまとめてとり挙げるとともに、総体的な自律機能の健全性を問題とする。後者に関してはKlopper自身も、ロールシャッハ予後評定スケール-RPRS- (Rorschach Prognostic Rating Scale) と称する、自我の顕在的・潜在的な機能の総合的な健全性の測定法を試みており^(100, pp688-699)。中には、先述した、反応を4エングする諸側面が殆んどすべて網羅されている。本研究でも

このRPRSは自我組織の形成度、機能の総合的な健全性を測定する有効な方法と考えられる故、これを採用するか、これに肉する紹介は省略し、又その他に採用するカテゴリーは第2編第2部で詳しく述べることにする。

第2編 実証的研究

第1部：

質問紙法による「現象的自己」の分析

<第10章>〔実験I^(註)〕質問紙 - その1 - によるN、P両群の比較研究

(註)：本研究の場合〔実験〕と言う用語は、厳密な意味では、当てられるべきではないが、他に適当な言葉がなかったため用いた。従って、ここでの〔実験〕は、ほぼ〔テスト〕の意に近いものである。

〔1〕目的

人格の適応性が「現象的自己」という内的枠組からどのまでとらえられるか。最初の実験として次の仮説の検証を目的とする。

仮説：1) N群はP群よりも「現実的自己」をより肯定的に評価するであろう。2) そしてそれは、その個人の中に内在化された社会的価値基準（理想的自己）により是認された形、即ち、「理想」と「現実」の両自己間のより親和的な関係に裏づけられているであろう。

〔2〕方法

1) 対象：①N（正常者）群80名（男73名，女7名）。いずれも大学生で年齢範囲は19才

～31才。② P (神経症) 群37名 (男26名, 女11名)。いずれも三聖病院に入院中の森田氏神経症患者で、年齢範囲は16才～35才。但し、その他4才の患者が1名のみ加わっている。

2) テスト材料: 質問紙 - その1 - (自己評価目録) の作成
予備調査を経て資料1. (心理学研究30巻4号 pp.283-284) に掲げた60項目よりなる質問紙を作成した。体格や容姿等身体的側面, 社会性, 意志や気質等に関する諸項目が含まれる。各項目毎に、「ありのままの現実の自己」(PS) と「是非こうありたいと思う理想的自己」(IS) の2つのスケールについてほぼ5段階式 (必要にない5段階目盛以外の位置に評定してもよい。) の評定を行うが、被験者はこの標式の評定をPSとISの2つのスケールを見くらべつつ、しかも互いに他方のスケールと区別しながら一項目ずつ行うことによりPSとISの相対的關係をありのままに表現しやすく、又、PSのみの評定

を行ふ場合に比し対社会的な自己防衛の必要も少なく自己報告 (self-report) がスムーズに行われうるのではないかと考えた。

〔3〕結果の整理：心理学研究第30巻4号 p278-281 を参照。

〔4〕まとめ：

仮説の 1) 及び 2) が実証された。即ち N 群は P 群に比し、より肯定的な PS を示した。(統計的有意差は U テストで 1% レベル。) 又 IS 評価については全体的なスコアでは両群間に有意差は認められなかったが、P 群はスケール上最も低い PS の段階値と最高レベルの IS とを結合させた評定型も多く示し、最高レベルの IS 評定に固着する傾向が N 群に比し大であり、(χ^2 検定 有意差 1% レベル) 結局この様な PS と IS とが分離した排反的な評価のあり方により、PS と IS との隔たりの値即ち DS スコアが P 群でより大となった。(χ^2 検定, 有意差 1% レベル) N 群はこれに対し、IS 評価が常に最高レベルに固執される傾向は示さず、

むしろそれよりも、最高レベルの一步手前に
 評定される場合が最も多く、これが中位の PS
 と結合する評定形が最頻であった。その結果
 PS と IS との間で DS (“ 隔たり ” のスエア) は
 より小さくなり、P 群に比し、PS と IS とが云
 わば親和的な関係にあることが認められた。
 以上により、N 群は内在化された社会的価値
 基準である IS のあり方が P 群における標に高
 く、厳格な標相を呈しておらず又 PS も、P 群
 に比すれば、IS に許容されたとしても云うべき
 形で肯定的に評価されているのが認められた。
 。このことは換言すれば、N 群にあっては、
 PS がより重要な意味を持ち、これを振り所
 しながら現実に適応的な前進を続けていると
 考えられるのに対し、P 群では PS が適応的な
 動きを促進する役割を果しているとは考えら
 れず、むしろ IS の方に神経症者はより大きい
 関心を寄せておりこれは現実水準での適応に
 とりあまり積極的意味を持たないのではない
 かと云うことを推察させる。

<カ11章>〔実験Ⅱ〕(=〔実験A〕)新傾向 紙-その2-によるP、S3 群の比較研究

〔1〕目的

傾向紙-その1-をもとに、更に組織的に項目を作り変えた傾向紙-その2-（資料2 自己診断表）を用い、これによつても実験Ⅰと同様に、P群間の違いを見ることが出来るかどうか。又対象として更に精神分裂病群（S群）を加えることにより適応レベルの中を拡大させ、これ等3群間にどの様な自己評価の違いが存在するかを比較検討する事を目的としている。又これはカ2部の実験Ⅴと同時にを行ったものであり、以下の事柄をも合わせて本実験の目的とした。即ち、この様に自己意識の分析と云つた内的枠組による方法と、逆に、後述する如く、自我機能を外的客観的枠組から推定的にとらえようとするロールシャッハ法とでは、各々どの様な形で人格適応がそこに反映されるか、両方法による結果の対応

性、関連性を検討し、第一編第二部で述べた本研究全般にわたる仮説を検証することによってある。

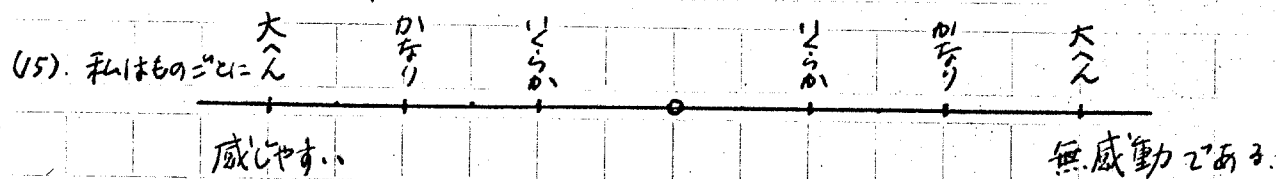
〔2〕方法

(1) 対象：① N 群 28 名 (中、女 15 名)。P 群 30 名 (女 4 名) S 群 29 名 (女 13 名) 平均年齢は N、P、S の順に 24.6 才、29.7 才、32.9 才、又年齢範囲は同じ順に、19 才 ~ 40 才、19 才 ~ 37 才、18 才 ~ 42 才である。N 群は大学生及び普通に社会生活を営む一般成人。P 群は森田代神経症の入院患者 (三聖病院) S 群は定型的分裂病の診断を医師により下されておりその中でこうしたテストがとちかく可能な者、従って陳旧の分裂病患者等はおのづから省かれる。(京大病院及び岩倉病院) 又本実験では精神分裂病の病型については特に問題としないが、強んどが破砕型又は妄想型である。又知能に因しては、全群を検査して厳密に統制することは行わなかったが、N、P 群では普通レベル以下と疑われる者はなく、又、S 群で低

知能を疑われた者については知能テストも施行しその結果により普通レベル以上でない者を数人除外した。

2) テスト材料：新賃肉紙 - その 2 - (自己診断表) の作成

① 応答標式は〔実験Ⅰ〕と同じ方法を採用した。即ち、「ありのまゝの現実の自己」(PS) を評定するスケール(略して P) と「是非こうありたいと思う理想的自己」(IS) を評定するスケール(略して I) を並置し各項目毎に両評定を一度に行わせる。但し評定段階は図示した通り 6 段階法を用い、必要に応じ目盛以外の位置にも評定できる。中央の空白の丸印の箇所のみは評定を避けるよう指示した。これは〔実験Ⅰ〕の結果で評定が中央に少し集まりすぎる傾向がみられたことと、PS



の評価を大きく肯定的と否定的に分けて整理し、第 2 部〔実験Ⅱ〕の結果との対応性を見

ようとする目的による。

②項目は実験Ⅰにおけるよりもより組織的に作成しようとしたことと、かつロールシャッハ結果と個人毎に比較対応させ、外的枠組からとらえられる自我機能とその個人の中に現象的自己像の主要なものの一つとして意識的にとらえられている自我機能の云わば反映像 (mirror-image) とを内的枠組により分析し、両者を相補的に用い、又両者の関係を吟味することにより、各々の方法のみでは得られない人格の適応機能の一面重要な面に関する指標を混出そうとすると、二つから次の様な内容のものにすることとした。即ち、ロールシャッハ法における自我機能の解釈仮説の中から比較的理解でかつ重要なものとして実証的研究(客観性に関する)が様々な角度から多く積み重ねられているものを選び、それを第一編で述べた如く、自我理論の要旨と照合して自我の自律的機能の健全度に関する重要な指標を網羅する形で編成したものの(第一編第八章及び後の

中2部参照)をもとに、それが個人の現象的
自己像としてとらえられた形になるよう一人
称記述の意識的用語に置きかえてそれを用い
ることとした。それ等は結局(1)情緒的自覚性
(情緒の生々しい活潑さ)に関するもの17項
目(2)内的制御機能に関するもの11項目(3)対
外的制御機能に関するもの8項目(4)体験型
に関するもの7項目(5)愛情欲求の基本的充
足及び分化した成熟性に関するもの4項目
(6)攻撃欲求の活動の仕方に関するもの4項目
(7)情緒の全体的な安定性及び適応性に関する
もの13項目、計63項目より成っている。

客観的な解釈用語も自然な無理のない形で一
人称記述の意識的用語に置きかえることには
いろいろ困難な点があったが、これは後の実
験で更に改訂して行くこととし、最初の試案
としての項目作成を行った。この質問紙の有
用性の問題も本実験結果の分析過程を通じて
得ら検討されることになろう。

又本質問紙による調査の実施は、個人テスト

の形で行ったが、結果の整理では部分的に回答の不十分な被験者も除いて行ったところがある。

〔3〕結果の整理及び考察

(表1)の右側は現実的自己評価について各被験者毎に肯定的評価と否定的評価の分類を質問紙の各下位カテゴリー毎及び全体にわたって行い、群間比較を試みたものである。尚、体験型については、他の下位カテゴリーの肯定的、否定的評価に該当するものとして、拡張的评价(自己の体験型を内向、外向いずれの傾向にしろよく発達しているとする評価)とその逆の収縮的评价と言う形の分類を行い、更にどちらの向性を優位にした自己評価を行ったかにより、外向的评价と内向的评价に分類した。又、肯定的、否定的両評価の分類基準としては、(1)、(2)、(3)、(7)ではそのカテゴリーに属する項目数の40%以上に否定的評価を行ったか否かにより否定的評価者、肯定的評価者とした。更に各項目毎の肯定、

(表 I) 自己評価の群間比較

DS (「現実と理想」の両自己評価向 の「平均値」)							PS (現実的的自己評価)						
(Uテスト)			対象			自己評価の 位置 カテゴリー	言評価の分類	対象			(χ ² 検定)		
P-S	N-S	N-P	S	P	N			N	P	S	N-P	N-S	P-S
**		**	16.25	49.00	26.75	情緒的自覚性	肯定的	(1) 24	(2) 13	(3) 18	**		**
							否定的	4	17	6			
**	*	**	9.50	27.50	16.00	内的制衡 ^制	肯定的	19	8	14	**		*
							否定的	9	22	10			
**	*		4.50	14.00	10.00	外的制衡 ^制	肯定的	20	26	20			
							否定的	8	4	4			
**		**	6.50	17.50	9.75	体験型	外向的	12	8	16			**
							内向的	16	22	7			
							(両者の) 拡張的	20	9	19	**		**
							収縮的	8	21	4			
**		**	3.00	10.00	4.25	愛情欲求	肯定的	20	14	12			
							否定的	8	16	10			
**		**	4.50	10.00	6.00	攻撃欲求	肯定的	16	4	14	**		**
							否定的	12	26	8			
**	**	**	9.75	34.75	17.25	全体的安定性	肯定的	12	5	16	**		**
							否定的	16	25	8			
**		**	47.50	164.00	87.05	全体のSP	肯定的	17	5	16	**		**
							否定的	11	25	8			

注. * $P < .05$ ** $P < .01$

否定両評価の分類は、スケールの細かい段階

値を一応無視し、スケール上の中央点を境として一律に行うこととした。又愛情欲求と攻撃欲求に関するカテゴリーではその項目数が少ないので次の標準整理法をとった。即ち前者では、愛情欲求の充足と受容として依存性が項目に配されているが、“自己の愛情欲求を受容し、又この欲求が満たされている”とする者を肯定的評価者とし、それ以外を否定的評価者とした。又後者では、“潜在的攻撃欲求を一貫してあまり強くないとし、その上この欲求の表現が自由にできる。”としているものを肯定的評価者、それ以外を否定的評価者として分類した。又質問紙全体のスコアでは、体験型のカテゴリーに属する項目等、肯定、否定の勾配が意味的にはっきりしにくい10項目を除き53項目について集計したが、否定的評価の項目数が40%以上に及ぶものを否定的評価者、他を肯定的評価者とした。又表の左側は「現実的自己」と「理想的自己」の両評価間の“隔たり”DSの値を各被験者に

つき、項目毎に算出しそれを各下位カテゴリ毎及び全体について集計し、それぞれ合計値を出して群間比較を行ったものである。このDS値の出し方は〔実験I〕と同じ方法による。無回答項目が含まれる場合は、全項目に回答したとしての理論的推定値を算出したが、無回答項目が多すぎる被験者は除外して集計した。順を追って結果を見ると以下の通りである。

(1) 情緒的自覚性：具体的な項目は後の項目分析表に示した通りであるが情緒反応の活発さ衝動性への接近、自己実現等に関する内容が含まれている。P群に否定的評価者が多く、DSの値も他の2群に比し著しく大きくあり、N、S、いずれの群に対しても夫々有意差を示す。N、S両群間にはDSとDSの値とも有意差が認められない。

(2) 内的制禦 衝動やそれに附随する情緒 (affects) を処理する能力、及びその自律的機能に対する自信及び知的制禦力等がこの項目に含

まれる。二二でも3群は1)と同じ結果を示した。殊にS群はDS値が著しく小さく、N群に対しても有意差を示す程である。

(3) 外的制禦 これは外的(社会的)基準に従い感情表現や行動を調節する機能に因するものである。(例、私はこのことをやる時まわりに迷惑もかけないようにとの気づかいをよくする方だ——しない方だ、等。)二二ではPS評価に3群間の有意差が見られない。表の頻数分布から見て項目の作り方に問題の含まれることは否めないが、P群が絶対肯定的評価を示すのは、この群が対社会的な面で神経を使いすぎるとされる傾向をいくらか反映するものかも知れない。DS値ではS群が同じく小さく、他の2群との間に有意差を示している。

(4) 体験型 N, P両群に内向(行動の基準を専ら自己の内部に置く傾向、これに対して、外界の基準や目標により主に行動する傾向が外向傾向とされる。¹⁰⁰⁾) 優位はPSが多く、殊に

P群ではその傾向が大であるのに対し、S群は対向優位のPSを多く示し、PとS両群間には有意差が見られる。又P群では、収縮的PSを他の2群よりも有意味に多く示し、DS値も他の2群に比し有意差を以ってより大であった。尚N、S両群間にはこれら二つとも、PS、DS値とも有意差を見なかった。

(5) 愛情欲求 P群にやはり否定的評価傾向が大でありDS値の大きさに因してはN、S両群との間に夫々有意差を示す。

(6) 攻撃欲求 P群は他の2群に対して、攻撃欲求が潜在するのになそれを外部に表現しない"という内容を持った否定的評価の傾向が大であり、PS、DS値とも他群に比し有意差を示した。

(7) 情緒全体の安定性 ニニには所謂"浮動的不安"(free-floating anxiety)や身体的不安、情緒の緊張や葛藤、対人関係における不適応感等を示す項目が含まれるが、P群はこれまでの3人どのカテゴリーにおいても同様、低

いPS値と大きいDS値とを、他の2群との間に有意差を以って示した。S群は最小のDS値をとりN群との差も有意である。

(8)全得点 傾向紙全体を通じての総得点に関する結果もこれ迄の下位カテゴリーの結果に沿っており、特に(1)、(4)、(6)とはPS値、DS値いづれについても全く同じ得点順位及び各順位間の有意差を3群は示している。

以上も総合すれば、P群は全体を通じて、より低いPS値とより大きいDS値とも他2群との間に夫々有意さを以って示し、否定的な現実的自己の評価と、高い水準の理想的自己を選ぶ傾向を明確に自らの特徴としている。N群とS群とは共にこのP群と逆の傾向を示し、殊にS群とP群との差は著しるしく大である。N、S2群間においては殆んどのカテゴリーにつき有意差も見なかったが、全般に理想的自己の水準は一貫して低くS群では^{更に}N群を下まわるものである故、DS値は殆んどいづれ3群中最低値をとり、制禦に関する2つのカ

テゴリー 及び全体的安定性に因するそれとに
 おいてはN群との間にも有意差を示している
 。尚、ここでは、〔実験I〕を参考にし、IS
 値(理想的自己評価)はとり挙げなかった
 が、これは、評定スケールの枠が限定されて
 いることからPS値とDS値を問題にすればそ
 こにおのづとIS値のレベルは含まれて来る矣
 。又、ISについては絶対的な高さ等は問題に
 しようもなく、結局、PS値との間の相対的な
 中即ちDS値が、「現象的自己」のあり方の中
 の自己受容、自己肯定(尊重)の問題とも有
 意味に関係づけられうることか、従来の理論
 的実証的研究から^(2) 27) 67)も一般的に認められてい
 る^(2) 27) 67)矣等を考慮したことに基づく。

以上の様に、正常者(N)群と神経症(P)群
 との間には〔実験I〕におけるのと同じ結果
 が見られたのに対し、新たに加えた分裂病
 (S)群は、同じ不適な群ではあり乍らも、正
 常者群との比較において、P群とは著いしく
 異なる結果を示した点が注目される。「現

象的自己」のあり方に、仮説に従った不適応性が顕著に反映されているのはP群においてのみであり、S群では、これまでの分析では、P群よりむしろN群に近似した好相を示すからこれ以上に、独特の現象的な問題を自己評価の中に示しているとは云えないであろう。この点については、更に〔実験Ⅲ〕及び〔実験Ⅳ〕を重ねながら検討したい。

次に表2は各群の反応を項目毎に比較した項目分析の結果を有意差のあった項目のみについて掲げたものである。この分析においても上に見た様にP群のみが特に他の2群から弁別されやすい傾向を全体的に認めることができる。だが、この様に項目毎に見て行けば、N、S群間にも微妙な応答差をうかがうことができる。即ち、(表2)中▲印を付した項目ではN、P両群が同様に否定的評価を示すのに対し、S群のみが他の項目におけるのと同じ様に肯定的評価の傾向を持続させている。その結果N群との間にも有意差が生じており

このことから、S群は、N群と同様、肯定的評価を行うにしても、それがかたがり固執的に全項目に及ぶと云う点でN群とは異なつた独自性を見せている。これは値向項目の提示の仕方、もしどの項目も肯定的内容を先に示すと言つた一律の標式をとつていれば、それに対する機械的な反復応答を意味するのではないかとのおそれ、分裂病群では考えられるが、本値向紙では、肯定的評価と否定的評価の方向を何箇所かでは逆転させて配してあるため、そうした面で信頼性の疑われる応答がなされていゝるものとは考えられない。この点は後の実験ではもっと慎重に考慮するつもりであるが、かゝる項目分析にあうられたS群の特徴を利用することにより、S群の弁別性を、key items を導き出す事を通じて、少しでも増すことは可能であらう。

又、本値向紙の信頼性も折半法により次の標に検討した。即ち、現実的自己の評価PSについて、偶数番と奇数番の各項目を分割し、Sp-

earman - Brown⁸⁹⁾ の信頼係数を求めた。その結果、全群を通じては、 $r = (+).91$ であり、各群別に見ると N 群が $r = (+).87$ P 群が $r = (+).91$ S 群で $r = (+).88$ となったが、これによりかなり高い信頼性があるものと考えられる。

(表 2) 項目分析 (群間比較で有意差を見た項目のみ例示)

下位カテゴリ	項目番号	項目内容	対 象			群間比較 (χ^2 検定)		
			N	P	S	N-P	N-S	P-S
			肯・否 (n) (n)	肯・否 (n) (n)	肯・否 (n) (n)			
	②	私は工夫したり、独創的な思いつきエしたりするのがとくいだ。—— 不えた	22.6	16.14	16.7	*		
	⑧	私は自分の能力を生かしている。—— 生かせていない	16.12	15.15	19.2		*	**▲
	⑬	私は自分の気持ちや感情を自由に表現する。—— 内に抑えておこつてくる	16.11	13.17	18.6			*
	⑳	私は人と感情をあたかも結びつきをよく持つ。—— 持ちにくい	23.5	15.15	15.6	*		
	㉔	私は自分の中の衝動的なものを親しみに感じる。—— 二つが気がする	24.4	13.17	13.7	**		
I.	㉕	私はけからと興奮しやすい傾向に強い方だ。—— ない方だ	12.16	8.22	15.7		+	**▲
	㉙	私は自分のしたいことがよく行えている。—— 実現していない方だ	15.13	14.16	19.2		*	**▲
	㉚	私は自分が好きだ。—— 嫌いだ	16.12	10.20	15.8	+		+
	㉞	私は面白味のある人間だ。—— ない人間だ	19.8	11.19	16.6	*		*

(表2) の続き

項目	内容	対 象			群内比較 (2-検定)		
		N 肯定	P 肯定	S 肯定	N-P	N-S	P-S
35	私は他人(恋愛の場合)に強いと思う —— 弱いと思う	20.8	13.17	15.8	*		
61	私は活気に満ちている(生き生きしている) —— 無気力だ	20.8	8.22	20.4	**		**
3	私は物ごとを判断がするとい —— しない	23.5	16.14	18.5	*		
4	私は人に到底わかってもらえそうにない考えをする傾向が強い方だ —— ない方だ	21.7	15.15	14.8	*		
21	私は自分自身を頼りにできる —— 頼れなく不安だ	12.16	3.27	14.9	*		**
22	私は自分の感情を何とか処理するに自信が持てる —— 自信が持てない	25.3	17.13	13.7	*		
32	私は意気込みが強い方だ —— 弱い方だ	15.13	5.25	14.9	**		**
37	私は社交的だ —— 非社交的だ	19.9	12.18	17.6	*		*
38	私はその場の雰囲気によくとけこめる方だ —— とけこめない方だ	14.14	13.17	19.3		*	**▲
43	私は自信(人に頼る気持ち)が強い方だ —— 弱い方だ	11.17	9.21	16.7		*	**▲
45	私は人の好意や親切をいやすく受けられる —— 受けにくい	24.4	19.11	16.6	+		
49	私は人と正面衝突しなければならぬ時平気だ —— 平気でない	13.15	9.21	13.9			*
53	私は人に支配されやすい —— 人を支配(指導)する方だ	13.15	8.22	18.4		*	**▲
59	私は何かと疑い深い方だ —— 疑われない方だ	22.6	10.20	16.6	**		**
61	私は人づきあいがいい方だ —— 悪い方だ	25.3	19.11	20.2	*		+
62	私は人とのつきあいが楽しい —— わずらわしい	17.11	13.17	18.5			*
68	私は自分の境遇に満足している —— 不満だ	19.9	11.19	15.6	*		*
75	私は何かと不安が強くおこる方だ —— おこらない方だ	11.17	2.28	13.8	**		**
79	私は自分の体のことが気にする方だ —— 気にしない方だ	14.14	6.24	12.10	*		**
87	私は男(女)らしい —— 男(女)らしくない	20.8	12.18	17.6	*		*
88	私は気分が晴れると晴れやかな方だ —— 暗く沈んだ方だ	6.22	6.24	15.8		**	**▲
89	私は情熱者が多い —— 不安定だ	14.14	9.21	15.7			**
90	私の内部には緊張や葛藤が強い —— ない方だ	11.17	3.27	13.8	*		**
92	私は正常だ —— 異常だ(ふつうでない)	22.6	15.15	14.9	*		

補注 [記号 + ... p < .10 * ... p < .05 ** ... p < .01]

4	40	私は社会的に活躍するのが好きだ —— 嫌いだ	16.12	19.11	18.3		+	+	▲
---	----	------------------------	-------	-------	------	--	---	---	---

〔 4 〕 ま と め

自我機能に因するロールシャッハテストの解釈理論に基づいて実験 I よりも項目をより組織的に作成した新たな質問紙を用い、又分裂病群と更に加えて、3つの対象群がどの様に適応の違いを反映するかについて分析した。その結果、適応群である N (正常者) と不適応群の 1つ P (神経症) との間には実験 I の結果と更に裏づける差が認められた。しかしもう1つの不適応群である S (分裂病) は、P とは異なりむしろ N と同じ標本な答傾向を全体を通じて示した。従って P 群のみによりきわ立った現象的自己のあり方が見られたわけであり、S 群はその不適応性を直接的に反映する標本な特徴は全体として何ら示さなかった。しかし項目分析では、S 群は N 群以上に固執的な形での肯定的自己評価を与え、そうした云々は過度の肯定性を微妙にとらえれば、それをこの群独特の1つの特徴として示すこともできると考えられる。不適応2群

における夫々特異な反応傾向については、
 一部の終り及び中三部で更に考察する。
 又、本値内紙の信頼性はかなり高い信頼係数
 を以って認められた。

＜中12章＞〔実験Ⅳ〕客観的尺度として用い
 られている既成の値内紙—Barron,
 五. の “Ego-Strength” スケール — に
 よる実験

(但し ¹⁴²⁾これは村山正治との共同研究である。)

〔1〕目的

〔実験Ⅱ〕に見られた標本反応特徴を3対象
 群が他の値内紙においても示すかどうか、殊
 に応答を本研究が意図している標本、現象的
 自己のあり方として内的枠組からとらえよう
 とするのと異なり、値内紙を1つの客観的尺
 度として用いて応答を外的枠組から見ようと
 する標本本スケールにおける3群の応答はど
 うかを見ようとするものである。その結果か
 らこれまでの2つの実験での結果を値内紙全

般に因するものとしてかなり普遍化して考
えるものか或いは本研究の標本意図の下に作
成された質問紙のみに見られるあり限定され
たものとして考えるべきかを検討する。又特
に Barron, ⁽¹⁰⁾ F. のスケールを選んだのは、このス
ケールが「自我機能」の強さを質問紙法によ
って客観的に測定しようとする点に興味を持
たれたことと、この方法は1953年に出版して
以来米国で多くの注目を集め、以後、臨床的
に、心理治療の効果も被治療者側の基本的条
件としての“自我の強さ”から予測する方法と
して盛んに用いられ、又その妥当性研究が現
在までに数多く重ねられて来ていること等
^{(11) (98) (126) (160)}
^{(161) (162) (165)}による。

〔2〕方法

1) 対象

(表 3)

	人 数			年 令	
	計	男	女	平均	範囲
N (正常者) 群	85 ⁽¹⁾	83 ⁽¹⁾	2 ⁽¹⁾	18.9才	18才~21才
P (神経症) 群	37	26	11	27.6才	15才~52才
S (分裂病) 群	40	27	13	32.0才	16才~48才

神経症群は三聖病院入院中の森田氏神経症患者、分裂病群は荏本病院入院中の定型性分裂病患者で知能が普通以上、又陳旧のものでなくかゝるテストの可能な患者を医師に選出してもらった。

2) テスト材料：Barron, F.¹⁰⁾ の "Ego-strength" scale
 "Ego-strength" スケールは、MMPIの中から自我機能に關係の深い68項目をBarronが選択して作成したものである。彼によれば、自我機能の一般因子は次の標本諸側面から考えられるとされる。即ち、身体的な恒常性 (stability) と健康、明確な現実感覚 (strong sense of reality)、適応感及び活気 (feelings of personal adequacy and vitality)、許容的な道徳性、偏理的偏見がないこと、情緒表現や情緒交流の自発性、知能等がそれである。自我機能の健全さについては既に第1部第3章の[4]で総合的に考察しその中にはBarronの考え方も参照されていたが、彼は自我心理学的観点からかゝる自我の強さを考えておりその本研究でとり扱う自我

機能の諸側面とつながりを有する。即ち、Barronの“自我の強さ”の概念の中、身体的健全さや知能は自我の一次的自律装置と関係が深く、又、許容的な道德感や偏理の偏見の無さ等は自我理想及び心理的移行(shift)の機能即ち衝動の奔放に活動する一次過程への一時的部分的な自由な接近と関係づけられ、適応感¹⁾は自我同一性と深い関係を有するものである。このスケールは、初めはMMPIを因子分析することによって作成されたものではなく、Barron自身の自我心理学に基づくオリジナルな発想の下にMMPI中より任意に項目を選出して編成したものである。しかし、作成されて後はBarron自身も様々な構成概念妥当性(Construct validity)の研究を行っており、又他の多くの研究者達によっても妥当性が検討され、肯定的結果も多く得られるに至っている。その中には、因子分析法によりこの“Ego-strength”スコア(ES得点)がMMPIの中で一般因子を構成しているのを実証する研究も

含まれる⁹⁶⁾。又信頼性についても、折半法で $r=.76$ 、3ヶ月間隔の再テスト法で $r=.72$ の値が導¹⁰⁾られている。

本実験で実際に使用したのは、Barron のスケールも共同研究者と共に翻訳したものであるがこれに際しては東大で標準化されつつある日本人向きの MMPI もも参考にし、できるだけ自然な日本語でしかも原版のニュアンスを伝えうる言葉にする標榜¹¹⁾調査等を試みて努力した。又宗教に關する項目等で我国では明らかに不適切と思われる項目は除くこととし(表4)に示した通り、68項目中52項目を採用することとなった。応答形式は各項目に対して、A〔その通りだ〕、B〔どちらかと云えばまあそうだ〕、C〔どちらかと云えばそんなことはない方だ〕、D〔そんなことはまずない〕の4つを選択肢として用意し、その中のいずれかに応答する形をとった。原版では〔そうです〕(true)と〔ちがいます〕(false)の2つの選択肢に限られていたが我国

では更に各々も2分し計4通りの答え方を用意した。これは予備テスト時, "true" とか "false" の2つに割り切ることを難かしいとする訴えが多かったことによる。項目の配列も無作為に変えた。尚本スケールは本来ならばMMPI全部を施行しその中よりES得点として算出さるべきものであるが Barron, F. に直接問い合わせたところ、その時の都合で、これの(表4) "Ego-strength (ESと略)" スケール

下位カテゴリー		項目数	
		(Barron)	(本研究)
1. 身体的機能生理学的安定性 (physical functioning and physiological stability)		10	9
2. 精神衰弱症状や引きこりの傾向 (psychasthenia and reclusiveness)		10	10
3. 宗教に対する態度 (attitude toward religion)		6	1
4. 道徳的態度 (moral posture)		11	11
5. 現実感 (sense of reality)		8	8
6. 自己適応感 (personal adequacy)		11	7
7. 恐怖症状、幼見的不安 (phobias, infantile anxiety)		5	5
8. その他		7	1
		計68	計52

それをMMPIとは別に用いる時もあるとの返事であった故。そこで本スケールのみを単独に施行した。尚この“Ego-strength (ES)”スケールの翻案は資料中の「自己評価表」(後題)
(資料4)
である。

[3] 結果の整理と考察

(表5) ES得点の3群間比較

	ES 得 点			3群間の差の有意性 (t検定)		
	N	P	S	N-P	N-S	P-S
ES平均値	35.4	26.4	32.4	*** $t=6.35$	* $t=2.43$	*** $t=3.69$
▲修正ES得点 平均値	46.0	34.4	42.1	(分散比については各群間に 有意差なし)		
Barronの被験 者の平均値	50.92 (又は52.3)	41.04				

註 ▲ 修正ES得点の平均値を算出したのはBarronの結果と対照させるためであり、68項目を用いたとした場合の理論的推定値である。

尚、*-- $p<.05$ **-- $p<.01$ ***-- $p<.001$

表5によるとBarronの値に比し、本被験者では低目の結果が得られたことになる。P群が最も低い値をとり次にS群続いてN群の順に値が高くなっている。3群間の差はいずれも有意であった。ここで問題となるのはS群が

P群より高い値をとる ことであろう。Barron 自身はP群を対象に入れていない。これは級が、一応心理治療の対象たりうる患者を考えその範囲内で治癒し易さを予測しようとするためと思われる。他の関連研究もみな分裂病患者を対象に含めていない。従つてP群の結果については対照させてみる資料がないわけである。しかし、これが「自我の強さ」を測定する客観テストとして提出されたものであることを考えると、分裂病群の方が神経症群より自我の強さが高度であると言う肯づきがたい結果を示すことになる。Barronの「自我」に関する考え方が本研究におけると同様自我心理学に基づいている以上、理論と明らかに矛盾した結果が出ている。これにはこのスケールそのものに妥当性研究の余地がまだまだ残されていることを指しているとも考えられようか。更にもう一つ質問紙法の用い方、解法に関する問題がここからも生じて来るのではないだろうか。即ち被験者の答えをそのま

ま客観的事実を述べているものとして換者の枠組でとらえるよりも、「『自分は〇〇である』と自己をみている②」という形における②のレベル、つまり被験者の内的枠組での現象的資料として受けとった方がよいのではないかと云うことである。もしESスケールに対する被験者の反応も①のレベルで受けとるならば〔実験Ⅲ〕の結果は、このスケールが「自我の強さ即ち機能的健全性を測定するのに適さない」との資料を1つ提供することにもなる。たゞ、結果をも②のレベルで受けとれば本結果も〔実験Ⅱ〕と同様。S群に特徴的な肯定的自己評価の傾向、P群に顕著な否定的自己評価の傾向を示す資料として受けとれる。しかし、これ等が求々分裂病、神経症の各群に固有な反応パターンであるか否かについては次の〔実験Ⅳ〕の結果をも参照して慎重に検討したい。

次の(表6)はESスケールの項目分析である。各項目毎に3群間の比較を行い、差の有意

(表 6) 項目分析

項目番号						差の有意性			項目番号						差の有意性		
	A	B	C	D	記号	N-P	P-S	N-S		A	B	C	D	記号	N-P	P-S	N-S
1	N 12	45	23	5	0				15	N 2	4	25	54	0			
	P 5	3	7	12	0	***	***	—		P 4	1	7	24	1	—	—	—
	S 8	18	5	9	0					S 3	3	6	27	1			
2	N 3	19	40	23	0				16	N 15	36	26	8	0			
	P 6	12	7	12	0	*	—	(*)		P 11	8	9	7	2		(*)	***
	S 8	6	7	19	0					S 4	9	9	17	1			
3	N 1	6	47	21	0				17	N 31	33	17	3	1			
	P 10	11	8	6	2	***	***	(***)		P 11	12	5	7	2	—	—	—
	S 0	4	7	28	1					S 18	11	3	6	2			
4	N 12	25	33	15	0				18	N 7	26	39	12	1			
	P 2	9	7	17	2	—	(*)	(*)		P 10	18	4	3	2	***	—	*
	S 2	7	3	16	2					S 12	11	7	9	1			
5	N 2	27	36	20	0				19	N 17	40	21	5	2			
	P 22	11	2	0	2	***	***	—		P 14	10	7	4	2	*	—	—
	S 1	7	15	16	1					S 13	10	3	14	0			
6	N 1	13	48	21	2				20	N 8	28	37	11	1			
	P 5	1	11	7	3	***	—	*		P 2	9	12	13	1	(**)	—	(*)
	S 3	7	11	17	2					S 8	9	10	12	1			
7	N 7	36	33	8	1				21	N 12	39	30	3	1			
	P 16	17	1	3	0	***	***	***		P 15	12	6	4	0	(***)	(*)	—
	S 11	14	10	15	0					S 6	14	10	10	0			
8	N 3	16	38	27	1				22	N 8	25	27	21	4			
	P 7	7	10	10	3	*	—	*		P 2	5	9	14	7	(*)	—	*
	S 10	7	3	18	2					S 5	3	11	20	1			
9	N 7	29	37	11	1				23	N 26	38	17	2	2			
	P 10	8	11	7	1	—	—	***		P 6	12	5	9	5	*	—	***
	S 7	5	13	14	1					S 8	10	7	13	2			
10	N 14	29	28	13	1				24	N 8	37	31	6	3			
	P 6	11	6	13	1	*	—	(***)		P 2	12	10	8	5	—	—	(***)
	S 9	7	4	18	2					S 5	10	7	17	1			
11	N 11	19	33	22	0				25	N 18	27	35	4	1			
	P 18	10	7	2	0	***	***	—		P 8	5	15	7	2	—	—	(**)
	S 9	6	10	14	1					S 15	7	6	10	2			
12	N 3	20	25	36	1				26	N 43	24	13	5	0			
	P 5	11	8	13	0	—	(*)	(*)		P 17	10	6	2	2	—	—	*
	S 5	4	5	25	1					S 12	11	6	11	0			
13	N 11	41	25	7	1				27	N 3	22	27	30	3			
	P 10	9	7	8	3	(*)	—	*		P 1	5	12	13	6	—	—	(**)
	S 9	5	8	15	3					S 6	2	10	21	1			
14	N 5	29	39	11	1				28	N 21	42	20	2	0			
	P 12	5	10	9	1	(***)	—	(***)		P 15	15	5	1	1	—	—	(***)
	S 10	12	9	7	2					S 25	11	3	1	0			

(表6)の続き

項目番号		A	B	C	D	記号	差の有意性		
							N-P	P-S	N-S
29	N	39	28	14	4	0	—	(*)	—
	P	13	14	8	2	0			
	S	24	7	3	6	0			
30	N	25	24	19	16	1	—	(*)	(**)
	P	12	10	8	7	0			
	S	12	3	5	15	5			
31	N	2	16	32	35	0	—	—	(***)
	P	5	3	8	15	6			
	S	2	1	5	26	6			
32	N	51	23	8	3	0	—	—	—
	P	19	5	5	6	2			
	S	21	6	5	7	1			
33	N	2	3	12	68	0	—	—	—
	P	3	3	3	26	2			
	S	3	2	5	30	0			
34	N	4	18	31	31	1	*	(**)	—
	P	10	7	10	7	3			
	S	10	3	6	20	1			
35	N	10	25	29	20	1	***	***	(*)
	P	23	7	4	3	0			
	S	10	3	10	16	1			
36	N	2	12	23	48	0	***	***	(*)
	P	7	10	8	12	0			
	S	5	1	5	28	1			
37	N	2	1	24	53	0	—	—	—
	P	4	2	6	20	5			
	S	7	3	3	26	1			
38	N	7	12	28	38	0	***	—	(**)
	P	10	8	3	14	2			
	S	9	3	3	24	1			
39	N	7	22	25	31	0	***	—	—
	P	11	5	8	10	3			
	S	6	4	9	20	1			
40	N	2	7	27	49	0	—	—	(*)
	P	1	0	7	25	4			
	S	7	3	5	25	0			
41	N	68	4	3	10	0	*	—	***
	P	22	0	2	11	2			
	S	19	3	1	16	1			
42	N	4	20	44	17	0	***	***	(***)
	P	17	7	7	5	1			
	S	7	7	9	17	0			
43	N	3	2	14	66	0	—	—	—
	P	3	2	4	28	0			
	S	0	1	5	34	0			
44	N	6	9	13	57	0	—	—	—
	P	6	5	7	19	0			
	S	4	3	7	25	1			
45	N	61	19	11	3	1	***	*	***
	P	15	3	4	13	2			
	S	19	3	3	15	0			
46	N	45	38	1	1	0	***	(*)	(*)
	P	15	14	7	1	0			
	S	26	9	4	1	0			
47	N	56	24	5	0	0	***	(*)	—
	P	11	15	8	2	1			
	S	22	15	2	1	0			
48	N	47	28	7	3	0	**	—	—
	P	11	13	9	2	2			
	S	21	11	5	2	1			
49	N	5	15	28	37	0	—	(***)	(***)
	P	5	9	10	11	2			
	S	9	2	7	21	1			
50	N	1	3	15	66	0	—	—	(***)
	P	4	2	7	23	1			
	S	4	3	11	21	1			
51	N	2	11	29	43	0	***	*	—
	P	10	8	10	8	1			
	S	3	6	8	23	0			
52	N	10	19	33	23	0	—	—	(*)
	P	8	3	12	11	3			
	S	7	6	7	19	1			

註 * ... $p < 0.05$

** ... $p < 0.01$

*** ... $p < 0.001$

註 表中斜線は各項目の勾配を示すのでFS得点に加算される正の側への応答であることを示す。

性を検定した。Barron自身は総ES得点のみを問題にしており、項目によって、それほど自我の強さを適切に表現していない様に思われるものがある。全体の値は非常に有用だとし（手紙による直接の問い合わせに対する返答）他の研究者達によっても殆んど各項目についての検討はなされていない。だが本実験では3群の互な特徴を一つ詳細に検討しようとの意図の下に項目分析を行った。

分析は、A, B, C, D 4つの選択肢をそのまま用いる仕方と、AとBをとしてCとDを各々1まとめにして用いる方法と両方によって χ^2 検定を行った。表中()で示したのは前者のやり方による結果であり、それ以外は後者の仕方によるものである。これによると、項目によって特にN群を他の2群から区別するもの(2, 6, 8, 10, 13, 14, 18, 20, 22, 23, 38, 41, 45⁴⁶)、特にP群を他の2群から区別するもの(1, 5, 11, 21, 34, 47, 51)、又特にS群を他から区別するもの(4

, 12, 16, 30, 49) そしてこれ等に加え, 3 群を各々区別するもの (3, 7, 35, 36, 42, 45, 46) 等に分かれるのが見られる。この 2 群間にも全然有意差の認められなかったのは, 残りの 7 項目である。

この結果から, 総得点のみではなく各項目毎の回答により 3 群間をもう少し詳しく区別していることがわかる。従って, この分析に基づいて, 特に N 群を弁別し易い項目に対する回答から N 得点: $S(N)$, 同様にして P 得点: $S(P)$, S 得点: $S(S)$ を各被験者毎に算出し群間比較を行ったものが (表 7) である。

(表 7) $S(N)$, $S(P)$, $S(S)$ 各得点による比較

得点の種類	対象群			群内比較		
	N	P	S	$N-P$	$P-S$ (χ^2 検定)	$N-S$
$S(S)$: $S(S) \leq 4$	65 ^(A)	30 ^(A)	14 ^(A)			
	20	7	26		***	***
$S(P)$: $S(P) \leq 5$	69	7	30			
	16	30	10	***	***	
$S(N)$: $S(N) \leq 4$	20	30	29			
	65	7	11	***		***

[註 *** $P < .001$]

この結果は先の項目分析に基づくものである

故当然の二にもなるが、〔実験Ⅱ〕と同様、一見紛らわしいN群とS群の得た結果も各項目単位の反応の用い方により微妙な区別が可能となる一資料が二二でも得られた。

〔4〕まとめ

同じ質問紙でも、その反応を内的枠組から見に行こうと云え作成されたのではなく、自我機能の強じんさ (Ego-strength) を直接測定する客観的尺度として本来作成され、その有効性が臨床的にも又妥当性研究の面からも認められつつあるESスケールを用いて3群の反応を比較した。その結果、正常者群は他の不適応2群よりも高い値をとり、その点に因する限りは従来の研究結果と一致するが、分裂病群 (これは Barron 自身の研究及び他の関連研究においてその対象中に含まれていない。) が神経症群より高い値をとり、「自我」理論から説明のつきにくい矛盾した資料が得られた。しかし、この結果を、自我の強さそのものを直接示すものとして外的客観的な枠組から

見る代りに、意識的自己の現象を現わすものとして内的枠組から見る観方を試みるならば、〔実験Ⅱ〕とも対応する興味深い資料となってくる。又項目分析をかける観方から行った場合、即ち、各項目が自我機能のあり方を適切に示すものであるかどうかを検討するのでなく「自我機能」的な意味にこだわらず、たゞ内的的自己のとうえ方を吟味する意図の下に応答傾向を比較する場合、スケール全体にわたって、N、P、S 3 群を各々独立的に辨别しうるほどの種類の項目の含まれることも認められた。そしてこれ等の鍵項目 (key items) に基づき N 得点、P 得点、S 得点を算出すればこれによつてともかく 3 群間の差をより明確に示すことができ、分裂病群の応答にも、かける項目分析を通じた場合は、他の 2 群と區別される特徴がいくらか認められることがわかった。但し、こうした資料が得られたと云うだけでその意味するとこそは明らかでない。更に実験を重ねて後、まとめて

考察する。

< 中 13 章 > [実験 IV] (= [実験 B]) 改訂質問紙 - その 3 - による実験及び、質問紙 - その 4 - による構成概念妥当性 (Construct validity) の検討

(1) 目的

質問紙 - その 2 - を更に組織的に改訂した質問紙 - その 3 - 即ち資料 5 の「自己評価表 - R. I. -」(註. R. は Rorschach の, I. は Inventory の右頭文字をとったもので、本質問紙が実験 II で用いたものと同じく、ロ・テストの自我心理学的解釈理論を背景として作成されたことからこの標本副称を与えた。)により、[実験 III] までに一貫して見られたところの、N、P、S 各群における特徴的な「現象的自己」のあり方を支持する資料がここでも更に附加されるかどうかを調べるのと、又、質問紙法を用いて行ってきたかゝる一連の方法が「現象的自己」のあり方を見る一つの有効な手段たり

得ているかの問題を信頼性及び構成概念妥当性 (construct validity) の面から検討すること
この二つが本章の課題である。従って本実験は次の仮説の検証を目的とする。

仮説 1

「自己評価表 - R.I. -」において、神経症群が他の二群から区別される顕著な特徴、即ち、否定的な「現実の自己」評価と、現実と理想の両「自己」評価間の不一致の大きさを著いるしく示すであろう。これに対し、正常者と分裂病者の両群は、全体の傾向として似通った結果、即ち、神経症群と逆に、肯定的な「現実の自己」評価と現実と理想の両「自己」評価間の隔りの少なさを示すであろう。

仮説 2

累積的実験の結果作成された「自己評価表 - R.I. -」は、「現象的自己」のあり方を、肯定的 - 否定的価値づけの面からとらえる一つの方法としてかなり高い信頼性を有するものである。又、構成概念、即ち自己の価値づ

のあり方をとらえようとする本質問紙の意図の妥当性は、個々人の中に内在化した形で形成される価値基準そのものには一般的な社会的価値基準の参考が大であることから、「自己」のユニークな価値づけは後者への適合感と密接な関係にあることが理論的に予想される故、社会的価値基準への適合感を調べた別の資料との相関をみることにより、1つ検証されるであろう。質問紙—その4—は後者に関する資料を得るために作成されたものであるが、この結果と、質問紙—その3—の結果とはかなり高い相関を示すであろう。

〔2〕方法

1) 対象

対象	人数			年齢		知能 (I.Q.)	
	計 _(n)	男 _(n)	女 _(n)	平均 _(x)	S. D. _(x)	平均	範囲
N	30	23	7	21.1	2.14		
P	30	23	7	26.6	6.82	115.2	98~130
S	30	18	12	29.3	6.69	108.8	90~130

上表の通り、正常者（学生及び一般会社員）

神経症（病院入院中の森田氏神経症）、分裂病（病院入院中の定型的精神分裂病と診断され、テスト可能として医師に選択されたもの）の3群である。本実験では、不適な2群の知能をより確実に統制するため知能テスト（ウェクスラーベールヴェー法）を実施した。平均I.Q.の具体的値を比較して問題にするよりも普通知以上であることを確かめるために行ったものであり、正常者群では殆んどが大学生で他は会社の若手技術員として有能な人々であるため普通知以下の者をチェックして除外する必要はないものと認められた。従って正常者群ではテストを施行しなかったが、おそらく他の2群より平均知能は高いものと思われる。しかし本研究では大きく人格の適応性を研究課題とする関係から、それほど極端でないことが予想される二の標本知能差は一応問題にしないことにした。要するに、A群が高卒以上で先述した如く殆んどが大学生であり、P群は旧制中学（又は高等女学校）或いは高校

卒以上であり、この中約40%が大学卒、卒者である。S群は中学卒及び中退以上の者から成り、中学卒及び中学中退者は全体の約15%、大学中退及び卒業者が約30%で残りはすべて旧制中学或いは高校卒レベルである。

2) テスト

①〔自己評価表 - R.I. -〕の作成

(資料5)として附録したものがこれであるが、質問紙 - その2 - を次の標本表で改訂した。

(1) 各下位カテゴリーに属する項目数をできるだけ均一にする。但しカテゴリーの重要度による加減はいくらか行う。

(2) 各カテゴリーに配属する項目数はすべて奇数個にし、「自己」評価の肯定性、否定性をカテゴリー別に纏めることが数量的に可能であるようにしておく。

(3) 先の質問紙で重複した意味を持つことがわかった項目やカテゴリーはなるべく単一化する。例えば、体験型に関する項目は制禦機能に関するそれと非常に似通っているため

は自我機能を直接反映するものとしてより適当と思われる制衡機能のカテゴリーのみにしぼることとし、前者を除いた。

その他〔実験Ⅱ〕における項目分析も参考にし、項目の言語表現のあり方を吟味し改訂した。

(4) 項目の評定スケールの肯定－否定の勾配が單調にならない標にした。即ち、肯定型の記述にけいまり最後の極が否定型の記述で終るスケールとその逆のものを全体で約半数ずつにし、5項目ずつでこの記述標式が逆転する標な配列法もとり、でたらめな機械的反応をケエックすることにした。この結果、本実験の被験者はすべてこの意味でのでたらめな反応を行っていないことが認められた。又、本自己評価表の応答標式は、質問紙－その2－におけるのと全く同じであり附録からも明らかを通り、各項目毎に一応6段階のきざみを持つスケールを備え、「現実」と「理想」の両自己評定を一項目ずつ行わせる形式を

とっている。これを各被験者毎に個別施行した。

(表 8) 「自己評価表 R.T.」の下位カテゴリー
カテゴリー 項目番号 数

1.. 全般的な情緒の安定性	(1) ~ (9)	9
2.. 愛情欲求の受容	(10) ~ (12)	3
3.. 攻撃性 { 受容	(13) ~ (15)	3
{ 表現	(16) ~ (18)	3
4.. 外的制禦 (対象との情緒的関係における、感情表現の面での制禦)	(19) ~ (27)	9
5.. 情緒反応の自由さ、活潑さ	(28) ~ (32)	5
6.. 原始的衝動性への接近親和性	(40) ~ (46)	7
7.. 精神機能全体の活潑さ、豊かさ	(33) ~ (39)	7
8.. 内的制禦 (自我が衝動に吞み込まれず、衝動を統制する機能、成功し、自律的な適応機能に転じた防衛)	(47) ~ (53)	7
9.. 現実吟味 (判断力、思考力などもも皆量に含み、持った現実を正しくありのまに把握する機能)	(54) ~ (58)	5
10.. 自己実現化化傾向 (個性と社会的な能力を十分發揮する傾向)	(59) ~ (63)	5

② 質問紙—その4—(社会的価値基準への適合感の調査) の作成

附録の資料6がこれであるが、身体面、知的能力、道徳性、思想、教養、仕事的能力、生活習慣、対人関係、家庭、親との関係、家族との関係、性的役割等社会的存在としての個人が、自分自身をどうしてもそれと照らし合わせて見ざるを得ないところの社会的価値基準に因する諸側面をとり挙げ計46項目(大項目の数でありこれには更にいくつかの下位項目も配属される。)を設定した。

応答様式は各項目毎に

(1) そのことについては大体いつも“人並”だと思え他人にひけ目を感じずにいられる……
----- ○印

(2) そのことについては大体いつも“人並以上”だと言う気がしている。----- ◎印

(3), (1) でも (2) でもない ----- V印

(4) そのことは自分にとって無関係である……
----- (下線を引く)

これ等 4通りの回答の中どれかを選ぶ形をとる。尚、この質問紙-304-は後りに S. V. (> Social Values) テストと名づけておく。

これも「自己評価表-R.I.-」と相前後して個別に施行した。

〔3〕結果の整理と考察

(表9)は「自己評価表-R.I.-」における回答の群間比較を行ったものである。各下位カテゴリ-毎に「現実的自己」即ちPSの評価の群間比較を行ったところ、P群は、1、3、5、7、8、10と半分以上のカテゴリ-にわたりをじて又更に全体を通じての総評価において、他の2群より有意味に多い否定的自己評価を示した。他の2群のいずれとも有意差が見られなかったのは、3の攻撃性の認知(受容)面に関するものと4の外的制禦に関する回答とである。前者については3群とも各々半数以上が攻撃欲求の存在を認める回答をしていることから特にP群のみに顕著な特徴と云うべきものが見られなかったわけである。

(表 19) 「自己評価表-R.T.-1」の回答の群間比較

D S			項 目	P S							
群 間 比 較				評 価 の 分 類		対 象		群 間 比 較			
N - P	N - S	P - S				N	P	S	N - P	N - S	P - S
***		***	1. 全般的な情緒的適性	肯 (S ≥ 4.5)	(N)	19	(N)	4	23	***	***
				否 (S < 4.5)		11		26	7		
	**	***	2. 愛情欲求	肯 (S ≥ 2)		17		10	15	†	
				否 (S < 2)		13		20	15		
	**	***	3. 攻撃性	肯 (S ≥ 2)		18		17	15		
				否 (S < 2)		12		13	15		
**		***	3. 認知(受容)表現	肯 (S ≥ 1.5)		18		5	16	**	**
				否 (S < 1.5)		12		25	14		
		**	4. 対外的制禦	肯 (S ≥ 5.5)		16		14	18		
				否 (S < 5.5)		14		16	12		
**		***	5. 情緒反応の自由さ	肯 (S ≥ 3)		19		8	20	**	**
				否 (S < 3)		11		22	10		
**		***	6. 衝動性への接近(認知)	肯 (S > 4.5)		20		9	14	**	
				否 (S ≤ 4.5)		10		21	16		
**		***	7. 精神機能の活潑	肯 (S > 3.5)		22		7	17	***	**
				否 (S ≤ 3.5)		8		23	13		
**		**	8. 内的制禦	肯 (S > 3.5)		16		9	21	†	**
				否 (S ≤ 3.5)		14		21	9		
**		**	9. 現実の興味	肯 (S > 3.5)		19		8	13	**	
				否 (S ≤ 3.5)		11		22	17		
**	**	***	10. 自己実現傾向	肯 (S ≥ 3)		24		4	22	***	***
				否 (S < 3)		6		26	8		
			総 算	PS aMdn		24.0		24.5	37.0	**	**
**	*	**		DS aMdn		89.5		157.5	44.5		

註. 「隔たり」の値 DS については
 スペースの都合上、人数の分布
 を示さなかったが、各項目毎
 に中央値で区切って χ^2 検定
 を行った。

{ 肯 : 肯定的評価
 否 : 否定的評価

† : $p < .10$
 * : $p < .05$
 ** : $p < .01$
 *** : $p < .001$

検定は χ^2 テスト、及び U テストによる。

が従って P 群はこの攻撃性に関するカテゴリー
 一では、“潜在的に攻撃性が存在することは
 認められそれを外部に表出しにくい”とする
 応答のタイプを多く示すことになる。又後者
 については、N、S 両群が過半数の肯定的評
 価者（外的制御がゆきとばしているとする方
 に応答する人）を含み、P 群では否定的評価
 者の方が過半数を占めているが、3 群間に有
 意差が認められるまでには至っておらず、こ
 れ等 2 つのカテゴリーにおける結果も〔実験
 II〕の場合と全く一致していることが認めら
 れる。

又 N、S 両群間には全カテゴリーを通じてこ
 の PS 評価には全く有意差が認められなかった。
 ・この標に P 群のみが他の 2 群から顕著に区
 別される否定的（貶低的）評価傾向を示すこ
 とは、従来からの実験をも含めて一貫した反
 応型として認められるわけであり、この標に
 一貫した反応傾向は、DS 値においても同じ標
 に、常にこの値が他の 2 群に比し有意味に大

であると言う形で認められる。S群においてはこのDS値が殊に小さく、総DS値ではN群との間にすら有意差を示している。かくて本実験の仮説Ⅰはほぼ実証された。

〔註〕：結果の整理法について

(1) カテゴリー毎に、各個人のPS評価を肯定的と否定的に分類する基準は、配属されている項目数の過半数を占めるか否かに置く。そして各項目毎の肯定－否定評価の分類はスケールの中央奥が評定できない空白の○印になっているため、スケール上左右いずれに評定されているかによっておのづとなし得る。又DS値の算出法は従来通りPS評価とIS評価の目盛差を数えその数字をそのまま、その項目のDS値とする。

(2) 又PS評価総値の算出においては、これが自我機能の強さ(健全性)にかかわるものであることから、愛情欲求と攻撃性の2つのカテゴリーにおける評定のとり扱いは次の様に

行った。これ等は自我心理学的には自我機能と深い関係を有するものであるが、本質同紙においては、これ等の自我機能上の意味(中性化の方向への表出により自我備給的エネルギーになること、抑圧されずに対象関係において能動的に発現すること、又愛情欲求に関してはその基本的充足と分化、成熟等が問題となる。)を意識的な人称記述に転じることがむづかしく、結局、これ等2つの衝動的欲求の発動が認知(受容)されているか、又攻撃性に関してはその表出が禁止されすぎているかどうかにかゝわる表現となっているに過ぎない。これ等の欲求の認知は、他のカテゴリーに比し能動的な自我機能とかゝわる意味が少なく、又他の項目における肯定-否定の評価に比して、自分自身の自我機能を「健全である」と意識していることを直接的に示すものか、どうかの点においてもや、問題となる。即ち、これ等は全体的な自我の健全度を意識的に把握したものとしてはいくらか

間接的な意味内容を有する項目から成っているとも見るべきである故、全体的な自我機能と意識の上で肯定的に評価しているか否かをなるべく直接的に示すべきPS総点の算出においては、これ等2欲求の認知(受容)に関する6項目は一応除外することとした。従って残りの57項目における肯定的PS評価数を以てPS総点とした。故に得点分布は0点～57点となる。尚、各個人毎にカテゴリ別PS得点及びαDS得点を算出したわけであるが、P群92名はIS評価に空白が多くDS点が出せなかった。

(表10) 質問紙-394- (S.V.テスト) における S.V.(適合)得点の群間比較

各群得点の中央値			群間比較 (Uテスト C.R.)		
N	P	S	N-P	N-S	P-S
59.0	42.5	62.0	3.009	0.813	3.992
			**		**
			註: ** $P < .01$		

上表は、先述した如く「自己評価表-R.I.-」の構成概念妥当性検討の目的で作成したS.V.

テストの S. V. (適合) 得点を群間比較したものである。この得点は、4通りの応答標式の中、◎印の答えを2点、○印を1点、▽印を0点とし下線の引かれた項目は除外して算出した。結局各項目の得点を総和した合計点が問題となるが、下線の引かれた項目数にかなりの個人差があるため、これを60項目全部に応答した場合の理論的推定値に換算した。(従って換算得点の分布は理論的に0点～120点となる。)

この S. V. 得点が、自己評価表 -R.I.- の安否性を実証しうる上で一役買いうるためには、この得点そのものがすでに先の PS, DS 両得点と同じ標にある群間で異なっておりなければならないが、表11に示した結果からは P 群が、ここでも他の2群との間に有意差を以って最小値をとることが認められ、N, S 両群間には、先の PS 得点の場合と同様有意差が見られなかった。

(表14.) の相関係数は Spearman の r_s ^{*)} である

(表 11.) S. V. (適合) 得点と PS 点 及び DS 点との関係

関 係	相関係数 r_s の 値	r_s の 値 の 有 意 性 ($CR = \frac{r_s}{\sigma_{r_s}}$)
PS と S.V.	$r_s = +.67$	$CR = 6.34$ **
DS と S.V.	$r_s = +.62$	$CR = 5.82$ **

註 ** $P < .01$

が、PS と S.V. との間 及び DS と S.V. との間の各 r_s は、それほど高い値を示さなかったが、共に統計的には 1% レベルの危険率で有意である。 r_s の値がそれほど高く出なかったことには、S.V. 得点算出の場合に無関係項目数（応答標式の (4)）の個人差による影響を排除する目的で先述した換算点を出したことがいくらか関係しているかも知れないが、いずれにしても有意な相関が見出され、構成概念の単一性を支持する側の 1 つの資料が得られた。

次に「自己評価表 - R.I. -」の信頼性であるが、これは (表 12₈₉) に示した通りである。

折半法による検討は各群及び全群を対象とし

(表 12) 「自己評価表-R.I.-1」の信頼性検討

方 法	得点の種類	Spearman - Brown の信頼係数			
		N	P	S	全 群
折 半 法	PS	$r = .90$	$r = .89$	$r = .87$	$r = .89$
	DS	$r = .87$	$r = .91$	$r = .88$	$r = .91$
再 検 査 法 (3週間間隔)	PS	$r = .89$			
	DS	$r = .92$			

て PS, DS 両スニ P について行い、表の標本 r の値を得たが、これは〔実験Ⅱ〕における質問紙-R.I.-1 に関する信頼係数とほぼ同じ値を示している。又再検査法による信頼性²⁹⁾の検討は正常者 N 群についてのみ行った。これは、分裂病患者 S 群の場合は治療上の都合や又退院等によりある一定期間を置いて再検査するに困難であったためであり、又神経症患者 P 群では、やはり S 群と同様な状況であった。その他、治療による変化の要因が考えられなければならない故、これを対象として再検査法により信頼性を検討するには不適当と思われたからである。このあたりは非常に微妙な問題

であるが、いずれにしても再検査による信頼性の検討はそれが対象群の条件に照して明確な意味を持つ場合になされるべきであろう。その点、「現象的自己」がより適応的な意味を持って確立されているであろうと二つの正常者群はこの方法で信頼性を検査するのにおさわしい対象と思われる。N群について行った再検査法による信頼係数は表にある通りPSにおいては $r = .89$ 、DSでは $r = .92$ であり、これ等の各係数から本質向紙はかなり高い信頼性を有するものと見做される。

〔4〕まとめ

〔1〕の目的で掲げた仮説1及び2がいずれも実証され、〔実験I〕以来の累積的研究に基づいて作成された本質向紙が、適応度を異にするN、P、S3群の「現象的自己」のあり方を、肯定的—否定的価値づけの面から、各々ある一貫したパターンとしてとらえる上で有効に信頼しうる一つの方法であることがわかった。

＜第14章＞第1部の総括と結論

ここでは、第1編の理論的研究を背景としながら、同じく第1編第2部で述べた本研究の目的及び全体的な仮説に基づいて、適応度を異にするN、P、S3群の「現象的自己」を肯定的価値づけの度合、内在化された価値基準により是認された自己尊重的なあり方の観測から実証的に研究し、かゝる研究の累積を通じて、各群の「自己」のあり方を一貫したパターンとしてとらえる方法を得ようとした。このためには、自己心理学における、主観的現実性を重視する現象学的接近法の立場を尊重して、意識的レベルでの「自己」を内的枠組から上記の観測においてとらえるべく、主に自我の自律機能を内省的に自覚した形で1人称記述した諸項目を、「現実のありのまゝの自己」と「是非こうありたいと思う理想的自己」（夫々PS及びISと略号）の2側面から一度に評定させるところの、評定スケールを備えた1つの質問紙法を参考し、3度に

わたる実験で少しづつ改訂を加えながらこれを使用した。この方法自体は、個人の内的基準に基づく「自己」の価値づけ方についての *N*、*P*、*S* 各群の特徴を一貫した反応型としてとらえる上で、一応十分な信頼できる方法であることが実証された。しかし、これはあくまでも反応型としてであり、*N*、*P*、*S* 各群がその様な反応型を「自己」に関する現象的資料として示していることの意味は、残された問題として考察されねばならない。

そこで各群の反応型であるか、本研究の目的に合わせて作成した一連の質問紙以外に〔実験Ⅲ〕でとり扱った Barron の ES スケールにおいても、このスケールを自我の強さを直接的に測定しようとする本来の目的に従って客観テストとして見るのではなくその反応を他の実験におけると同じ内的枠組から「現象的自己のあり方」も示すものとして見るならば、各群は「自己」の価値づけと云う点でこれまでと同じ一貫した反応型を示していたことになり

大変興味深い資料が得られたわけである。
 最も顕著な反応型は神経症におけるそれであり、常に、「現実的自己」の評価が否定的貶
 低的で、又それが内的価値基準によって是
 認されない形、即ち、「理想的自己」との向
 の“隔たり”があくまでも大きいものとして
 示されている。かゝる反応型は本実験全体を
 通じて、他のN、S、2群との間に有意差を以
 って確認されており、他の研究からもこれと
 殆んど一致した多くの結果が得られている。^(12) 28) 130) 167)
 この様に、現実の自己を低く評価し、これに
 比してきわ立って高い理想的自己を設定する
 ことは、内的基準から見て現在の自分自身を
 不満だとして否定視することには他ならず、こ
 れは自己心理学的観念から最も顕著な不適応
 指標とされるところである。即ち、PSとISと
 の中の大きさは所謂“高い理想を抱いて”前
 進する野心的な能動性とは逆に、脅威(threaten-
 ing)を受けることをおそれる不安のために
 ありのまゝの自分の姿を直視し得ず云わばニ

れを放棄し非現実的に描き出されたISの下に
 たいいたずらに欲求不満に陥っている消極的
 な態度の反映だと考えられている。確かにこ
 の称な「自己」の現象像は、現実のありのま
 の自己に立脚して一歩一歩最善を盡しなが
 ら前進すると云う自己確実性 (self certainty)³⁶⁾
 及び能動性を欠くものであり、「自己」への
 とらわれそのものの中に苦しみつ、洪滞して
 いる姿を表わすものと解される。Erickson³⁷⁾は
 自我心理学的な立場においてではあるが、お
 のづとか、る「自己」理論に関係づけうる見
 解を述べており、同一性意識 (Identity Conscious-
 ness) 乃至自己意識 (Self-consciousness) が
 増して来るのは同一性を獲得しようとする称
 な良い意味を持つ場合のみに限らず、同一性
 拡散 (Identity diffusion) の危機が潜在する等望
 ましくない意味においても認められ後者の場
 合は、心理社会的存在の受容された独立的個
 人としての自律性 (autonomy)³⁶⁾ の感覚が妨げ
 られるとするが、神経症の「自己」のあり方

についてはこの様な説明も可能であろう。

従つて、かかる現象的自己は、適応的行動を導く様な自我機能の指針としての役割を果し得ないものと考えられる。

これに対し、正常者群の反応型は、一貫して肯定的な現実的自己の評価と、内的価値基準による是認を示すと二つのPSとISとの“隔たり”の少なさから成っており、神経症群とは丁度逆な形で、自己心理学の適応理論にかなつた自己尊重的な「現象的自己」像を示している。即ち、これで、適応的な統合機能が可能であるための「自己」側の条件2つ（第4章〔4〕参照）の中1つは満たされていることになり、現実の自分の上に完全な理想像を押しつけることなく自分自身の資質及び限界を受け容れながらともかく自己をもりたてて進んで行こうとする現実的な態度をうかづわせるものである^{92, p.21)}が、しかしこれは条件2つの中1つのみが満たされた段階で、それも対象が一応の適応を果している筈の正常者であ

るが故になされうる解釈であり、あくまでも暫定的なものとして更に慎重な検討が加えられるべきであることは、次の分裂病の反応型からも早速考えられねばならない事柄となる。

。即ち、神経症に加えられたもう一つの不適応群である分裂病群においては、私自身が作成した一連の質問紙でN群とほぼ同様な反応傾向を全体として示し、別の意図の下に一つの客観テストとして作成されたESスケールでもP群よりはN群にほぼ近い結果も示している。実験Ⅱ及びⅢで行った様に項目分析等を通じて詳細に吟味するとこのS群がN群とも区別され得る応答特徴を有すること（例えば肯定的PS評価をN群よりも固執的に示す等）をいくらかうかがうが、大局的に見ればそれ等も断片的な資料であり、現段階ではN群との差異を決定づけるに足るほどのものとは云えない。従って、各実験を通じて得られた現象的資料から認められるS群の反応型は、結局、N群と同様、肯定的なPS評価と小

いDSの値によつて特徴づけられるものであり
 特に後者のDS値はIS評価があまり高くなくPS
 と近い位置にとゞめられているため全体とし
 てN群よりも小さくなつており統計的な有意
 差も所々で認められている。この標にS群の
 反応型には自己心理学で論じられる不適応性
 が、P群とは逆に全く反映されておらず、そ
 れのみか本資料の範囲内ではN群と同等或い
 はそれ以上の適応的な「自己」像を示すこと
 になつてしまふ。N, P, S 3群を対象とし
 て意識的な「現象的自己」を質問紙法と云う
 直接的な接近の仕方により調べた場合3群は
 ともかく一貫した反応型を夫々示し、P群は
 「自己」理論にそっくりあてはまる不適応性
 も顕著に表わす。又N群もS群も対象に含めな
 い限りはP群と対照的な適応的な「自己」像を
 示すこととなり、この標にS群を含めない対
 象範囲での人格適応の研究にはかゝる方法が
 直接的で有効なものとして外国ではもとより一
 我国でも用いられており私自身の質問紙もそ

のまゝ、⁽¹²⁰⁾ 応用した研究も、⁽⁹⁸⁾ 桂、⁽⁹⁷⁾ 加藤、⁽²⁷⁰⁾ 岡部、⁽¹²⁴⁾ 中江その他によつてかなり見られるが、S群の資料を加えると同時に新たな問題が投げかけられる。S群の「現象的自己」の研究それ自体が他群のそれと比して極めて少数であり、研究方法に違いがあること及び本群の「自己」に関しては理論的背景が非常に稀薄であること等から、P群の場合の如く諸研究結果が常に一致した（又は一定のものとなる）とはいえないが、^(167, pp 205-218) 数少ない研究の中で結果が不明瞭なものや研究法に問題が感じられるものを除きかなり厳密に詳しく行われた数個の研究を見るとほとんどが本研究と類似した結果を示している。即ち、⁽⁶⁶⁾ Friedmann, I. や ⁽¹⁰⁹⁾ Leary, T. 又 ⁽⁸³⁾ Hillson, J. S. & Warchel, P. 等は、N・P・S 3群を含む対象の「自己」を質問紙法や形容詞の4エフリスト法によつて比較し、P群がきつだつて低い自己評価を示してN及びS群は互に似通つて有意差のない形でP群と逆の傾向を示すことを認めている。この中 Friedmann

と Hillson 等は IS もも調べ、PS と IS との隔たり乃至両者の相関を問題としてゐるが、本研究の結果と同じ様に、N と S が非常に似通つて小さい DS の値や或いは P 群に比して共に PS と IS との大きい相関値をとることも明らかにしている。又、Epstein, S.³¹⁾ は N 群と S 群について意識的及び無意識的な両自己評価と比較する興味深い研究を行い、これは、声、筆蹟、名前等して全体的な“自分”に関して直接的な意識的評価を為すことと、それ等を他人のものといひ合わせかつ不明瞭化させた上で、タキストスコップ等を使用して提示し自分自身のものも確認する速さを記録する等の手続によつてなされたが、結局のところ、意識的な自己評価では両群間に有意差が認められず、又“無意識的自己”なるものを調べるべく意図して得られた結果においては、全体として S 群の方が N 群よりも自分自身をより好ましい (more favourable) として価値づけてゐることをわかつた。後者は方法的にも問題が含まれ

るであろうし、従って得られた結果が本当に無意識的自己と称しうるものの資料であるかどうか問題となる。本研究では無意識的自己なるものを関心の外に置いたわけである故、後者の結果は、これも無意識的なものか否かと云った点で問題にするよりも、大へん異なった種類の、かなりあいまいに設定されたテスト状況においてもS群がN群に劣らずむしろN群以上に肯定的な自己評価をなすことを示す資料が加えられていると云う点で注目され、これは、S群の反応傾向の一貫性もある意味で支持するものとも解される。

この様に、他の研究によっても裏づけられるS群の、N群と似通った反応型はどの様に意味づけられるべきであろうか。ともかく、同じ様に肯定的な又内的価値基準により是認された形の「現象的自己」像が示されてもそこには適た差のなきい2群が同時に含まれることから、自己心理学自体の中で、現象的自己に対する解釈の仕方についていろいろ反省が

なされつゝ、あり。ヤ1編の理論的研究においても触れた通り「無意識」の概念等が導入され、例えば、同じ様に高く価値づけられた「自己」にも、真の自己尊重 (true self-esteem) を意味するものと偽りの病的な防衛機制に基づく病的な誇張された自己尊重 (pathologic inflated self esteem)⁹¹⁾ が考えられなければならない等無意識的防衛機制による意識的自己像の歪曲に内心が松げられ¹⁶⁶⁾、そうした機制によって影響される以前の真の自己像等を間接的に測定しようと試みられて来ている。いずれにしろS群の「自己」は当然N群のそれと異なった意味を与えられるべきものであり、むしろ又低い自己尊重を意識的に示すP群よりももっと重い問題の含まれるのを示唆していると考えられるが、本研究では、かかる「自己」を生ぜしめている主体的自我機能そのものをも次にロ・テストによりしらべ、ヤ1編でまとめた統合の理論に基づいて2つの資料をつき合わせ吟味することにより各群における

「自己」の意味を、残されたもう一つの条件（自己像の正確さ）を検討しながら詳しく考察することにする。従って、第1編 第2部で掲げた「自己」に関する研究仮説も、厳密な意味ではここではじめて検証されることになる。

第2部：

ロールシャッハ法による「自我機能」の測定

<第15章>〔実験I〕（＝〔実験A〕）N.P.S 3
群のロ・テスト結果の比較

〔1〕目的

ロ・テスト反応が自我の自律的機能の諸側面にかかわる意味を有することは第1編 第3部の方法論において述べた。従って諸反応を組み合わせることにより、自我の諸機能についての指標もとることができ、それを通していろいろな機能の健全な発現度が理解され、とらえられることになる。かゝる有効な指標の作成は必ずしも容易でないが、ロールシャ

1) 1. 解釈理論の、実践的実験を通じての理解
 を基盤として作成し、又、この様な各指標を
 総和すれば、全体的な自律機能の健全度が1
 つの総点として算出されることになるわけであ
 るが、この全体的な健全度（以下 T. E. > Total
 ego functioning と略号して用いている。）に
 関しては、Klopper B が各反応を統合的に組み
 合わせて作成している RPRS（ロールシャッ
 ハ予後評定スケール）が非常に精密なもので
 あると考えられる故、これを用いて T. E. 得点
 とすることにした。そして3群の適応差が各
 指標にどの様に反映されているかをしらべ、
 2. テストと云う課題状況へのとり組みを通
 じて外的枠組からとらえられる各群の自我機
 能を比較しようとするものである。

〔2〕方法

1) 対象：第1部の実験Ⅱで紹介したものと
 同じである。

2) テスト材料：ロ・テスト（ロールシャッ
 ハ法の略として諸家が用いている。）、すべ

この対象につき私が個人法で施行した。

〔3〕結果の整理と考察

ロ・テストの整理法即ち反応エックの諸側面は第1編第3部でも触れた通り非常に多種にわたっており、その中本研究で重点的に取り扱う側面は既に述べた如く、自我機能の基底的な特性にかゝると考えられる反応決定因、形態水準であるがこれを反応の位置づけ (Location) 反応内容 (Content) 等と結びつけこれ等を自由反応段階から限界検査段階に至る4つの段階にわたって検討し、量的分析、個々の被験者特有の反応の流れ (Context) を追完する系列分析、反応の内容面を分析する内容分析の3つの分析を行った。但し、内容分析は、内容の種類を記述的レベルにおいて問題にするのみであり (例えば、攻撃的な内容の反応を文字通りに示すかどうかと云う風に) ロ・テストで普通に意味する内容分析の標に精神分析学的な象徴的解釈を行うことは控えている。これは、実践的経験をも含めた精

神分析学的基盤がないかぎり非常に独断的な主観の強い解釈に陥ったり或いはたゞ機械的に象徴的な意味づけを借用するだけの結果に終ると考えられたからであり、内容分析においてのみならず、本研究におけるは、テスト結果の整理全般を通じて留意した点は、できるだけ客観的にチェックできるものでかつ自我機能の諸側面との関係づけが明解に又意味深くなされうるものを重層的にとりあげ、それ等の背後にいろいろな点の配慮を含めて総合的な整理、検討を行うことである。

これ等の事柄は(1)の目的と同標本2部全体にかかわるものであるが、本章の実験ではまだ予備的段階のものとして、整理の方法も十分組織化されてはいないが、ここに資料として(表13)に掲げた。結果としては、全体的に見てN群が最も良い成績を示し、他の不適な2群から3台んどの面で有意味に区別されている。そしてP群がその次の値をとり、更にS群が最も低い値を示すことによつて3群間には

(表 13) 各群にロ-ルシヤフハ反応の比較

ロ-ルシヤフハ指標		対 象			群間比較			…… χ^2 テストは4歩自叙 の場合でUテスト
		N	P	S	N-P	N-S	P-S	
自律機能の健全性	[F.L.]	[F.L.] < 0	0 ^(u)	4 ^(u)	17 ^(u)	* *	* *	形態水準加重臭
		0 ≤ [F.L.] < 1.0	4	4	7	* *	* *	
		1.0 ≤ [F.L.] < 1.30	4	16	2	* *	* *	
		1.30 ≤ [F.L.]	20	6	0	* *	* *	
	[M]	[M] ≤ 0	2	5	17	* *	* *	人間運動反応加重臭
		[M] = 1	5	18	7	* *	*	
		2 ≤ [M]	21	7	2	* *	* *	
	[FM]	[FM] < 0	0	3	15	* *	* *	動物運動反応加重臭
		[FM] = 0	3	9	5	*	* *	
		[FM] = 1	25	18	6	* *	* *	
	[m]	[m] ≤ 0	5	10	17	* *	*	無生物運動反応加重臭
		1 ≤ [m]	23	20	9			
	[Sh.]	[Sh.] ≤ 0	3	10	22	* *	* *	濃淡反応加重臭
		0 < [Sh.] < 2	11	7	3			
		2 ≤ [Sh.]	14	13	1	* *	* *	
	[Col.]	[Col.] ≤ 0	0	4	13	* *	*	色彩反応加重臭
		0 < [Col.] ≤ 2	12	15	13			
		2 < [Col.]	16	11	0	* *	* *	
	[Sum.]	[Sum.] ≤ II段階	0	3	19	* *	* *	総臭 (T.E.と田谷)
		[Sum.] = III段階	3	13	7	*		
		II段階 ≤ [Sum.]	25	24	0	* *	* *	
制 御 示	外的制御	良い制御型	10	6	1	* }	* * }	* *
		上の重型	9	6	1			
		制御欠如型	3	3	11			
		抑圧型	6	15	13			
	内的制御	良い制御型	17	3	0	* }	* * }	* *
		上の重型	4	11	1			
		制御欠如型	2	3	12			
		抑圧型	5	13	13			
	全体的制御	内外共良い制御型	14	7	1	* *	* *	* *
		片方の良い制御型	12	12	1			
		内外共悪い制御型	2	11	24			
体 験 型	LIFE C	bal.	4	4	1	* }	* }	これ等についた十一は、 外向性か内向性の 適度に併存するかどうか bal. = 外向性と内向性 とが両極自由にあり、 保っているもの Constricted = 外向性と 内向性とが両極的 な収縮した状態
		extra. (intro. +)	7	4	5			
		intro. (extra. +)	6	1	1			
		extra. (intro. -)	4	4	7			
		intro. (extra. -)	7	4	2			
		Constricted	0	13	10			

全体として有意差が認められている。この表
 の整理の仕方及びその際の分類基準について
 は詳しい説明が必要と思われるが、これは資
 料 3 (ローレンツ研究Ⅴ) に掲げたのでここでは省略する
 ことにする。又(表 13) は実験 A における
 ・テスト結果の主要なもののみを示したもので
 あるが、この中での自律機能の健全性を綜
 合的にとらえようとするカテゴリーの中での
 各下位項目の加重得点の算出法はすべて RPR
 S の得点を算出する時の Klopfer の方法にその
 まま従ったものであり、かなり複雑な手続を
 要するが、例えば、運動反応の加重点の場合
 (MI, FM) 等は、その運動を見ることの自由
 さ、空間におけるその運動量、その運動を行
 っているもの(主体)の内容がどの程度文化
 的な現実的特性を担っているかの点より詳
 しく吟味しそれに従って加重点を与えるやり
 方をとる。他の色彩、濃淡、形態水準(図版
 の客観的条件への反応の適合度及びその意味
 で基本的に正確な反応が更にどの程度分化し

明細化した形で与えられているかに関するもの)の各々についても、詳しい質的吟味からそれを量化して加重表を与えている。

かゝる結果の考察は、次の実験Bの結果と合わせて行うことにする。

< 第16章 > [実験Ⅱ] (= [実験B]) N, P, S, 3 群の自我機能の分析

[1] 目的

本実験の目的も先章で述べた第3部全体の目的に従うものであるが、ここでは、先の実験により得られた結果に基づき、又第3部で「自己」側の資料との対な関係を検討しようとする意図をも含めて第1部における質問紙-その3-(R. I.)の作成と合わせ、自我機能の諸側面をより組織的に又詳しく分類して分析しようと試みた。

[2] 方法

対象は第1部実験Ⅳに掲げたものと同じであ

り、又テスト材料及びテスト手続は才15章の通りである。

〔3〕結果の整理と考察

結果は(表14)に示した通りであるが、各カテゴリにおける整理の基準は次の様なものであり、各指標の意味及び群差をまとめた。

1) 自律機能の健全性(T.E.)

これは先章でも述べた通り、RPRSの採点基準をそのまま採用した。

2) 対外的制禦

$FC \geq CF + C$, $\text{Sum} C \geq 3$, $[Col.] > 1.5$, $FC > 2$, ...

($CF + C$) ≥ 2 の場合を良い制禦とするが、色彩反応のあり方に反映される「自我機能」の意味は才1編才9章で述べた通りであり、かゝる型の色彩反応は、情緒反応を誘う刺激に対し、自然で本直な情緒をこめた反応を、現実的条件を配慮し制禦作用(統制)を失わないで行いうるという、自我の望ましい対外関係をつかさどる能力を示すものである。そして上の条件に大体準ずるものを良い制禦の

(表 14) ロ・テストにおいてとらえられる自我機能の言者側面の群間比較

		対 象			群 間 比 較			注
ローレシャッハ指標		N	P	S	N-P	N-S	P-S	
自律機能の健全性 (T.E.)	[F.L.]	[F.L.] < 0	3 ^(A)	13 ^(A)	16 ^(A)	* *	* * *	言主. χ ² テスト. 及び歩数 数の都合でUテスト により有意差の 検定を行った。
		0 ≤ [F.L.] < 1	6	7	9			
		1 ≤ [F.L.] < 1.30	8	5	4			
		[F.L.] ≥ 1.30	13	5	1	*	* * *	
	[M]	[M] ≤ 0	0	3	19		* *	* *
		[M] = 1	11	14	10			
		[M] ≥ 2	19	13	1		* * *	* * *
	[FM]	[FM] < 0	2	6	14		* *	*
		[FM] = 0	7	8	9			
		[FM] = 1	21	16	7		* * *	*
	[m]	[m] ≤ 0	10	17	22			
		1 ≤ [m]	20	13	8	*	* *	
	[sh.]	[sh.] ≤ 0	7	12	17		* *	
		0 < [sh.] < 2	19	12	5			
		[sh.]	4	6	8			
	[col.]	[col.] ≤ 0	2	3	17		* *	* *
		0 < [col.] ≤ 2	16	17	5			
		2 < [col.]	12	10	8			
	[Sum.]	[Sum.] ≤ III段階	0	0	19		* *	* *
		[Sum.] = III段階	10	23	7	* * *		* * *
		II段階 ≤ [Sum.]	20	7	4	* * *	* * *	
		[Sum.]の中央値	8.05	4.51	0.70	* *	* *	* *
対外的制御		良い 制御型	12	10	1	}	* *	* *
		その 型	5	7	4			
		制御欠如型	7	9	8			
		4又急病的制御	6	4	17		* *	* *
情緒的な自由さ		自由で活潑 (+)	17	11	8		*	
		禁止されている 原因 (-)	13	19	22			
衝動性への抑制		接近し 親和的 (+)	24	16	5	*	* * *	* *
		“ 遠い (-)	6	14	25			
精神機能の活潑さ		活潑 豊か (+)	20	13	1	†	* * *	* * *
		いくらか活潑 (+?)	4	2	5			
		不活潑 (-)	6	15	24	* *	* * *	* *

* Uテスト

ロールシャッハ指標		対象			群間比較			(表14) の続き
		N	P	S	N-P	N-S	P-S	
内的制禦	良い制禦型	14	8	5	}	}	}	
	その亜型	11	7	1				
	制禦欠如型	3	10	8				
	収縮的制禦	2	5	16				
制禦全体	内・外共良い制禦型	16	7	1	*	***	†	
	片方のみ良い制禦型	10	18	8				
	両方ともよくない制禦型	4	5	21				
現実吟味	すぐれている (+)	17	7	0				
	まずまず (+?)	9	9	3				
	劣る (-)	4	14	27				
感情欲求	認知している (+)	23	14	10		**		
	認知を回避している (-)	7	10	13				
	抑圧している (-)	0	6	7				

亜型とした。制禦欠如型は、 $FC < CF + C$ であり、かつ次の収縮型の条件を含まないもので、これは、即時的な情緒刺激に対する受身的反応性、即ち外界の情緒刺激による被影響性が大であり、社会的基準や現実条件を考慮して自らを統制する以前に生々しい情緒反応を誘発されやすい対外関係のあり方を示している。他方、収縮的制禦型は、 $Sum C < 3$, $[col] < 1.5$ の条件に該当するもので、これは、対外的(対人的)な情緒交流そのものが疎外されており、自然な情緒反応をすべて制止してしまおうとする傾向、或いは情緒刺激そのものに対

する生々した感受性が鈍麻し、外界との接触を避けて云わば無生物的在界に安住しようとしたり非現実的在界に閉じこもろうとしたりする傾向と関係の深いものである。

3) 情緒反応の自由さ

$\text{Sum } C \geq 3$, $\sum C \geq 3$, $F\% \leq 50$, $(F+FK+Fc)\% < 75$ を量的条件とし、これに加え、Klopperの述べる色彩反応の強さ(intensity)、深さ(depth)と云う質的吟味をも合わせて、このカテゴリ—における+と-を判定した。これは先の外的制約と重なる面を有しているが前者が情緒表現における統制のあり方に焦点をあてたものであるのに対し、ここでは、情緒の発現性(emotional actuality)そのものにおける自由さ活潑さを吟味しようとしており、これは自我機能の、生々した現実との接触、対象関係における情緒的能動性の面にかかわるものである。

4) 衝動性への接近

$(M+FM+m) \geq 6.5$, $[F.L.] > 0$ を+の条件と

し、これ以外を一とした。このカテゴリーは、次の内的制衡における一面と同様、原始的衝動性の方へも退行して接近しうる自我の内的疎通の機能にかゝるものであるが、その部のはじめにも述べた通り、反応のテーマや内容に因する精神分析学の象徴的解釈は避けることにしている。かゝる自我の弾力的機能の中退行の面の吟味は不十分である。(Holt, R. 等の分析法に見られる通り、退行的側面の吟味は量的仕方よりもむしろ、一個の反応においてもその内容的特質の象徴的意味合いを吟味することからなされる場合が殆んどである。) 従つて二二ではむしろ、自我が自律的統制を失わないでより衝動的方向に親和的に退行して (regress) 又二次過程的方向に前進 (progress) しうると云う弾力的機能の中での統制的隨意性の面をとらえていふことになる。それ故、表に見られる通り、S群は、多分その退行一方と云う特性のために、衝動防壁に仕殺されて衝動性をより強く担う自

我組織の下尸に退行的に接近しうる自由な機能も制限されていると考えられるところのP群よりも、マイナスの結果を多く示している。

5) 精神機能の活潑さ、豊かさ。

R \geq 17, 3), 4)の条件が共に+, 反応内容の幅がり (content range⁽¹⁰⁰⁾) が普通以上であること、反応の位置づけ (location) に目立った偏倚がないこと、を+の条件とし、ほゞこれに準じるとみなされるものを+, それ以外を-とした。これは、自我の一次的及び二次的な自律機能全体の豊かさ、活潑さ、即ち、対象関係及び精神内界への統制的疎通の機能が伴に単一給にできるだけ制限を受けないで発現しているか否かに関するものであり、これまでの2), 3), 4)の右カテゴリーにおける結果と同様S群が他の2群よりかなり目立って劣る傾向を示しているが、先の4)及び2)のカテゴリーでは、N群がきわ立って望ましい結果を示しているため、P群との間にも差が認められ

結局3群が $N > P > S$ の順にほい並べられる
ことになり各群間には有意差が生じている。

6) 内的制禦

$M \geq FM$, $M \geq 2$, $FM \geq 1$, $[F.L.] > 0$ を良い制
禦型, $2M > FM > M$, $M \geq 2$, $FM \geq 3$, $[F.L.] > 0$ をそ
の亜型, $FM \geq 2M$, $M \geq 2$, $FM \geq 4$ を制禦欠如型
 $M < 2$, $FM < 1$, $m < 1$ を収縮的制禦型の各
条件としている。これは Klopfer の解釈理論の
みならず、他のカテゴリーに関する基準につ
いても同様であるが、できるだけ多角的に本
研究の意図に合わせて組み合わせたものであ
り。更に又、本実験における全被験者の現実
的な結果から相対的な分類基準として設定し
たものであり、形式的な統一性よりも現実に
即した意味を担いいうるものにさせるべく配慮
した。

良い制禦型及びその亜型は、本能的衝動性に
親和する傾向（未分化ながらも従前二とに関
する自覚は存在する）と衝動性にまきこまれ
ないでそれを主体的に統制しうる機能とを相

対的に比較した場合、大体両者の平衡がとれた上後者の機能が健全に上まわっており、成功的な防衛機制が適応的に自律化して確立されている度合の高いことを示している。これに対し、制禦欠如型は、主体的統制機能が未発達で防衛機能が適応的に自律化して確立されておらず衝動に侵蝕されやすい傾向を示す。又、収縮的制禦は、衝動性に対する自覚そのものが非常に乏しく、自律的に統制力を働かせる自我機能が弱体であり、従って衝動と主体的に親和する迄にまで機能が及ばず衝動と、機能の非常に低下した主体とが別々に分離(alien)した状態にあることを示している。これは当然S群に最も多く見られ、他の2群との間に有意差を示している。良い制禦型及びその亜型はN群に最も多く続いてP群の次になり、結局 $N > P > S$ と、各群間に有意差が認められた。

7) 制禦全体

これは2)と6)とを組み合わせて、自我が、対

象関係及び対精神内界との関係において、どの程度適当な制禦を働かせながら能動的に機能しているかを見ようとするものである。

二の場合は、良い制禦とその亜型と共に良い傾向を示すものとして一括し、制禦欠如型と収縮的制禦とと共に悪い傾向のものとして、表の杯に3種類に分類した。二の結果においてもこれまでと同じ杯に3群間に差が認められ、N群は良い制禦型を最も多く、逆にS群は両方とも悪い制禦型を最も多くとり、P群はその中間的な傾向を示している。

8) 現実吟味

これは、いろんで内的・外的情緒刺激による被影響性にもかかわらず、現実的条件を検討しそれへの配慮を失わない中性化された (neutralized) 自律的機能を維持しうる程度に関係するものであり、一次的自律装置に基づく知的統制力や思考力をもその中に含み持ちながら、現実を支配する機能 (active mastery) を指している。次に掲げる指標はこの機能の潛

性的あり方及び平均的な機能効率の両方にか
ゝわると考えられる。

マイトスの形態水準が全然ないか或いは附加
的に1個のみ存在すること、 $[F.L.] > 0$ 、 M_+ (
良質のM) ≥ 2.5 、反志の位置づけに特別な偏
倚が認められないこと、これ等の条件にすべ
て適う者を+。そして+?の条件としては次の
3通りを考えた。

① F.L.マイトスが1個、 $M \geq 2.5$

② F.L.マイトスが存在せず $M = 2$

③ F.L.マイトスが1個、 $1.5 \leq M < 2.5$ 、 $P \geq 5$

そして、①、②、③にはいずれも、 $[F.L.] > 0$
で、反志の位置づけに特別な偏倚のないこと
が共通の条件として附加される。

これ等以外のものを-とした。

この結果、-に属する者の数がS群に最も多
く、続いてP、Nの順になり3群内にはい
れども有意差が認められた。

9) 愛情欲求

これは基本的な愛情欲求の充足に基づく情緒

の基本的な安定性 (basic security) , それを母体とした情緒の分化, 成熟, この欲求に基づいて生じる様々な情緒 (依存感情等) を自我が自覚的にとりあげ, 対象関係に統制的に発現させて行く機能に関係するものであるが, 二二では, こうした情緒を自覚的にとりあげ積極的な対外及び対内関係にとり入れて行く働きを見ようとする。

$T_1 \geq 1$ 或いは $T_1 \geq 2$, 及びこれ等の濃淡反応の出現が継続的に見て異常でないものを十とし, 限界検査段階では濃淡反応を肯定しうるが, 自由反応段階では全くこの反応をなし得なかつたり濃淡領域を避けようとするものを濃淡回避として一, 又全く濃淡の刺激要因に対して感受性を示さないものを, 一一として分類した。

この結果, P と S の両群間には殆んど差が認められなかつたが, N 群のみは最も望ましい傾向を示し, 他の2群との間に有意差がみられた。

この他、普通ロールシャッハ結果の分類においてけとりあげたものである故。一覽表には掲げなかったが本研究ではオラ部の分析のために、攻撃的欲求の生々しい発現に関する側面と情緒の全般的な安定性に関する側面についても整理を行った。その結果では、PとSの2群間にはあまり明瞭な差が認められず、N群のみが他の2群との間に有意差を示したが、この2つの側面に関する整理の基準を述べておく。

攻撃欲求に関しては、破壊的な内容(爆発、虫火、虫血、生々しい臓器反応等)及び明らかに攻撃的な言語表現を伴う反応、が計4個以上存在するか否かによって、攻撃的と非攻撃的に分類した。又、情緒の全般的な安定性に関しては、不安、緊張、葛藤をあらわす諸指標、即ち、(H)、ZHd、ZAd、A%、C'、K、h、m、Drの反応数が、Klopperの定めた各基準を越えるか否か、又失敗乃至拒否カード数、色彩シヨック、濃淡シヨックの中央等すべての

指標の中で4～5個以上に問題が認められるか、或いは「問題あり」としてチェックされる指標の数が2～3個であってもそこに問題が集中的に示されている場合は、「明らかに問題あり」(--)とし、それ以下の程度でやはり問題を認めざるを得ないものも「少し問題あり」(—)、そして、それ以外を「問題なし」(+)として分類した。

以上の結果、自我の全般的な自律機能を反映するT.E.値を初めとし、5つの下位カテゴリーにおいて、N群が高度の健全性を示す最も望ましい結果を示し、S群が逆に、最も不健全な自我機能をうかがわせる結果を、そしてP群は両者の中間に位する結果を示した。

＜第17章＞第2部の総括と結論

ロ・テストと云う、かなりあいまいに設定された刺激状況での対象関係(図版とのとり組み)を通じて被験者が与えられた課題解決の仕方を外的枠組から観察し、第1編第9章で述べた

標な自我心理学的解釈理論に従って解釈する
 ことにより、自我の自律的機能の諸側面及び
 全体的な健全性を推定しようとした。その結
 果、適応度の差にほぼ相応した自我機能の健
 全度の差も各群はその口・テスト反応に反映
 させた。即ちN群の反応からは、自由で能動
 的な、しかし統制も失わない対象関係及び対
 精神内界との関係、自然な情緒の動きをその
 まゝに自覚し生々と活潑な情緒反応を行いう
 ること、客観的で正確に現実を検討する働き
 、精神機能全体の豊かさ活潑さ等が、群中最
 も望ましい形のものであることが同われ、結
 局、これらを総和したものと考えられる全体
 的な自律機能の健全度の最も高いことがうか
 いわれた。そして、S群はこれ等と反対の諸
 傾向及び最も低い全般的な健全度を示し、P
 群は、両者の中間的な結果を示した。この標
 に統計的に有意な群差として各群の特徴は
 一応とらえられたわけであるが、T.E. 値を使
 りにとってみても、各群には、最も高い値を

とる者から最低値の者までにかなりの松かり
 があり、この中において右群がかなりの重なり
 を示すことも事実である。臨床心理学的実
 践においては具体的な一個人そのものの理解
 が課題となる故、この様な確率的な群差のみ
 では十分ではなく、又治療的接近においては
 個人にとっての主観的現実を重視これに力き
 かけることが不可欠であることから、サ
 部で研究した、「自己」と云う内的枠組から
 の接近法との相補的、総合的な使用法を、よ
 り現実的な (real) 適応理解のために考えたい
 。サ3部ではこれを目的とした実証的研究を
 行うが、2・テストでは一方 $N > P > S$ の順
 に順位づけられる結果を示し、又、自己評価
 においては、既に述べた如く、 $N > P$ とも云
 うべき（但し、 $>$ の記号は左側がより望まし
 い傾向にあることを示す）結果を示した右群
 は、更に2つの枠組を綜合する見地から、そ
 れぞれの反応をどの様に意味づけられるか、
 この問題を検討したい。

第3部：

「自我機能」の全体的な健全性と「現象的自己」との関係からみた適応的統合性の研究

＜第18章＞〔実験A〕における2つの資料の
関係の分析

〔I〕目的

第3部全体が第1編第2部で述べた本研完全体の目的3)の下に行われたものであり、第1部で研究方法そのものをより確かなものとし、累積して行ったN、P、S各群の「現象的自己」に関する一貫した資料と、第2部で同じ各対象群に対しロ・テストを施行しそれを自我心理学的に分析して自我の自律的機能の諸側面及び全体的な健全性を推定したものとをつき合わせて両者の関係をしらべ、第1編第4章で述べた適応に関する理論的考察を基盤として、「自己」側の条件を再検討し、「自己」が「自我」にとって持つ意味換言

すれば両者の関係の値も、適応的統合性の観
 察から吟味しようとするものである。従って
 同じくサノ編中も章で掲げた仮説3)がこの部
 での研究仮説となり、要約すれば、適応群即
 ちN群では適応的な統合機能のための「自己
 上側の条件(1)正確さ、2)肯定的価値づけ)
 及び「自我上側の条件(全般的な自律機能が
 健全であること)がより十分な形で満たされ
 ているのに対し、不適応2群ではかかる条件
 の充足にいろいろ問題があり「自己」は、これ
 との関係において「自我」がつかさどるべき
 統合機能にとり後立ちうるものとなっていな
 いことを実証しようとする。そして又、この
 標な2つの枠組を相補的に用いることから得ら
 れた資料の相互関係をみることにより、「自
 己」そのものの意味、現行の客観的測定法
 のみでは測定しきれない「自我」の最も重要な
 機能が統一的な観察からより深く明らかにさ
 れると考え、この統一的観察即ち統合性こそ
 人格の適応を最も敏感かつ的確に反映するで

あろうことを具体的に検討しようとするものである。

まず本章では〔実験A〕における2つの資料の関係を、〔実験B〕の予備段階として分析しようとするものであるが、次の2点を具体的な目的としている。

1) 「現象的自己」のあり方において最も特徴的であったP群が、「自我機能」の全般的な健全度(T.E.)では理論通りN群とS群との間にほぼ位置することが見られた。他方、T.E.の程度では大きな開きが実証されるところのN、S両群が似通った「現象的自己」のパターンを示す。このことから、本研究でとらえた「自我」と「自己」との間には直線的な一次的対応関係はまず存在しないであろうことが予想されるがそれではその対応関係が大よそどう云った形において示されるものであるか、その点を調べようとする。

2) S群は、3群中最も劣ったT.E.値を示しながら客体として「現象的自己」の中に存在

する自我機能は1群と同程度肯定的に価値づけられたものであることから、客観的に測定された自我機能と「現象的自己」として存在するそれとの間の「ずれ」の問題が生じる。これは、先述した統合性に関する「自己」側の条件の1)にもかかわるものであるが、この「ずれ」は適応度を異にする3群間では各々違った形で認められるのではないか、この点を検討すること。そして又両方法(内的枠組を用いる方法と外的枠組を用いるそれ)の相補的有用性について大体的見当を得ることを目的とする。

〔2〕方法

対象及び資料集めの方法は、〔実験A〕即ち第1部の〔実験Ⅱ〕と第2部の〔実験Ⅰ〕で示した通りである。

〔3〕結果の整理と考察

「自我」と「自己」の両資料を対比させる方法について示唆を与えてくれる研究は、我国においては勿論のこと外国文献の中でも強ん

(16) (17) (26) (108) (119) (167, p326)

で見当らず、僅か2、3の関連研究を見つ
 けることができたのみでありその中でもたゞ1
 つ Bills, R. E.⁽¹⁷⁾ によるもののみが本研究に通じ
 るテーマを有している採に思われるので、こ
 れを少し引用してみよう。Bills は自分で作製し
 た "An Index of Adjustment and Values"⁽¹⁸⁾ (IAV と
 よく略示される。) という自己概念 (Self Concept
) についての質問紙とロ・テストとを用い、
 質問紙の回答から自己受容 (本研究における
 自己肯定とほぼ同義) も高く示す者と低い者
 についてロ・テスト結果を比較している。対
 象としては大学生のみを用いており、結果は
 、自己受容得点の高い大学生の方が、現実吟
 味 (reality testing) の低い、又外向傾向の強い
 そして更に対外的及び内的制禦の好ましくな
 いロールシャッフ反応を示し、自己受容得点
 の低い大学生との間に有意差が認められた。
 結局、ロ・テストの伝統的な解釈からしてあ
 る自我機能に問題があり人格の適応性が好
 ましくないとされる者の方が、質問紙法では

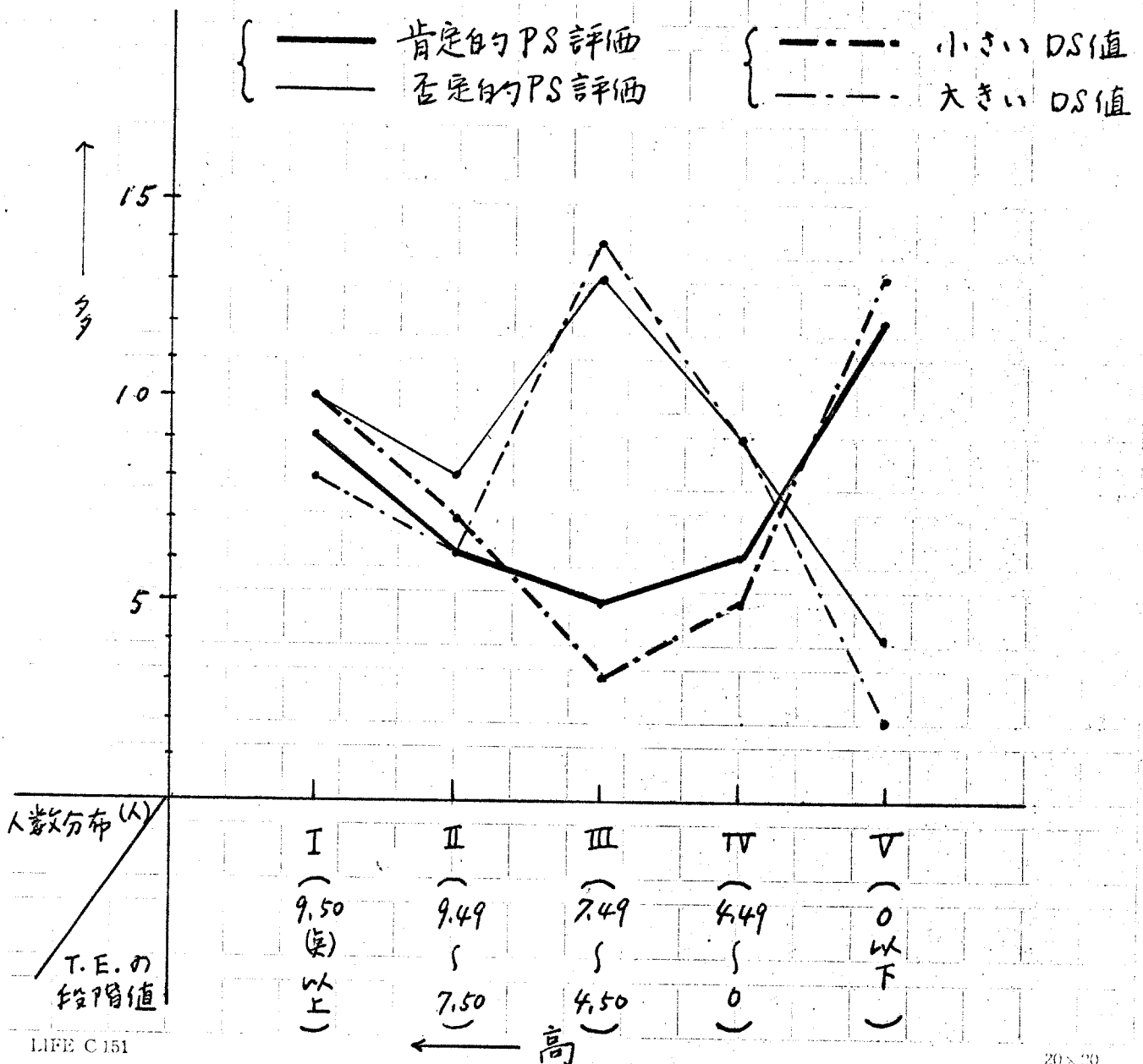
自己受容的な自己概念を示したと云う結果を Biller は提供している。但しこの研究は、対象があくまでも一応正常範囲でとられており、その中で、ロールシャッフの結果と質問紙でとらえられた「自己」のあり方（受容性）との関係も類型的に見たものでもある。しかし本研究では対象の中も適応度を異にする形ではなくとられており、類型比したには、テストの反応特性と「自己」との関連性を見ると云うよりは、適応的統合性に関する理論を背景として両者を相補的に統一視しようとする観点から両者の対応性を検討しようとするものである、かなり異なった面を有している。

そこでまず、PS（現実的自己評価）の総点と DS（PS と理想的自己の評価 IS との間の“隔たり”）の総点、この二種の「現象的自己」に関するスコアと、他方ロ、テストで測定される、T.E.（自我の自律機能の全般的健全性）得点との関係を（図 1.）にあらわして見た。

この標に両方から総点のみを先にとり出して

用いるのは両テストにおける各下位カテゴリーで示す群の結果が総表におけるのと同様であるからでもあり、全体的な代表値によってまず両者の関係も概括的に調べて見ることにした。

(図 1.) 「自我機能」の健全性のレベルと「現象的自己」との対応関係 — その I —



(表 75) T.E. と PS 及 α' T.E. と DS の各対応性 —491—

自己評価 T. E.	P S					有意差 検定	D S					有意差 検定				
	肯定的		否定的		計		小		大		計					
	N	P	S	N			P	S	N	P			S	N	P	S
9.50以上	7	2	0	9	7	3	0	10	9	1	0	10	5	3	0	8
9.49 ~ 7.50	6	0	0	6	2	6	0	8	7	0	0	7	1	5	0	6
7.49 ~ 4.50	2	3	0	5	1	10	2	13	2	1	0	3	1	11	2	14
4.49 ~ 0	2	0	4	6	1	5	3	9	2	0	3	5	1	4	4	9
0以下	0	0	12	12	0	1	3	4	0	0	13		0	0	2	2

+ $P < .10$ * $P < .05$ ** $P < .01$

上の図及び表の作成にあたって自己評価のPS値及び α' DS値は共に生の値によらず、各々全対象群の中央値を境にしてそれよりPS値が大である者を肯定的評価者、残りを否定的評価者とし、DS値についても同様に小と大の者に各々分けた。

この結果、PS値とDS値が共に、T.E.との間に興味ある対応性を示すことがわかる。即ち、

T.E.が7.50以上の高い値においては肯定的PSと否定的PSとがほぼ同じ割合で分布し又DS値

の大・小についても同様の二つが見られるが
 T.E. がそれ以下に低下すると否定的PSと大き
 いDSの各値をとる者が急激に増加し、肯定的
 PSの者及び大きいDSの者との差が著しく
 大となる。この傾向はT.E. が7.49~4.50の範囲
 の値をとるところで頂点に達し、T.E. 値が0
 の段階まで続くが、これ以下に低下すると今
 度は再び逆転した傾向があらわれる。即ち、
 肯定的PSの者と小さいDSの者との差がほとんど占
 めるに至る。そして、T.E. が全体の得点分布
 の中でほぼ中央値にあたる処で否定的PSと大
 きいDSが対峙してあらわれる傾向は、(表15)
 にも示した如く、他のT.E. 値に対するのにく
 うべ、統計的にも有意差をいって大であり、
 又、0以下の最も近い段階のT.E. 値に対峙す
 るDS値が小である傾向も統計的にも有意味であ
 る。この点に、客観的外的な枠組から測定さ
 れた「自我機能」の全体的な健全性と、それ
 を客観化した意識的自己像のあり方との間には
 1つの特異な型の対応性が見出されたわけ

である。尚 S 群の約 60 % が T.E. 0 以下の段階に
 対応する領域に含まれ、又 P 群の 60 % が T.E. 得点の
 中央値附近即ち細い直線と線、破線とか丁度山型を
 なす領域に、又 N 群の 80 % 近くは T.E. 値 7.50
 以上に対応する領域に含まれる。かくて、少くとも
 S 群は R. テストの結果とそれが意識的に客
 体化されたものである筈の自己評価との間には大
 きな“ずれ”を示すわけであるが、これを更に具
 体化して検討しその結果を次表に示した。表の
 “ずれ”の値即ち IC 値は制禦と体験型の下位カテ
 ゴリーにつき次の標にして算出した。“ずれ”の

(表 16) R. テスト結果と自己評価との“ずれ”の値 IC の群間比較

R. テスト結果と自己評価 との“ずれ” : IC 註	対 象			有意差検定 (χ^2)		
	N	P	S	N-P	N-S	P-S
	(N)	(N)	(N)			
$0 \leq IC < 1.5$	14	18	2		*	*
$1.5 \leq IC < 2.5$	11	9	8			
$2.5 \leq IC$	3	3	14		*	*

註

IC > Inconsistency between Rorschach results
 and self-evaluation

** $p < .01$

程度を0.5点と1点との2段階に分け、例えば
 制禦において「良い制禦型の亜型」を口・テ
 ストで示した者（第2部実験Ⅰ参照）が制禦
 に関する評価を否定的に行なった場合には0.5
 点を、「制禦欠如型」の結果を口・テストで
 示したものが制禦について肯定的な自己評価
 を行えば1点得点として1点を与えるという具
 合に各個人毎に採点した。又体験型では、口
 ・テストで外向か内向かのいずれか一方のみ
 の発達傾向が弱い場合には、これに関する自己
 評価が拡張的であれば（第1部実験Ⅱを参照）
 0.5の1点得点を、又口・テストで収縮型を示す
 ものが拡張的自己評価を行う場合は1の1点得
 点を与えると言った採点採式をとっている。従
 って、この1点得点は内的・外的両制禦と体験型
 の3項目にわたって与えられるものである故
 各人の合計点は0～3.0の範囲になる。前
 頁の表に示した通り、S群のみが、他の2群
 に比して極端に大きい1点得点をとり統計的に
 有意差が認められる。以上の採点各群の反応

特徴から、次には両テストの相補的な利用法が問題となるが、次の(表17)はこの桌を大雑把に検討したものである。

(表 17) 境界領域の T.E. 値を示す P (及 U), S 両群の自己評価の比較。—その1—

対 象	P S			全項目における P S		
	肯定的 (χ)	否定的 (χ)	有意差 (χ)	肯定的	否定的	有意差 (χ)
P (19 群が 3 名に おける)	5	14	*	8	11	* *
S	9	4		13	0	

臨床的実践の場合では、神経症と分裂病の境界領域に属する被験者の診断が常に問題となり、第2部実験 I でも示した通り、口、テストでもその妥当性の問題がいろいろ論じられたが、それ自身でかなり高い確率を以て適応性の弁別をなし得、殊に本研究で用いた T.E. 値 (χ R P R S) の有効性については他の関連研究が実証的資料を提供している。しかし、この T.E. 値においても、6 桌から -2 桌の範囲に特に P 群と S 群との混在が目立ち、P (及 U) 群 19 名と S 群 13 名とが含まれている

。この範囲の T. E. 得点 は Klopfer の述べる 予後
 診断の立場からすれば、治療確率が $\frac{1}{2}$ 或いは
 それをいくらか上まわる程度を意味するもの
 とされるが、これは丁度 P ~ S に至る境界領
 域を指すと考えられる。二二に混在する P (
 及び N) 群と S 群とを自己評価法によりい
 うかでも弁別しうるか否かを調べた結果が前
 頁の表であるが、まず PS 総点によると、二二
 に属する 32 名の中 P (及び N) 群の方がより
 否定的 PS の傾向を示し、S 群との間に 5% レ
 ベルの有意差が認められる。又第 1 部実験 II
 で行った質問紙 - 302 - の項目分析の結果から
 S 群のみを弁別しやすい 8 つの鍵項目を得た
 が、これ等の項目のみについての PS 評価につ
 いて両群を比較した結果からも両群は更に確
 実性を増した形で弁別されている。即ち、自
 己の全般的健全度がかなり低下して所謂境界
 領域あたりに達したところでは、その自己評
 価が却って否定的である方が、適応レベルが少
 しでも無難な段階に維持されている可能性が

より大であることを示唆するものでもあろう。
。このことは先に算出した“ずれ”の値(IC)
に関する結果とも合わせて、「自我」と「自
己」との関係に統合的意味をもたらすための
重大な条件にかかわるものと考えられ、この
点は更に次の章で検討するが、とにかく、ロ
・テストで測定した「自我機能」のレベルの
みに頼るよりも、その「自我機能」が意識的
自己内に反映されるさる方即ち「現象的自己
」のあり方を合わせて見る方法の方が、現実
の適応度をより正確にとらえうることを示す
資料が得られた。

〔4〕まとめ

本実験の目的1) については、自我の自律機
能の全般的な健全性を示すT.E.値がそれほど
高くもなければ低すぎもしない中間的にある
範囲(即ち段階値では一たの5段階の中II以
後IVに至るまでの間)である時、否定的PS評
価で、PSとISとの大きい“隔たり”即ち大きい
PS値がこれに対応してあらわれ、中央附近の

Ⅲ段階の T.E. で T 度頂矣に達するきれいな山型を呈すること、従って、この範囲の両外に属する T.E. 値には、これとは逆に、肯定的 PS と大きい DS とがより多く対立して出現すると言う特異な関係が、「自我」と「自己」との間に認められたことになる。

又、目的 2) に関しては、S 群が他の 2 群のいずれからも有意味に区別される形で、「自我」と「自己」との間の「ずれ」を最も大きく示した。そして更に、T.E. の境界領域に混在する P (及び N) 群と S 群とが自己評価によって有意味に区別され得、本研究でとり挙げた 2 つの方法の相補的有用性が示唆された。次章ではこれ等の結果を土台として更に詳しい又組織的な分析を行う。

<第 19 章> [実験 B], 及び [実験 A] を合わせた資料の分析

(I) 目的

第 18 章の結果に基づいて更に詳しく「自我」

と「自己」との関係も分析し、両者の関係の統合的意味を追究する。そしてこれ等両者の測定方法そのものを相補的に用いる仕方をより徹底なものとすることが本章の目的であり、才1部及び才2部で残された問題を再検討しつゝ、本研究の総仕上げを意図するものである。

〔2〕方法

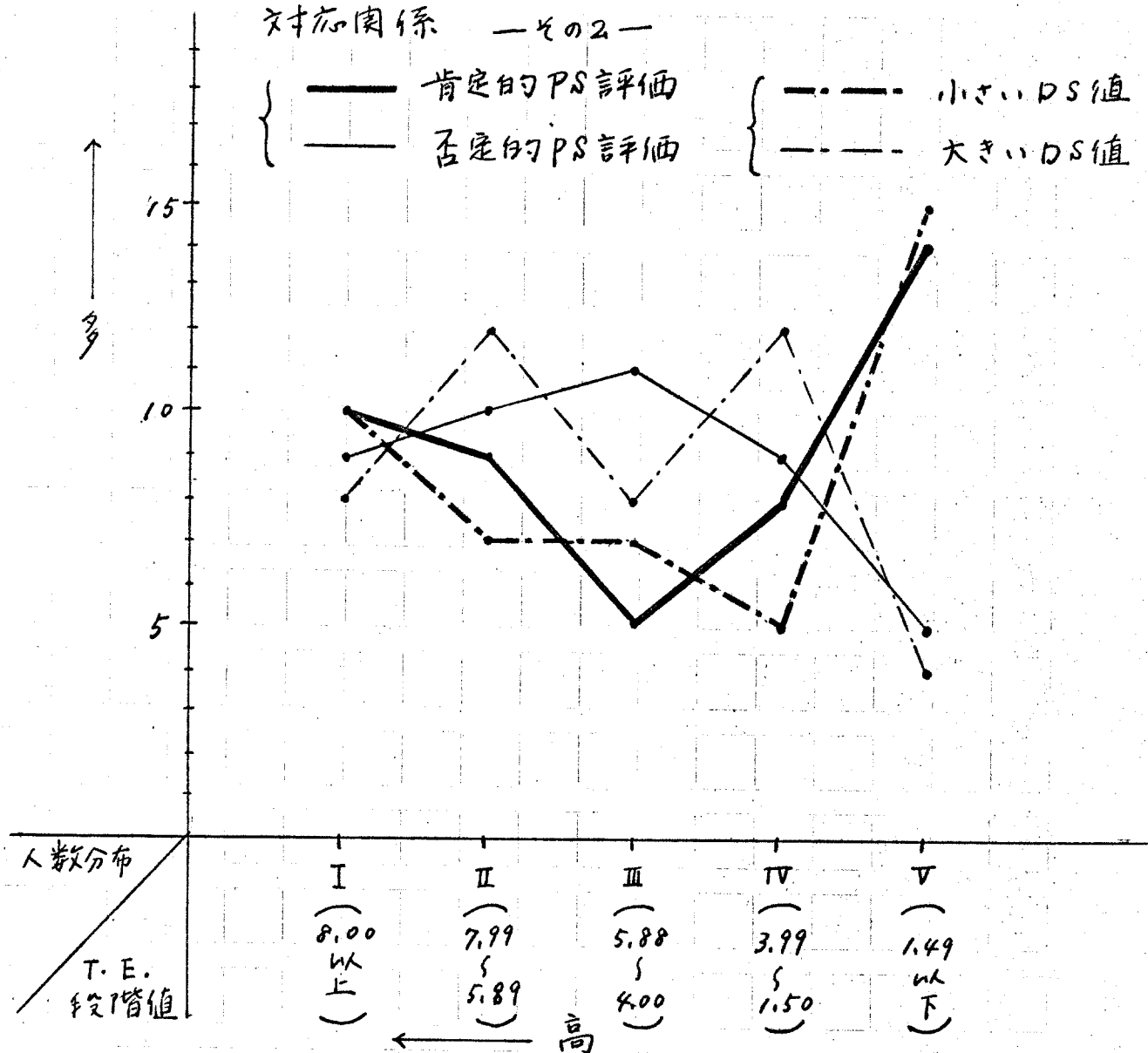
対象及び資料集めの方法は実験B(才1部実験IVと才2部実験IIを参照)と実験A(先章)に示した通りである。

〔3〕結果の整理と考察

表 18, 図 2, 表 19 は 第 18 章 と 同 じ や り 方 で

(表18) T.E.とPS 及び T.E.とDS の 各対称性

自己評価 T. E.		P S					D S					
		肯定的		否定的		有意差 (計に7112 も検定)	小		大		有意差 (計に7112 も検定)	
		N (A)	P S 計 (A) (A)	N (A)	P S 計 (A) (A)		N (A)	P S 計 (A) (A)	N (A)	P S 計 (A) (A)		
↑	(1). 8.00 以上	9	1 0:10	6	3 0:9	} + *	10	0 0 10	5	3 0:8	} ** * **	
健康 度大	(2) 7.99 ~ 5.89	5	2 2:9	3	5 2:10		5	0 2 7	3	7 2:12		
	(3) 5.87 ~ 4.00	3	1 1:5	1	9 1:11		4	1 2 7	0	8 0:8		
	(4) 3.99 ~ 1.50	3	1 4:8	0	8 1:9		1	0 4 5	2	9 1:12		
	(5) 1.49 以下	0	0 14:14	0	0 5:5		0	0 15 15	0	0 4:4		
LIFE C151		21 5 21 10 10 9					20 1 22 10 21 1					20 x 20

(図 2.) 「自我機能」の健全性のレベルと「現象的自己」との
対応関係 —その2—(表 19) 境界領域のT.E.値を示す P(及N), S両群の
自己評価の比較 —その2—

自己評価 対象	PS			DS		
	肯定的	否定的	差の有意性 ^(%)	小	大	差の有意性 ^(%)
P(及N)	12	20	*	8	23	***
S	14	6		16	4	

* $P < .05$ *** $P < .001$

異なった対象について分析し、先に得られた結果をもう一度確かめたものである。図示したグラフの形は、例えば T. E. 値がⅢの段階の時ここでは PSのみが頂点をなし DSが細い破線において凹型の変形を見せる等細かい点では先章と異なった面が見られるが、全体としては似通った結果になっている。又表(19)は P 群と S 群とが重なって存在する境界領域の T. E. 値において、自己評価から両群を区別しうるか否かを調べたものであるが、ここでも先章と同じく弁別の可能性が示されている。

尚本章での整理法は、被験者数の分布上、T. E. 得点のレベルも先章とは少しずらせた形でありその上で同じ5段階分けをしている。又境界領域の T. E. 6.0 点 ~ T. E. -2.0 点では、本実験の場合 P 群は比較的散らばりの少ない T. E. 値をとっているので、この範囲の T. E. の上半分の間に約 70% が位置しており、又 S 群の方でもその 65% がこの T. E. 値の範囲の下半分 (2.0 ~ -2.0) に属している。この点に本実験では実

験 A に比し 2 3 群の重なりが小さいわけであるが (第 2 部実験 II 参照) 一定境界領域の中を先章と同じにとつて表 (19) の標に分析して見た。更に第 1 部でも述べたことであるが、実験の全対象の中、質問紙の応答を部分的に空白にしている者があり、これは応々にして IS 評価に見られているが、空白量によって部分的に結果の整理から除外されている者があり従つて PS の統計数値と DS の統計数値が表によつて異なる場合が生じることももう一度附記しておく。

いずれにしても、実験 A と実験 B とでは全体を通じて同様な結果が得られた。

そこで次は両実験の対象を合わせた分析を試みる。次の表 (20), 表 (21), は同じやり方で全群の結果を纏めたものであるが、ここまでの整理によつて大雑把に認めることのできた、T.E. と自己評価との曲線的な対応性を多数の被験者を対象としてより厳密に調べるために、T.E. に対する自己評価の回帰曲線及び相関比を求

(表 20) T. E. と PS 及び T. E. と DS の各対応性 —その3—

自己評価 T. E.	P S						D S					
	肯定的			否定的			小			大		
	N	P	S 計	N	P	S 計	N	P	S 計	N	P	S 計
	(N)	(N)	(N)	(N)	(N)	(N)	(N)	(N)	(N)	(N)	(N)	(N)
I 9.00以上	18	2	0:20	9	7	0:16	21	1	0:22	6	6	0:12
↑ II 8.99 ~ 6.50	9	2	1:12	9	12	4:25	14	0	2:16	6	13	3:22
III 6.49 ~ 4.00	6	5	2:13	2	18	2:22	6	12	2:10	2	18	2:22
IV 3.99 ~ 1.49	4	1	6:11	1	11	4:16	2	1	4:7	3	11	6:20
V 1.49 ~ -2.39	0	1	10:11	0	1	8:9	0	1	13:14	0	0	5:5
VI -2.40以下	0	0	16:16	0	0	1:1	0	0	15:15	0	0	2:2

(表 21) 境界領域の T. E. 値を示す P (及び N), S 両群の
自己評価の比較 —その3—

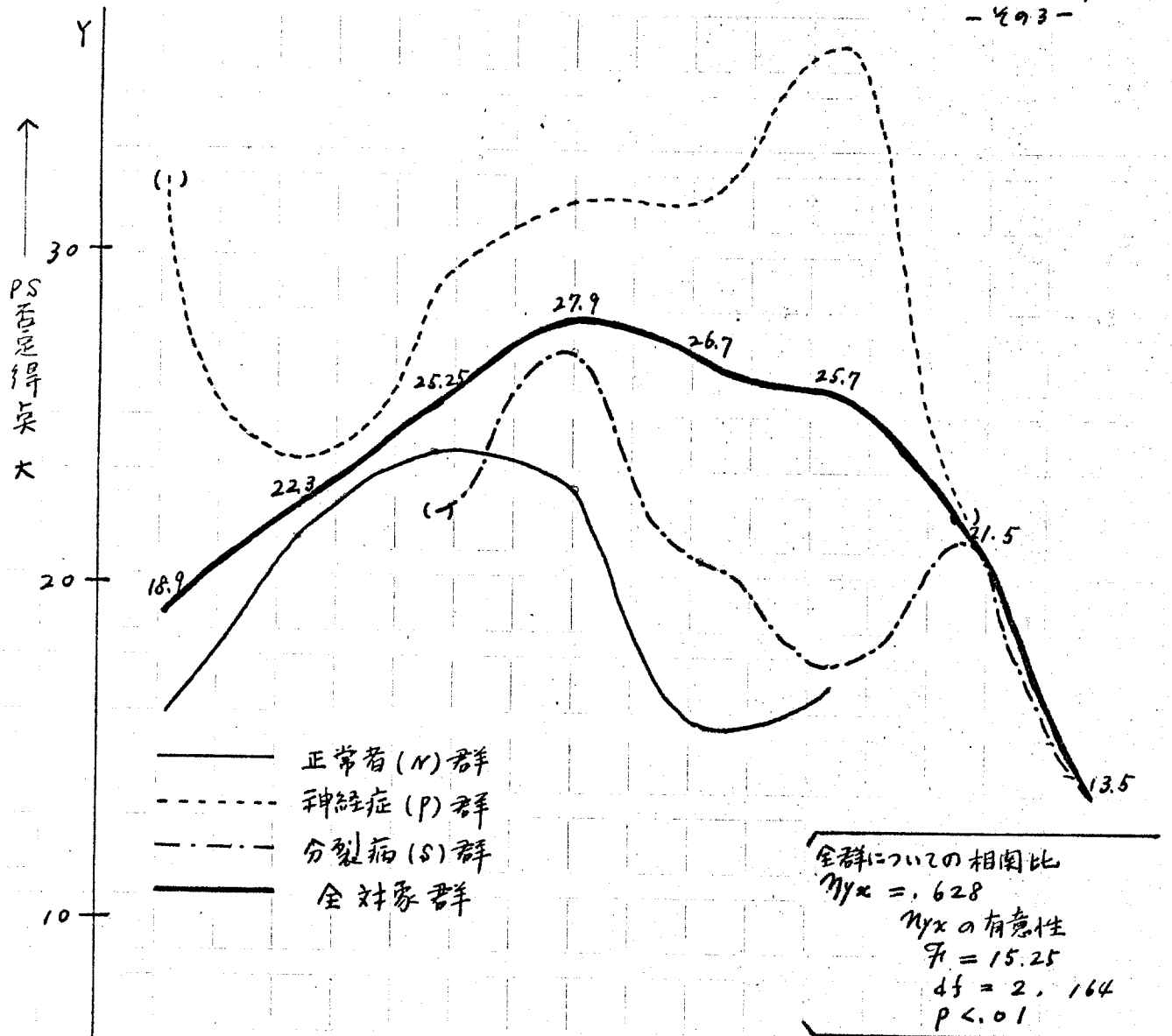
自己評価 対象	P S			D S		
	肯定的	否定的	差の有意性(x)	小	大	差の有意性(x)
P 及び N	17 ^(N)	34 ^(N)	***	12 ^(N)	34 ^(N)	**
S	23	10		19	13	

【註】 ** $P < .01$ *** $P < .001$

表20, 表21共, PS, DSの各2分割は2つの実験を合わせた全被験者の中央値を境として行った。
めてみた。これを3群を含めた全被験者について行くとともに、各群毎の回帰の特徴を調べたのが(図3)と(図4)である。この2つの図から、「自我機能」の全般的な健全度 T. E. とそれを意識的に客観化した「現象的自己」との対応関係を一層厳密に見ることが出来る。即ち、横軸に T. E. 値を8段階に分類し

(図 3) PS否定得点の T.E. (自我健全度 総点) への回帰

- 493 -



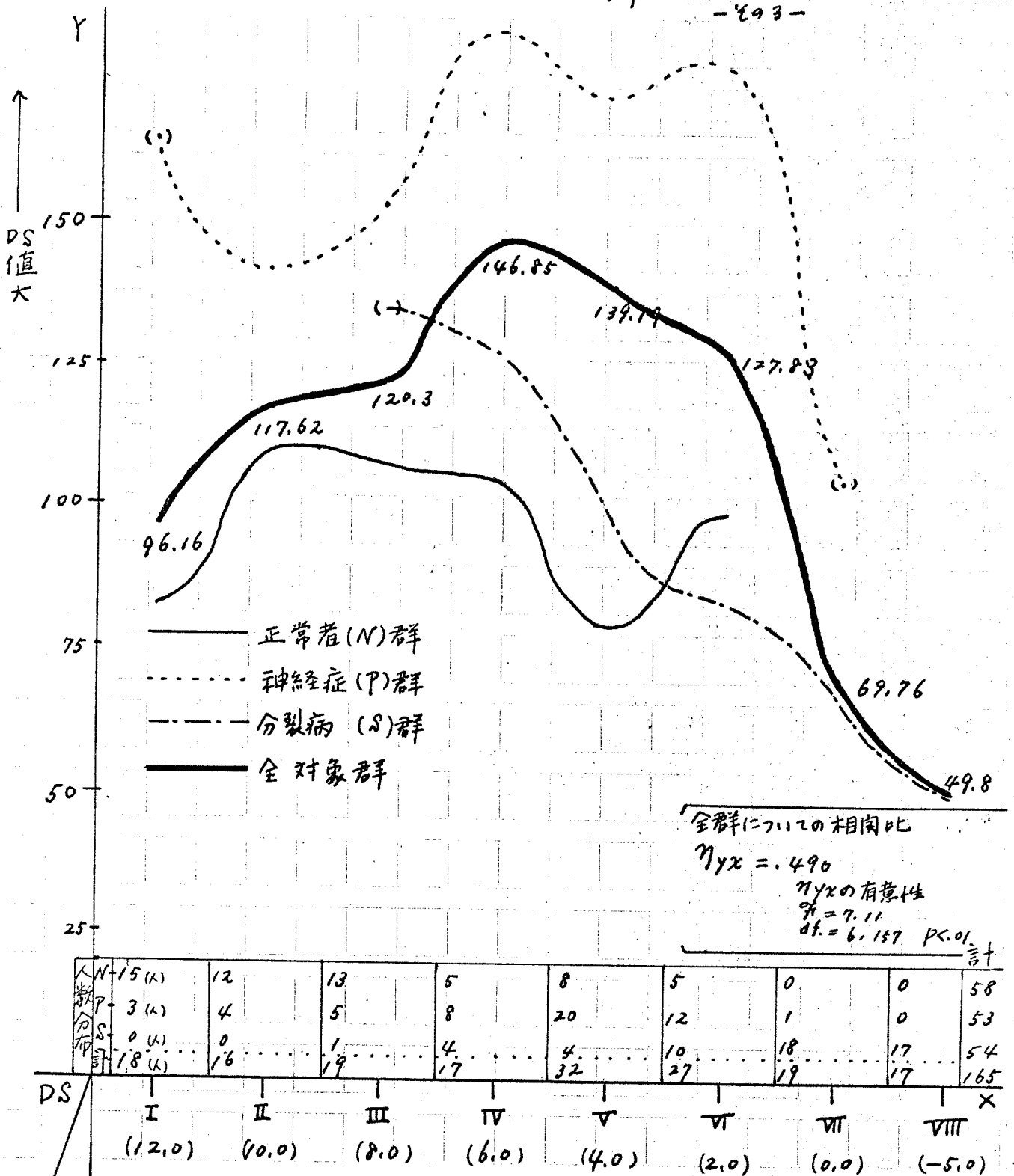
人数分布	N	15 (人)	12	13	5	8	5	0	0	計
	P	3 (人)	6	6	8	23	12	2	0	58
	S	0 (人)	0	1	4	4	10	18	17	60
	計	18 (人)	18	20	17	35	27	20	17	54
										72
PS	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	X	
	(12.0)	(10.0)	(8.0)	(6.0)	(4.0)	(2.0)	(0.0)	(-5.0)		

← T.E. 得点大. 即ち、自我機能の全体的な健全度が高い

(注) 図中の () は、その値が 3 人以下の極めて少ない度数に基づく平均値であることを示すものである。

て目盛り。I 段階から次第に右に進んで段階値が増す程 T. E. 得点が減少して自我機能の不健全度が増大する二とを示している。他方、縦軸には、図 3 の場合 PS の否定的評価点 (PS 否定得点) も、図 4 の場合は DS 点をそのまゝとった。これ等はいずれも相関比を求める上で作成した相関表⁸⁹⁾に基づいて図示したものである。従つて各 X 点 (T. E. 得点) に対応する Y の値 (PS 否定得点或いは DS 点) は、その X 値をとる被験者の Y 得点の平均値に相当する。各 X 値に属する度数は各群別及び 3 群の合計について図中 X 軸の上に示した。T. E. の段階分けをもつと増すことによつて 2 つの凸型曲線は更になめらかになることと思われるが、図 3 及び図 4 の各相関比は図中に示した通り、 $r_{yx} = .628$ 及び $r_{yx} = .490$ でこの曲線回帰の有意性は 5 検定でいずれも 1% レベルである。これにより、実験 A 及び実験 B で共に予想された「自我」と「自己」との対応関係は、はっきりと凸型の回帰曲線によつて示されるも

(図4) DS得点のT.E.への回帰



T.E.
(段階)

LIFE C 151

← T.E. 得点大 即ち、自我機能の全体的な健全度が高い
 註 図中の()はその値が、3人以下の極めて少ない度数に基づく平均値
 であることを示すものである。

のであることがわかった。

これを更に群別にみると、神経症群はすべての T. E. 得点において、全群を通じての平均値よりもより否定的なとして内的価値基準によって是認されない（大きい DS 値）傾向の現象的自己を示すことが認められる。従ってこの P 群では客観的外的枠組から測定された自我機能の全般的健全度が同じ程度であってもそれはより低く価値づけられ内的基準によって是認されない不全感を伴った形で意識的に客観化される傾向を有することが推察される。又、他の 2 群の特徴を見ると、正常者 N 群では、その度数分布が大体 T. E. の高いレベルに集まっているためその曲線の特徴としては大体 IV 段階までの T. E. 値の範囲におけるものを考えるべきだ”と思うが、P 群よりはかなり離れてしかも全群の平均値からなる曲線よりも低い位置にこの曲線が描かれていることから、同じ T. E. 値に対する PS の否定評価の度及び PS と IS の“隔たり”が P 群等に比しはるか

に少ないことが認められる。更に S 群も N 群と同様であるが興味深いことは、P 群と分布が重なっている T.E.V ~ VI あたりの段階で、P 群の場合は全般的な自我機能が不健全化するに経って PS 否定得点及び DS 値が増大して行くのに対して S 群では逆に PS 否定得点、DS 値とも低下して来ることである。この様に見て行くと N 群において、T.E.V と云う自我機能の全般的な健全度が少し低下して来たレベルでの PS 否定得点と PS 得点とが減少傾向を見せていることはや、問題となろう。このことには度数の少なさもかなり関係していることと思われる故結論的なことは云えないが、神経症・分裂病等の診断名が与えられていない普通一般の人々の中にもその適応度にはかなり散らばりのあることをうかがわせるに足るのである。以上の諸結果については後に再びまとめ考察することとし、次は実験 A 及び B でもとり挙げたと二つの「自我」と「自己」との間の「ずれ」の問題を更に詳しく分析

して見る。

同じようには口・テストでとらえられる自我の自律機能の諸側面別にこれ等に関する意識的自己評価との“ずれ”をみたわけであるが各側面毎に、その“ずれ”の程度を(1)一致、(2)準一致、(3)不一致とし、(3)の不一致を更に、否定的不一致と肯定的不一致に分類した。これ等は“ずれ”の内容に関するものであり、否定的不一致とは、口・テストの結果からすればその側面に関する自我機能は望ましく肯定的に評価されてよいものと考えられるのに、それが「現象的自己」に客体化された上での意識的価値づけが否定的である場合を指し、肯定的不一致はこれと正反対のものである。又準一致とは、各側面(カテゴリー)によってその内容が異なってくるが、要するに、十分一致しているとはまでは云えないに心ても不一致であるとまでは断定し得ないものを指している。各“ずれ”の内容は今後随所で次の標に略号して示すこととし、各カテゴリー

毎にこれ等の分類基準を述べておく。(1)一致
 …… con (> consistency) (2)準一致 …… con' (3) 否
定的不一致 …… nic (> negative inconsistency),
 肯定的不一致 …… pic (> positive inconsistency)

1. 全般的な情緒の安定性

12. テストの側においては既に述べた様な指標に基づき、(1)情緒的に不安定な問題が明らかに認められる(諸指標中4~5個にチェックされるか或いは2~3個の項において26集中的にチェックされる場合)、(2)少し問題あり、(3)まず問題なし、の3分類を行った。他方、自己評価側の整理、分類は、29カテゴリーに属する9項目中、過半数即ち5項目以上に否定的評価を示した時、その被験者の、情緒安定性に関する自己評価を否定的とみなし、逆の場合を肯定的と認めた。この両者の対な関係によって“ずれ”が上記の4種類のいずれかに分類されるわけであるが、この場合、con に入れるか con' に入れるかについてはいろいろ微妙な問題が含まれる故。あま

り機械的に割りすぎない称にし、右の表に示した如く
 12. テスト側が“少し問題あり”の場合は両結果を慎重に検討し直すことにより、con と con' の2種類を個々の内容に応じて割りあてることにした。例えば、12. テスト結果が2の場合、その自己評価が9項目の殆んど全部にわたって肯定的であれば con'、又肯定的自己評価がやっと過半数にわたる程度にとどめられている場合は con とする等であり、又逆に12. テスト側の指標を詳しく吟味し直すことも行った。

ロ・テスト 自己評価	12. テスト側		
	問題あり	少し問題あり	問題なし
肯定的	pic	con 又は con'	con
否定的	con	con 又は con'	nic

2. 愛情欲求

12. テスト側では愛情欲求の成熟性は一た問題外とし、とにかく、愛情欲求の認知が回避乃至は抑圧されているか否かによって2分類した。値内紙においては、既に才1部の実験II及びIVで、肯定-否定評価の意味が問題であることに触れたが、意識的用語による記述の仕方が、かなり強い依存性を意味する形に

なっており、ロ・テストの解釈理論で述べられている基本的な意味での愛情欲求の認知と多少異なったニュアンスも持ったものになっているが、一応、“認知”の面での一致性をほかに推定しうると考え、右表の様な仕方で分類した。自己評価側の肯定－否定分類は、これに関する3項目中2項目までも肯定的に（依存感情の自覚的表現）評価しているか否かによつて一応割り切って行った。

ロ・テスト 自己評価	愛情欲求 の認知 受容	愛情欲求 の回避 抑圧
肯定的 (認知)	con.	pic
否定的	nic	con.

3. 攻撃欲求

これは攻撃欲求の認知に関するのみ、2.と同様な仕方で分類した。

4. 外的制禦及び 8. 内的制禦

これ等は互に関係の深いカテゴリーである故に、“ずれ”の分類法も自ずと同様なものとなり、ここでも合わせて述べておくことにする。

一応の基準は右表の様な仕方で分類するが、“良い制禦の亜型”の場合は、右表の“良い制禦”

ロ・テスト 自己評価	良い制禦	制禦乏しい収縮型	
肯定的	con	pic	pic 又は con
否定的	nic	con	nic 又は con

の時の分類と同じになるか或いは con' となるかのいずれかであり、殊に内的制禦の場合は、収縮型とは異なる過制禦(価値体系が強く確立されすぎているもの)が、良い制禦又はその亜型の中にいくつか含まれて来たりするため分類はかなり複雑でもあったが、1. の場合と同様、各個人毎の特徴を重視して行った。

5. 6. 7. 9. において各々内容は異なっているが、大体以上に述べた様な要領で、 con , con' , pic , nic , の4通りのいずれかにあてはめるよう分類した。

そして得点は、 con , pic , nic に対し各1個記1点を、 con' には各0.5点を与えることとし、総点は、 con' を con の中に含めて、計3種について算出したが、カテゴリ-数が9である故0～9点の中となる。

尚、この分析は、実験Bの被験者のみを対象として行った。その理由は、実験Bがそれまでの累積的研究を基盤としてこの“ずれ”を

より詳しく組織的に吟味することを目的として行われたからである。実験Aでは質問紙に不備な点がかなりあったことを考え、その対象をこの分析に加えることは避けた。そこで、(表22)は各群別に、各カテゴリー毎の con, con', mic, pic の人数分布を示し3群を比較したものである。2, 3, 4 のカテゴリーでは con' を最初から分類に加えていないため残りの3種について結果を表示している。S群では con (一致) 得点そのものが他の2群よりも有意味に低く、又 pic (肯定的不一致) 点が逆により高くなっている。mic (否定的不一致) 点は全体を通じてP群に最も多く見られ、全カテゴリーにわたる延べ人数及び1, 5, 2, N群との間に、又、5, 7, 8, 総点、及び延べ人数においてS群との間に有意差が認められた。Con得点はN群において最も高く、S群との間では勿論、P群との間にも、8, 総点、延べ人数の上で多少とも有意差が見られた。結局、全体を通じた結果では、3群中S群が

(表 22) ロ・テスト結果と自己評価との“ずれ”の群間比較

カテゴリー		人数分布			群間比較 (差の有意性)		
カテゴリーの内容	“ずれ”の分類	N	P	S	N-P	N-S	P-S
1. 全般的な情緒の安定性	con	18 ^(A)	17 ^(A)	4 ^(A)	}	}	}
	con'	2	3	6			
	nic	0	7	2			
	pic	10	3	18			
2. 愛情欲求	con	16	13	15	+	+	
	nic	3	11	10			
	pic	11	6	5			
3. 攻撃欲求	con	22	15	15	+	+	
	nic	4	6	6			
	pic	4	9	9			
4. 外的制禦	con	14	12	5		*	+
	nic	6	9	8			
	pic	10	9	17		+	*
5. 情緒反応の自由さ	con	15	11	17	*		***
	con'	5	2	2			
	nic	6	15	1			
	pic	4	2	10			
6. 確信が生への接近(親和)	con	22	19	13		*	
	con'	0	0	0			
	nic	3	6	1			
	pic	5	5	16		**	**
7. 精神機能全体の活動さ、豊かさ	con	15	11	7		}	}
	con'	4	2	4			
	nic	5	9	1			
	pic	6	8	18		**	**
8. 内的制禦	con	9	7	3	}	}	}
	con'	7	0	1			
	nic	12	16	7			
	pic	2	7	19		***	**
9. 現実吟味	con	14	12	3		}	}
	con'	6	3	2			
	nic	6	6	1			
	pic	4	9	24		***	***
10. 全体	延べ人数	con (Bu'con)	169	127	**	***	*
		nic	45	85			
		pic	56	58			
	総点	con 点	23	16	+	***	*
		高 (S ₂ 45)	7	14			
		低 (S ₂ 45)	19	23			
		高 (S ₂ 15)	11	7			
		低 (S ₂ 15)	4	9			
		高 (S ₂ 3)	26	21			
		低 (S ₂ 3)	5	5			

註 差の有意性の検定は、大体 χ^2 検定を用い、総点についてはU検定と両方行ったが、表示した χ^2 検定の結果と同様になった。(但し、U検定では1%レベルまでの結果しか出なかった)

+ ... $P < .10$ * ... $P < .05$ ** ... $P < .01$ *** ... $P < .001$

最もきわ立った結果を示し、NとP両群は比較的似通つていたことになる。もう少しカテゴリー毎に結果を追ってみると、1, 4, 6, 7, 9, では、1.においてP群とN群との間にわずかながら不一致得点の内容が逆転(P群の方にmicが多く、N群は相対的にこれと逆になっている。但し、いずれも絶対数はわずかである。)している結果有意差がこの不一致点について見られる以外は、全部S群のみが先述した如き低いCon乃至はCon'点と高いpic得点によって他の2群から区別されているわけであり、N, P両群間には差が認められない。8.においてもこれとほぼ同様な結果が得られているが、ここではP群も一致点が低く、N群との間に有意差が生じており、又P群ではその結果不一致点の中mic点の方が多くなっているため予の点の少ないS群との差が有意になっている。この点にP群が他の2群より区別される結果は5.においても認められており、5.ではmic得点がかわちって高い

ため、N、S 11 ずれの群との差も有意となつて
 いる。5、8、の結果は、神経症群が、客観的
 的的な枠組から見れば、衝動に対する制禦（
 防衛）がかなり自律化して効くことによりなさ
 れる）が果されておる。又対外関係における
 情緒の自由な交流にそれほど極端な問題はな
 いものとみなされるのに、意識的に客観化さ
 れた「現象的自己」のレベルでは、衝動に圧
 迫されておる防衛を成功的に効かせる制禦機
 能に自信を欠くこと、そして対外的情緒交流
 を非常に不自由だと感じそれに強くこだわっ
 ていふことを示していると考えられる。これ
 等は後にも触れるが、衝動防衛に過剰なエネ
 ルギー消費を行ひ、それに対応して対外関係
 がおのずと制限されがちな神経症独特の傾向
 及び、厳しい超自我や健全な自己愛の障害に
 よつて必要以上に自己を貶低しがちなこの群
 の傾向を具体的にあらわしている一資料とも
 解せられる。又、2、及び3、のカテゴリーで
 は先述した如く、「自我」と「自己」の両資

料を対応させる ことに いくらか 問題が 含まれ
 ている ためか あまり はっきり した 結果が 出て
 いない。総 算では これまでの 全般的な 結果と
 同じく、S 群が 低い con. 得 点と nic 得 点とし
 て 高い pic 得 点を示し 他の 2 群から 明らかに 区
 別されている。N と P 群では、N 群の方が
 より 高い con. 得 点をも、P 群の方が nic 得 点をも
 より 高く 示す 傾向があり、各 得 点をとる 近べ
 人数の 比較において は かなり はっきり した 差
 が 認められたが、下位カテゴリー 毎の 検討や
 又 各人 毎に 3 種の 総 算を 算出した 結果の 比較
 では もう 一つ 十分な 統計的 有意差が 見られて
 いない。従って、この “ずれ” の 分析からは
 、S 群の 特徴が 最も 一貫して 認められた。

次は、T. E. レベルの 変化に 対応して これ等 3
 種の “ずれ” 得 点が どの 標に 変化する かを見
 るために、(表 23) と (図 5) を 作成した。(
 図 5) は (表 23) から、群別 ではなく 全群
 を 含めた 人数の 分布をしらべ、3 種の 各得 点
 について その 高得 点者の 占める 割合を、各 T. E.

の段階値毎に算出し、これを%であらわして図示したものである。各種得点の高—低得点の分類基準は先の表22の最下欄に記した通りである。この結果、全体的傾向としては、高い con 得点が占める割合は、T.E. レベルが低下するに随って減少し、又高い nic 得点についてもほぼこれと同様な傾向が認められる。これに対して、高い pic 得点の占める割合は、T.E. のレベルが低下するほど直線的に増大していることがわかる。より詳細に見れば、con 得点は T.E. = 5.89 以上のところでは非常に高く（この中には神経症群の約 37% も含まれる。N 群は 73% がこの範囲に属している。）、T.E. がそれ以下の値になると逆に低い con 得点の方が多くなり、これが殆んど全体を占めるに至る。又高い nic 得点は、I ~ III 段階あたりの T.E. ではほぼ同程度に多い割合を占めており（この中には N 群の 90% と P 群の 70% が含まれる。）T.E. が IV 段階目を過ぎると急にこの割合が減少し低い nic 得点と交代する形

(表 23) 各 T. E. 段階値における各“すれ”得点の分布

T. E. (F段階値)		8.00 以上	7.99 5.89	5.88 4.00	3.99 1.50	1.49 以下	
"すれ" の各種得点		I	II	III	IV	V	
Con (及"con") 点	高	N(u)	11	8	3	1	0
		P(u)	3	4	2	6	0
		S(u)	0	2	1	1	4
		計(u)	14	14	6	8	4
	低	N(u)	4	0	1	2	0
		P(u)	1	3	2	3	0
		S(u)	0	2	1	4	15
		計(u)	5	5	10	9	15
	(x ²) 差の有義性		***			** **	
	mic 点	高	N(u)	11	4	2	2
P(u)			2	6	9	6	0
S(u)			0	4	0	0	4
計(u)			13	14	11	8	4
低		N(u)	4	4	2	1	0
		P(u)	2	1	1	3	0
		S(u)	0	0	2	5	15
		計(u)	6	5	5	9	15
(x ²) 差の有義性		*			*** **		
pic 点		高	N(u)	0	1	1	2
	P(u)		1	1	4	3	0
	S(u)		0	3	1	5	16
	計(u)		1	5	6	10	16
	低	N(u)	15	7	3	1	0
		P(u)	3	6	6	6	0
		S(u)	0	1	1	0	3
		計(u)	18	14	10	7	3
	(x ²) 差の有義性		***			*** **	

注.

差の有意性検定
は 3 群の合計の
人数分布に関して
行ったものである。

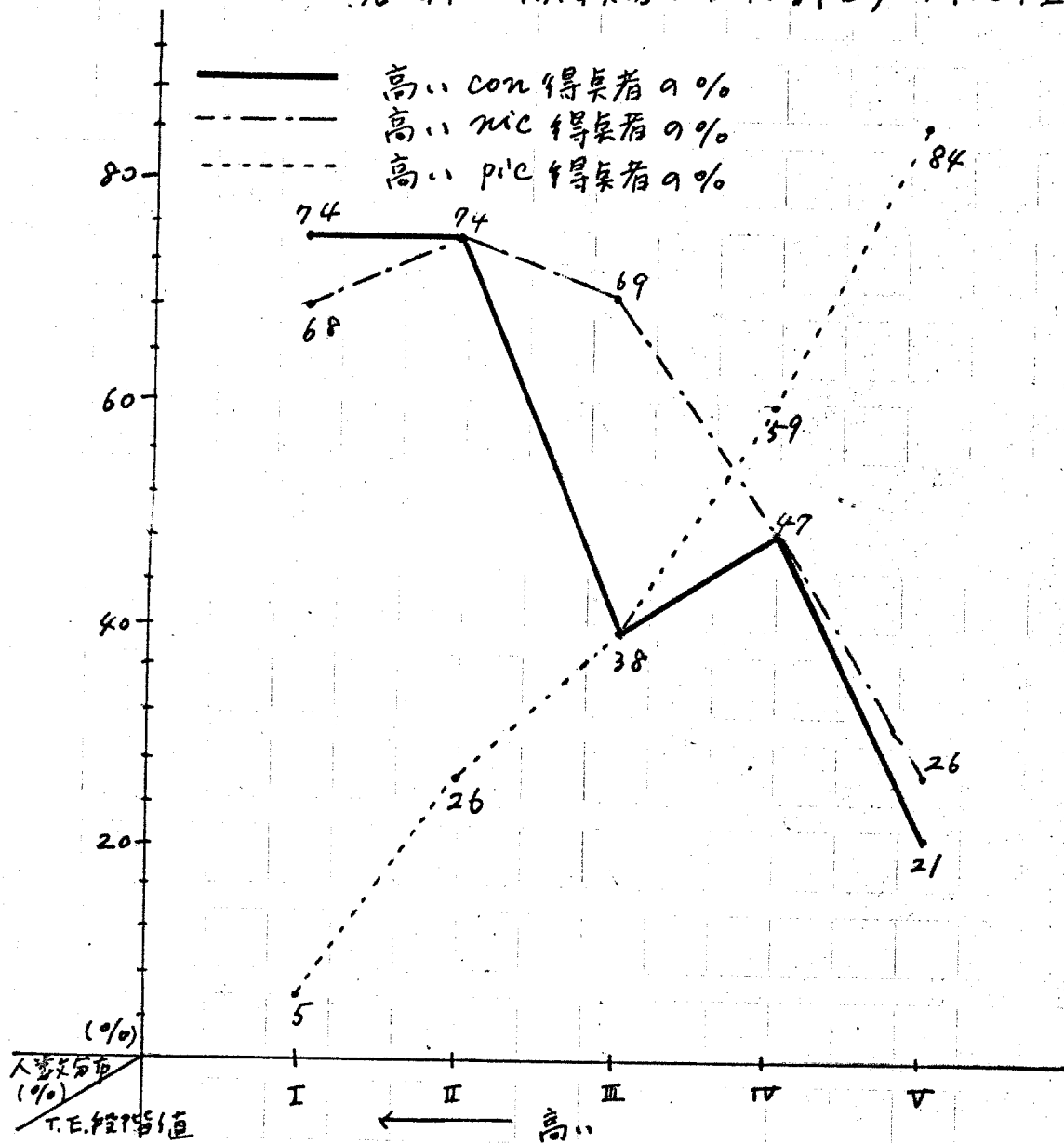
Con の低得点者
が、I, II の T. E. に
おいて少なく IV, V の
T. E. に対して
多いことが、有意味

T. E. = I, II では mic
の高得点者が多く
T. E. = IV, V では mic
の低得点者が多い
ことが有意味

T. E. = I, II, では
Pic の高得点者が
極めて少なく、
それが T. E. = IV, V へ
は非常に多いことが
有意味

** ... $p < .01$ *** ... $p < .001$

(図 5) T. E. 値の変化と、各“すれ”得点者の人数分布 (各 T. E. 段階において、各“すれ”の高得点者が占める割合) の対応性



(表 24) T. E. の境界領域における P (及 uN) と S 両群の“すれ”得点の比較

対象	pic (肯定的不一致)		(2 ²) 差の有意性	nic (否定的不一致)		(2 ²) 差の有意性
	高	低		高	低	
P 及 uN	10	16	* *	19	7	* * *
S	22	4		4	22	

** ... $p < .01$

*** ... $p < .001$

となる。又、高い pic 得点は先述した如く、
T.E. 段階値の移行にともなうて直線的に変化
するがⅢの段階値までは半分以下であるのに
以後著じるしくその割合が増し、Ⅴ段階では
殆んど全体近くを占めるに至る。(但し、こ
の最終段階値には P 及び N 群は含まれていな
い。)

(表 24) は “ずれ” を示す mic 及び $wpic$ 両得
点によつて、T.E. Ⅳ～Ⅴの所謂境界領域に重
なつて存在する P 及び N 群と S 群が区別され
うる程度を検討したものであるが、いずれの
“ずれ” 得点によつても S 群は他から区別さ
れやすいことが認められる。この様に、“ず
れ” 得点は PS 評価と同様もしくはそれ以上に、
T.E. のみでは判別しにくい適応差を、よりの
確にとらえうることがわかる。

〔4〕まとめ

ここではまず実験 B の資料について先章と同
じ仕方で「自我」と「自己」に関する各テス
ト結果の対応性を大雑把に検討し先章とほぼ

同様な結果が得られた。そこで更に実験 A と B とを合わせた被験者について、同じ表をより厳密な方法で分析したところ、結局、両者の関係は、「自我」の全般的な自律機能の健全度を示すと考えられる T.E. に対する「自己」の否定的評価 (PS 否定得点) の関係を調べた場合、後者は前者の減少に従って凸型の回帰曲線を描いて変化する事がわかり、両者の相関比、曲線回帰の有意性が統計的に 1% レベルの危険率を以って認められ、又 PS 否定得点の代りに DS 得点を置きかえて分析してみても同様な結果が得られた。そして全群を合わせた被験者に関するこの回帰曲線に加え、各群別の回帰曲線をも各々描いてみると、P 群の曲線が全群の曲線の上側に、そして N、S 両群のものが下側に来る事が認められ、このことから同じ T.E. レベルによって示される「自我」の健全度も、それを「自己」像として客観化し意識的に価値づける仕方には各群毎に異なった特徴の存する事がわかり、

これについては319～320頁に少し詳しく述べたので省略するが興味ある結果だと思われる。又、「自我」と「自己」との対応性を、両者に関する資料の“ずれ”と云う観点から、先章よりは詳しくより組織的に分析することを試みた。これは、最初からその意図の下に作成したテスト材料によって行った実験Bの被験者についてのみ、9つのカテゴリーで示される自律的自我機能の諸側面に関して、ロ・テスト結果と自己評価とを一々対応させることにより分析した。そして両者の対応性、“ずれ”のあり方から、一致(con), 準一致(con'), 否定的不一致(nic), 肯定的不一致(pic)の4種類の得点比を行い、各得点について3群を比較した。その結果、S群が最も低いcon得点とnic得点、最も高いpic得点を取り、いずれも全体として他の2群との間有意差を示し、NとP群とでは、前者がより高いcon得点、後者がより高いnic得点を示す傾向が認められたが、統計的には一貫した有

意差がなかった。T. E. レベルの変動に従って、 con (及び con')、 mic 、 pic の三種得点の高低がどの標に移行するかを調べた結果では、T. E. が中央値 (実験 B 全群に属するもの) まで或いはそれよりもう少し高い T. E. の段階値までにおいては高い con 、及び高い mic 得点の占める割合がほぼ同程度に多く、又、T. E. の段階値がそれを過ぎて低下するとこれ等は急速に減少し、これと入れ代って高い pic 得点の占める割合が著いるしく増大するのが認められた。その他、この「ずれ」に属する得点が境界領域の T. E. 値をとって混在する P (及び N)、S 群を弁別する上で役立つものであることもわかり、結局、これ等の結果から、全群を通じての、及び N 、P、S 各群における、「自我」の自律機能とその客体的反映である「自己」との関係がより詳しく示され、各々に関心する片方の枠組から得られた資料のみでは把握し得なかった各群の特徴が明らかになり、これ等2つの枠組による方法の相補的

又総合的使用の有用性が実証された。

〈第20章〉第3部の総括と結論（本研究の総合的考察）

第3部では、第2部でロ・テスト法により再度同様な結果を以ってとらえた自我の自律的機能の健全性と、これを意識的に客体化して価値づける仕方（自己評価）について第1部で累積的研究を通じて得られたところの方法即ち「現象的自己」とある一貫した自己評価の型としてとらえる方法により調査した資料との両者の関係のあり方を全被験者及びN、P、S各群に関して分析した。これは、1)「自我」側及び「自己」側の各結果を総点（Total score）により代表させ、即ち、T.E. 点（自我の自律的諸機能の健全度に関する各得点を総和したものの）とP.S. 否定点及びDS点（夫々現実的自己を否定的に評価した総得点と「現実」と「理想」の両自己評価間の“隔たり”の総得点）、これ等両者の対応関係を調べる

こと、2) 両者の結果も各々独立的に得臭比するのではなく、両テスト法に共通して組み入れたところの自我機能の諸側面に因する下位カテゴリ—毎に各々の結果をつき合わせ、両者の“一致”—“不一致”を4種類に分類して得臭比して行う分析の2つの主要な方向から試みた。

1) のやり方に関しては、予備的段階の分析として実験A及びBの各被験者につきそれぞれ行ったところの、T.E. 値の变化とPSの肯定的及び否定的各評価者の数の变化との関係或いはT.E. 値の变化とDS高得臭者及びDS低得臭者の各数の变化との関係についての大雑把な分析により、ほぼ共通した結果として、T.E. 値が、高→中→低と变化するに従い、PSは大体肯→否→肯、又DS値は_(低)→_(高)→_(低)と变化することが認められ、従って、否定的PS評価者の数とDS高得臭者数とを各々T.E. 値に対応させた場合はT.E. 値が高→中→低と变化するに伴い両者は同様にT.E. 中央値附近が大体頂上を

形づくる山型をなして変化する ことがわかつた。これ等は 3 群を全部合わせた者について行ったのみであるが、「自我」と「自己」各々に因する資料間の全体的な対応関係がほぼ予想されたので、更に実験 A と実験 B とを合わせた被験者につき T.E. 対 PS 否定得点、T.E. 対 DS 得点の各関係をより厳密な手続により分析した。その結果は、才 19 章 14) でまとめた通りであるが、高→低と変化する T.E. 値に対し PS 否定得点及び DS 得点は凸型の曲線回帰を同標に示しながら変化するものであった。即ち、T.E. 値によって示される自我の自律的機能の全般的な健全度がかなり高い所と逆にかなり低いところとでは共に現実的自己評価がむしろ肯定的であり（低い PS 否定得点）価値基準により是認された形のもの（小さい DS 得点）と云されており、これに対し、中間的な T.E. 値には反対に価値基準によって是認されない否定的な「現実の自己」評価の対応することが認められるわけであり、そうした自己評価は全

体としてかなりなだらかに連続して変化した曲線を描く結果となった。こうした全群の傾向を一たの基準として見た場合、 N 、 P 、 S の各群の特徴は相対的にかなり顕著な形で描き出されることがわかった。これ等各群の特徴は後でまとめる。

2) については、実験Aで3つのカテゴリーについてのみ“ずれ”スコアを算出しS群即ちT.E.値が平均して低い対象においては極端にこのスコアが大であることを見出していたが実験Bの被験者につきより詳細に分析した結果、T.E.値が高→低と変化するに従い、外的枠組であるロ・テストにより測定された自我機能の健全度をそのまゝ、近しく“低い”ものとして内的枠組である「自己」に反映させず、ロ・テスト結果と一致しない形で高く自己評価する者(高いpic得点者)が次第に増加する傾向にあり、逆に、客観的に測定された自我機能も正確に客観化し得ていることを示す一致得点(con及びcon'得点)と先のpic得点

を与える場合とは反対の“ずれ”方を示す否定的不一致得点 (nic 得点) について見れば、これ等の得点を高くとる者の割合が、T.E. 値の高→中→低と云う変化に対して、中→低で急速に減少しそれより高いT.E.段階においてのみかなり多くを占める傾向が認められた。1)と2)の各結果は互に矛盾のないものであり、別の方角及び手続から、同様な意味を示す関係が、「自我」と「自己」の両テスト結果の間にみられたわけである。これが3群を一諸にした全対象についての結果であり、こうした全群の傾向を背景としながら、適応群Nと異なった不適応症状を診断されているP; S 2群の各群の結果をまとめて見ると以下の様になる。

N群……ロ・テスト結果では才2部に示した通り最も高いレベルのT.E.値、又自我機能の諸側面を示す各下位カテゴリー全般にわたって3群中最も望ましい反応型が再度の実験を通じて得られた。又、自己評価に関する才1

部の累積的資料全体を通じ、一貫して、高い肯定的なPS（現実的自己）評価、小さいDS値（‘現実’と‘理想’の両自己評価間の‘隔たり’の値）を示し、これはP群との間に常に明らかな有意差を認めるものであったがS群は全般を通じてこのN群と同様な形の自己評価をみせた。そして、両テスト結果の対応性に関しては、高いcon得点によって示される如く、3群中で最も良々一致した対応関係を見せ、又、同じT.E.値（N群におけるこの値にもかなりの中けあり、P群に比し平均値は明らかに高い方にずれているが、これ等両群はある中の重なりを示す。これに比しNとSがこの値で重なることは、勿論、ずっと少なくなる）をとるP群の被験者とくらべた場合、その自己評価は、図3及び図4に示した通りはるかに肯定的であり（高いPS値）又‘理想’と‘現実’の両自己間の‘隔たり’の小さいものとなっている。但し、S群の標に、肯定的な方向に‘ずれ’すぎた自己評価（高いpic得点）を示

す二とはなく、これにはロ・テスト結果そのものの両群間における差が関係しているが、pic 得点そのものは常に S 群との間に明らかな差を示している。

P 群-----ロ・テストでは全般を通じて殆んど常に、N、S 両群の中間に位置する結果を示し、両端の 2 群に比すると、量・質共に、他からはっきり区別されうる特徴を見せなかった。これに対し、オノ部の「自己」研究においては、常に一貫して、低い否定的な PS 評価と大きい OS 値を示し、お互に似通った自己評価の型を示す N、S 両群にくらべ、この 2 群から明らかに区別される顕著な評価型をとった。両テスト結果の対応性に関しては、S 群とは対照的に pic 得点が低く、N 群をや、下まわりながらも（一貫した、十分な有意差は認められない）かなり高い con 得点、及び S 群ではわずかしか見られないところの pic 得点を N 群を上まって高くとる傾向（この点の N、P 間の有意差は、con 得点の場合と同

標、一貫して十分なものではなかったが)を
 示し、図3及び図4に基づく分析では、同じ
 T.E. 値に対する自己評価が、S群との比較に
 おいてはもとより、N群とくらべても、はる
 かに低い肯定的なPSと大きいDS値によって特
 徴づけられ、これは全群に属する回帰曲線を
 境にすれば、両群の曲線が明らかに上下に分
 かれることから予想される通り、心理学研
 究(第30巻 第4号)のp.279のFig. 2とTable 3に示した方法によ
 り統計的検定を行えば、両群の間及びこのP
 群とS群との間には1%レベル以下の有意差
 が認められた。従ってP群はS群の標に比
 テスト結果とくらべて肯定的な方向に“ずれ
 ”た自己評価を行う傾向は少なく、“ずれ”
 分析における標なやり方では両テスト結果が
 “一致している”と見做しうる範囲にあるか、或い
 はむしろ自己評価の方を比. テストで測定さ
 れた結果よりも全般的に下まわらせ又理想像
 との“隔たり”を大きく示す傾向を有してい
 ることがわかる。これによってP群は他の2

群からそれぞれ區別されうる特徴を示した二
 となる。

S群……ロ・テストでは、右下位カテゴリー
 及び全体の総スコアである T.E. 値においても
 常に最も低い自我の自律的機能のレベルを
 示した。他方、自己評価の累積結果では一貫
 して、N群と似通った高い肯定的 PS 評価と小
 さい DS 値をとり、A群とは明らかに有意差を
 示しながらも、ロ・テストで最も大きな差が
 認められた N群との間には殆んど差が認めら
 れずむしろ全体として N群を上回る自己
 評価即ち、より高い PS 評価とより小さい DS 値
 をとる傾向をみせ、殊に後者の DS 値では、実
 験 B の結果にも示した通り N群との間にも総
 算等で有意差が認められている。そこで、両
 テスト結果の対応性に関して、Con 得点が
 著しく低く、逆に不一致得点の中の pic
 得点が非常に高くなっていることによつて示
 される如く、両テスト結果は 3 群中で最も矛
 盾した「不一致」な関係にあり、その「ずれ」は

12. テスト結果に比し自己評価が肯定的すぎ
 又、'理想'と'現実'の両「自己」間の隔
 りが極めてわずか或いは殆んどみられない
 と云う点で特徴的である。これはP群の結果
 と全く対照的であり、図3及び4でも認めら
 れる通り、P群ではT.E.値が低下するに従い
 PS否定率はどちらかと言えば増加する傾向に
 あり、又DS値も増加しないまでも同じ程度の
 高さに保たれてゐる傾向を示すのに対し、S
 群では同じ範囲でT.E.値が低下するに従い
 するPS否定率が低下(肯定的PS評価が増える
 傾向)し、又DS値は-1で急激な勾配を示して
 低下する傾向が見られ、従つて、P群とS群
 との自己評価の差は両群が重なつて存在する
 範囲のT.E.値においてこの値が低下する程
 度大きくなつてゐることがわかる。

以上は各群の結果をそれぞれ要約してまと
 めたものであるが、「自我」の自律的な諸機能
 を客観的外的枠組から測定しようとする一つ

のテスト、これに對して、「自我」の各諸機能を意識的に客體化した「現象的自己」を内的枠組から一つの自己評価のあり方としてとらえようとする方法、この二つのいずれか一方のみでは十分とらえ得なかつたと二つの各群の特徴が第3部における総合的な分析の結果それぞれ明らかになった。これ等の各特徴の意味については次に考察するが、両方法の相補的又総合的使用の必要性及び有用性はこゝまでにおいてもすでに示されており、各群の両テスト結果の対応關係についての特徴に基づいて3群が一戸有効に弁別されることは、臨床實踐において最も問題となる、P群とS群との境界的領域に稱されているある範囲にわたって混在する対象について、その現実的適応性を判別することを試みたいくつかの分析。(同じT.E.範囲の対象に對して、PS, DS又は、不一致得点の種類から、PとS両群のいずれに属するかを弁別しようとするもの)結果などからも具体的に示されている。この

標にして、結局、 $\text{R} \cdot \text{テスト}$ は 3 群を、云わば、 $N \xrightarrow{(>)} P \xrightarrow{(>)} S$ と云う形で暗示しうる標な関係にあるものとしてとらえ、地方、自己評価法は 3 群から $N, (=) S \xrightarrow{(>)} P$ とでも暗示すべき各結果を引き出し、これに対して、両方法を相補的に用いて行った総合的な分析からは云わば、 $N \xrightarrow{S} P$ とでも示さるべき各特徴的な結果が得られたことになり、一方のテスト法のみでは不鮮明であつた群差が一層明らかにされたと云えよう。そして又、この標に両結果を対応させることにより、各テスト結果の意味が初めて或いはより一層深く理解されるものと考えらるが、次にはこの桌も含めて、各群が示した結果の意味を、 中ノ編 で行つた理論的研究に基づき考察したい。

「自我」と「現象的自己」との関係については、両者の形成、構造、機能の3つの面から考察し、この両者間には、本来、人格の統合を志向する非常に密接な関係が存在することを認めたい。(中ノ編 中ノ4章) 即ち、自我は、

一次的自律装置及びその機能に加えて二次的
 自律の機能（環境の現実的要請，超自我の要
 請，本能的衝動の活動と云うる者の葛藤を能
 動的に解決し，それによって生成されるこ
 の変容された派生衝動を動因とする自律的
 適応機能）を形成しその組織である「葛藤外の
 自我領域」を一つの層的構造をなすものとし
 て築いて行きながら，それ自身の姿を「自己
 映像」に反映させて行く。換言すれば，自我は
 自ら主体として機能しつつ，その「機能する
 自分自身」を客体視する（自分自身を認知す
 る内省的自覚の機能）と云う二重の働きを行
 うことによって現象的自己を生成せしめるわ
 けであり，このことから，どの様な「自己」
 が生成せしめられるか，それは自我機能その
 ものにかかっている即ち，現象的自己は，そ
 の組織を築き機能を発展させて来た自我の現
 役階までの到達点をそのまゝ反映すると考え
 られる。だが，「自己」は単に「自我」の映
 像であるにとどまるものではない。「自己」

は「自我」にとって、他の派生衝動と同じく
 しかしそれ等の中では中性化・社会化の度が
 最も高いと考えられる自律的動因としての役
 割を担う。即ち、「自我」は「自己」を自らの
 鏡映像として見ることにより、その機能を整
 え、個人の存在（生物・心理・社会的な）を
 維持発展させようとすることが考えられる。
 「自我」は自らの生物・心理・社会的発達過
 程を通じ、それを反映させた「自己」という
 意識的客体を生成し、そしてこの「自己」が
 「自我」からより高次の（自律的諸機能以上
 の）機能をひき出しそれに加担する役割をと
 ることになる。ここで「高次の」と称した重
 要な機能、本来、「自我」と「自己」とがた
 ばいに表裏一体的な密接な関係の下につかさ
 ねる機能を「統合機能」と名づけ、本研究で
 はこれを一応次の標に定義した。即ち、対象
 関係と精神内界への統制的疎通とを単一的に
 行いつつ、生物-心理学的な個性を、主観的
 ならびに客観的に社会からは認められた形で持

統一的に発現せしめて行く機能がそれである。
 自我が現象的自己を生成するその二と自体の
 中に、本来、適応的統合への志向が既に含ま
 れてゐるとも考えられる。かゝる統合機能が
 人格の適応と最も重要な関係を有するであら
 うことを考察し、そしてこの統合機能を規定
 する条件を論究して(第1編第4章[4])内・外
 両枠組から「自我」と「自己」をテストし、それ等を綜
 合して、この条件を検討し、適応における統
 合機能の重要性を実証したわけである。

そこで、この統合機能の観点から、各群にお
 ける上記の結果を考察すれば以下の様になる
 。

1) 正常者群

自我の自律機能全般にわたる健全度が最も高
 く、これは諸側面の機能が口・テスト解釈論
 からみて望ましい形で発現してゐることに裏
 づけられたものである。又他方、そうした自
 我機能の意識的客体比も、3群中最も正確に
 なされており、現象的自己は、外的枠組から

とらえられた自我の諸機能も、"ずれ"の少ない形で反映している。そして更に、この「自己」は内在化された価値基準により是認されている度合の高いものであり、理想的自己像(才1編才3章108頁以降に述べた"自我理想"の意味合いを担うものと考えられる。)と対矛盾を強くはうんたものであるよりはむしろ、これとより調和的であり、現実のありのままの「自己」がともかく受け容れられようとする傾向にあることがうかがわれる。不満感の強い貶価的な自己評価下りも、現実の「自己」を尊重し肯定的に価値づけようとする自己態度を有するであろうことが、才3部の結果でも読みとられうる。これ等は、上述した適応的統合機能を遂行する上で、「自我」側及び「自己」側に各必要な条件として考えたものを全体的に満たすことになり、こうした「自我」と「自己」であってこそ、前者が後者を自らの拠り所とし又積極的な指針として、生物・心理・社会的存在としての個人

の可能性を統合的に発現させる方向に、より
 十全に機能する二とが期待されるわけである
 。もっとも、本研究では、二の正常者群¹⁵²⁾を
 所謂“最適の人格”(optimal personality)を意味
 するものとして設定したわけではなく、神経
 症、分裂病を加えた三群は、本研究全体を通
 じての、適応差に関する最も基礎的な基準が
 自明なものとして扱っているが、これ等は、最
 も現実的な意味でのある適応差を代表するも
 のとして選ばれたわけであり、絶対的により
 は相対的な適応の違いを示すものと考えてい
 る。従って、正常者群のテスト結果も、当然
 “最適”を意味するものではない。それ故、
 第二部で見られたと二つの、自由に能動的か
 つ統制を失わない対象関係及び対精神内界と
 の自由に統制のある疎通的關係、衝動防衛の
 適応的成功、自然な情緒の動きの内的自覚と
 自由な情緒反応、正確な現実検討力、精神機
 能全体の豊かさ・活潑さ等、自我心理学的に
 見た、一次的及び二次的な自律的自我組織の

発達とその機能の健全性，そしてこの結果に基づいて見られた，「自己」の客観性，肯定的価値づけ，社会的承認の感情の意味も，厳密には，他の不適応な群との比較から相対的に認められたものに他ならない。しかし，³⁶⁾この様な傾向が顕著である程，Eriksonが指摘する様な，心理社会的適応感（well-beingの感情），他人からも承認されているとの感じを抱くことにより安心して前進し個性を発現して行きうる感じ，更には身体的くつろぎをも伴う同一性の感情（identity-feeling）がより多く存在して生じることと思われ，又，自己確実感（self-certainty）の確立されている度合も高いと考えられよう。

2) 神経症群

ここでは，まず自我機能の全般的な健全度そのものが正常者群より劣り，機能の諸側面に関して，口・テスト結果からN群との間にそれ程明瞭な差が認められたわけでもなかったが衝動性への接近，内的制禦等についての

結果から、編 129 頁以降に述べたと二つの、衝動防衛のための反対充当エネルギーの過剰消費とそれに伴う対象充当エネルギー (object cathexis) の減少と云ったエネルギー経済的問題、そしてこれに関連して、結局衝動、現実、超自我内の葛藤が中心問題となり、自由な内的疎通の機能及び活潑な対象関係が障害され現実の断片化 (fragment of reality) が生じると云った神経症的自我障害の特徴はある程度読みとれよう。これは精神機能の全体的な豊かさ、活潑さに関する、又現実吟味に関する、テスト結果によっても裏づけられている。

こうした「自我」から生成される「自己」は「自我」の現状を客体視すると言う意味ではそれほど正確さを欠くものでもなく、S 群に比すればはるかに N 群に似て両者間の「一致度」の高いことが認められたが、たゞそれに終るのではなくこの群独特の傾向が示されていた。即ち、まず、理想的「自己」像との差が極

めて大きい現実的自己の評価がなされ、又他
 方、S群はもとよりN群と比較しても、ロ
 テストでは同じレベルとして示された自我機
 能に対する自己評価がかなり下まわることか
 ら、非常に貶低的に自分自身(の自我機能)
 を客体視しており、しかも内面的な価値基準
 によって是認されない不満な「自己」像が認
 められる。これはN群に見た如く、仮りにP
 群のものと同程度と判断される(外的枠組か
 ら)自我機能であっても、それに二重に
 自己不全感に陥るよりはむしろそれを受容し
 ともかくそれを盛り立てて前進して行こうと
 する態度と対比に、高い内的基準からすれば
 否定的に価値づけざるを得ないものとして(
 或いは逆に不健全性を認めざるを得ない現実
 の自分自身からすれば理想的姿は丁度現実と相
 反するものとして)現実の「自己」を眺め、
 内的基準と隔った不健全そのものに強く二重
 に没入した態度、自己尊重及びともかく前
 進しようとする能動性を忘れた態度を示すも

のと考えられる。こうした不健全性への二だ
わりから来る否定的な意味での自意識の過剰
さ (self-consciousness) は即ち同一性の拡散 (identity diffusion) を意味するものであると Erik-
son³⁶⁾ は述べている。

この標に見れば、「自我」側の全般的な健全
度の低下傾向、「自己」側においてロ・テス
ト結果とのつき合わせにより確認されたとい
うの、自己尊重と(内在化された)社会的価
値基準による破是認感を欠く傾向により、適
応的な統合機能のための条件が十分満されな
いこととなり、この標との関係にある「自我」
と「自己」からはV群ほどの統合的適応を期
待できないであろう。但し、「自己」側の客
観性に関する条件はかなり満たされており、
不健全化した自我を、その不健全性により
二だわりすぎる形でではあるが、「自己」は
一定の正確さを以って反映していると考えら
れる。Freud, S⁶⁰⁾ 及び W. Fenichel, O.³⁹⁾ は神経症が
持つ現実重視の傾向を述べ、これは本来外界

の現実の方を衝動よりも重視することを意味するものであるが、これは現実一般を正しくとらえようとする働きに結びつくものと解される。いすれにしても、この群衆に一人の正確さを持った「自己」が生み出されているということは「自我」自身がこの「自己」を自らの鏡映像として用い、その機能全体を統合的に整えようとする志向性を有していること即ち統合への努力を意味する一面がうかがわれると思う。

しかし、にもかゝらず、この様に不健全性に強くこだわる否定的な自己評価を生ぜしめるものは一体何であろうか。これは第1編の129頁以降及び第2編第1部の総括においても触れたところであるが、自我心理学で述べられるところの、精神エネルギーの自我供給における攻撃的要素と所謂エロスの要素の配分の問題及び超自我と自我理想の形成の問題等が関係づけられると思う。前者は主に *Fredem*³⁷⁾ によって述べられるところであるが、対象愛

及びこの対象愛の基盤となるべき健全な自己愛、精神内界との弾力的な疎通の機能等はエロスの衝動が中性化されて生じたエネルギーによってもたらされるが、これに対して、防衛や自己に対する攻撃的破壊的關係及び親和的感情的な乏しい対象関係などももたらすのを攻撃衝動が中性化されて生じた自我備給 (Ego-cathexis) エネルギーであると考ええる。そして両者の配分を規定するのは自我の一次的自律装置に關係の深い生得的素質及び後天的な自我形成過程にかゝる様々な要因 (significant others との關係のあり方) であるとするが、神経症の場合、いずれにしても結果的には、攻撃的エネルギーの高い配分度から結果されると推察される標症現象を呈する。(衝動防衛の強化、健全な自己愛の欠如等)

又他方、超自我の問題は、一般に論じられるところであるが、⁽¹⁰²⁾ 神経症では、森田氏の神経症理論では体質的素質をも考えようとするが、超自我が強く(きびしく)形成されすぎて

いると云われる。そのため、自我は衝動と
 現実との葛藤をより多く経験させられること
 になり又超自我の強い懲罰性は、たびたび生じた
 葛藤状況から自我が抜け出るのを遅らせこれ
 を長くさせる。従ってⅣ群の場合の標に比較
 的早期にこの葛藤から自由になり、防衛に成
 功して自律的適応機能に転じて行くことが困
 難となり自我形成はそれだけ妨げられる。そ
 の結果やはりⅣ群の標に‘重要な他者’との同一
 視を次々と能動的に試みそれ等を取捨選択し
 て自由に統合して行くことにより形成され
 る自我同調的な(ego-syntonic)性格を担った“
 自我理想”は、この標に自律度の低い不自由
 な自我と‘盲目的’な道徳性を強い罪悪感をも
 たらしやすい超自我のために、その形成が障
 害され、自我は健全な意味で自らの目標とし
 その形成を推進してくれるべき自我理想を持
 つことが困難となる。それ故、神経症の場合
 、本研究で調べた「理想的自己」の中には原
 初的な懲罰的性質、即ち超自我的要素が少な

り投影されていると考えられ、逆にN群の場合には、超自我への耐忍性を相対的な意味でより多く備えた自我を基盤として形成され又自我の成長発展に加担するところの自我理想的性質を多く有していると考えられる。

神経症における貶低的な自己評価のあり方には以上の様な事柄がかなり関連づけられると思う。

3) 分裂病群

自我の自律的機能は各側面においてかなり障害(或いは発達が阻止)されているとみなされ、対象関係の能動的活潑さ、精神内界の無意識的衝動面の統制とそれへの弾力的親和性、情緒の内的自覚及び分化した豊かな情緒反応、一次的及び二次的自我組織全体の豊かな調和的発達と活潑な全体的機能、現実検討力の適正さ等いずれをとっても非常に低下し弱化していることがうかがわれる。従ってこれらの一を総和した機能全般の健全度は3群中目立って低い。他方、この様な「自我」

から生成せしめられたはずの「自己」は、それのみを見るかぎりN群と似通った形で一見内在的価値基準によって是認された自己尊重的に肯定視されたものであるかの様な相を示したが、上記の様な結果を示した「自我」と対比させれば、かゝる自我の不健全性を強くと意識的に客体化していいない、云わば現実の自我から遊離したばかりの不正確なものであった。従って、外的枠組から客観的に把握された自我機能のレベルに比し極端に肯定的な方向に「ずれ」た自己評価を示したわけであるが、それは強くと一貫して間違いない（質問項目の配置も、「でたらめな反応」をチェックしうる配慮工夫して行なったが、このチェックに該当しない。）肯定的な「現実」評価と、これと強くと隔たりのない云わば未分化な「理想」評価によって特徴づけられるものであったが従ってこれはN群とほぼ同相であり、自己心理学的には望ましい「自己」のあり方を、N群が自分自身との関係づけと云う

課題もどの杯に果そうとしたかは別として、
 本質向紙で述べたことにはなる。

ではこの杯な「自己」はどの杯にして生成せ
 しめられるのであろうか。

中性化された自我備給のエネルギーが非常に
 貧困化し、精神内界の無意識的衝動面との関
 係では防衛が弱化し衝動の侵入に対して主体
 的な対策を構えることができず、他方対象関
 係でも所謂「現実との生きた接触」の喪失即
 ち対象喪失と Hartmann⁸⁰⁾等が述べるところの現
 象を結果し、現実吟味も障害されている自我
 機能がこの杯な「自己」を生ぜしめているこ
 との意味が問題となって来る。Fenichel³⁹⁾は衝
 動に従い現実を放棄しそして次の段階として
 は失われた現実に代る「にせの現実」(false
 realities)を形成するのを分裂病の特徴と述べ
 ており、これは Hartmann や Federn³⁷⁾等も指摘
 するとところであるが、本質向紙にあらわされ
 た「現象的自己」像も一つの「にせの現実」
 に他ならないであろう。分裂病の場合、オ/

編第8章で述べたと二つの Baughman や Combs
等が指摘する社会的望ましさ (social desirability) を配慮して意識的に「自己」報告を歪めることは、神経症の場合よりもずっと予想できにくい。それは上記の様に自我機能そのものが弱化し崩壊傾向を有しているところから容易に察せられようが、とむかく自己防衛的な意味合いは少なく (無意識的な防衛機制を侵襲しようとしても分裂病の場合には反動形成や合理化等高等な機制を働かせることは不可能だとされており、Hartmann 等が指摘するところであるが、拒否や投影等のごく幼児的な未分化な機制が選ばれるに過ぎないと考えられている。)、結局は快感原則に従って活動すると二つのエスの侵襲を予防し得ない脆弱化し又断片化した自我機能の所産と考えざるを得ない。即ち、分裂病の自我は全体として機能の低下度が著しいわけであるが、
Hartmann⁸⁰⁾, ³²⁾Freud¹⁴⁾, ¹²⁹⁾Beres, Rapaport 等が述べる様にすべての機能が一律に低下するので

なく、非常に不均衡な形をとると考えられており、一次的自律の自我装置はその中でも比較的揃われにくい傾向にあるとされている。

分裂病群でも、本対象の選択にあたって既に統制したところであるが、知能そのものに特に他の二群から劣るところがないのも、これに関連づけられる一つの事実であろう。そしてこの標に知的能力そのものに欠陥がないにも拘らず、思考全般には、観念と対象との識別力の障害、言葉の記号性や代理性の消失、言葉そのものが物化し抽象的思考が不能となる等の障害が生じることをやはり Hartmann, Fiedern 等は指摘するが、これは自我機能の断片化を具体的に示すものである。

以上の標な自我における問題から、かゝる自我は外的現実を放棄（或いは未分化な原初的防衛機制である⁴⁶⁾ '拒否'の作用によって現実を拒否してしまふ）すると同時に内的現実をも放棄することになり自分自身と自覚的なかゝり方をして自らを正確に客体視しに鏡映像と

しての「自己」を生成する力きを放棄すると考えられる。現実喪失は同時に云わば自己喪失であり、高く肯定的に価値づけられた形の「現象的自己」は、経って、自己と云う一つの内的乃至は主体的現実とのか、わりを通じてそれとの疎通の下にそして又それを負肉紙を介して一た他者に疎通させようとする意図の下に表現されたものであるよりは、部分的には有効な機能を保持している断片化した自我が、現実原則よりも主に快感原則に経いたがら、失われた現実にかわるところの“にせの現実”として生成せしめたものと考えらるべきかと思う。この“にせの現実”なるものが何のために生成されるのか、又これが分裂症者を何らかの意味で助ける積極的な意味を持ちうるかどうかと云ったところは精神病理学的にも未だ十分説明されない問題でもあり、教育心理学の領域をや、遡脱するものであるかも知れない。

しかし、とにかく、本研究の結果からは、非

常に低下した自我機能と、それとは全く遊離した形の「自己」とが認められ、この様な自我が、こうした「自己」を生成する意味については以上に考察を試みたわけであるが、逆にこの様な「自己」は本研究における理論的考察からすれば、自我にとり適応的統合機能のための指針乃至は現実的なより所となる意味を全く有していないと考えられる。自我にとって「自己」は正に遊離した“にせの現実”であるにすぎないであろう。この事は具体的にテスト場面での被験者の「理想的自己」の評価態度においても認められた。即ちこの群の被験者は大へん真面目にだが溜々とした他人事の様な態度で値内紙への記入を行って行ったが、たゞ殆んどこの被験者が「理想的自己」を区別して評価する意味を納得できない様子を示し、“その評価は序でにやうされている”以上の何者でもなかった様であり、
 ‘現実’と‘理想’の両自己間の未分化さはIV群よりも低いDS値によっても示されているが、

この様な被験者の態度は、「に世の現実」と更に2つに区別させようとする無意味な要求に対する反応を意味するものである。

こうした態度においてS群はP群と対照的であり、この様な「自己」(正確には「自己」像でもない)を生ぜしめている自我自体が統合的な適応への志向及び努力をすでに放棄してしていると考えるを得ない。

以上、右群における「自我」と「現象的自己」の関係が意味するところを適応的統合機能の観点より考察したが、結局この観測において右群の適応差が最も的確にとらえることがわかる。

外的枠組から「自我機能」の全般的な自律的健全性を測定する方法、及び内的枠組から「現象的自己」のあり方を一貫した質問紙への応答型としてとらえる方法を累積的研究によって得、更にこの2つの方法を相補的、総合的に用いることによって、「現象的自己」

に關する結果そのものが有する意味、及び、「自我」との關係において有する、適応的統合機能の觀察からの意味が明らかり、これによつて各群の適応差がよりよく理解された。

本研究における諸仮説は裏証され、問題矣が一応説明されて、本研究の全体的な目的は果されたことになる。

あとがき (要約と今後の課題)

本研究では、主体的な「自我機能」と「現象的自己」と云う二つの枠組を総合的に用いて人格適応も理論的実証的に研究しようとした。

理論的研究編では、本研究でとり扱うこれ等二つの概念について各々詳しい理論的考察を行うと共に、両者の基本的区別を明確化した上で、両者の関係を、それ等の形成、構造(組織)、機能の面から考察することを試みた。このためには自己心理学の知見のみならずそれよりもむしろ、自我心理学に因するより詳しい理解が必要と思われたので自我心理学の発展過程を概略的にたどりながら、その中心課題である「自我」概念の発展的な変遷をFreud, S.以来の流れに従って追求したが、結局、これ等二つの心理学の最近に至る動向そのもののの中に、主体的な機能過程である自我

と、こうした主体的機能及び個体の様々な存在全体が意識的に客体化されたものであるところの「自己」とは互に密接不離な関係にありその関係が無視され得ないものであることを示唆するものがあるのを認めた。そして結局、両者の関係は、「自我」が自らの機能により生成せしめた「自己」を指針として適応的統合機能（対象関係、対精神内界との関係を自由にかつ統制された形で単一化して行いつつ、生物・心理学的な個性を主観的ならびに客観的に社会から是認された形で持続的に発現せしめて行く機能^{を言うこと}）_へにあることが認められた。即ち「自我」はその様々な自律的諸機能の形成過程を通じて、自らの鏡映像とも云うべき「自己」を形成して行き、その中に「自己」を生成せしめること自体の中に適応的統合への志向性が含まれていると考えられるが、生成された「自己」そのものは純ってその段階までの「自我」の発展的な到達点とそのまゝ反映しており、これ自体が統合機能

にとつての不可欠な動因でもあり、又この機能
を規定する意味を担っていると考えた。
この標本、「自我」と「自己」との関係づけ
に基づく統合機能の観念を実証的研究に導入
し、外的枠組より「自我」の全般的な自律機
能をテストする方法と、内的枠組より「現象
的自己」のあり方を試べる方法を累積的研究
によつて確立し、二種類の資料を累積するこ
ともまず試みた。これは、殆んどすべて正常
者群、神経症群、精神分裂病群と云う三群の
適応度も異にする対象につき、各テスト法が
どの標に適応差を反映しうるかを、自我心理
学及び自己心理学に基づいて立てた仮説検証
の形で実験し分析したが、その結果、一応仮説
に依つた一貫した反応型も各群が示すことを
認め、又結果的にその標本各群の特徴をとら
える方法が得られた。但し、あくまでも一
定の反応型が両枠組のテストから夫々得られ
たと云うにすぎず、それ等の結果は、実験仮
説に反するものではないにしても、それ等の

反応型の意味は明らかでなく（殊に「自己」に関する結果はそうであった）、又適応差を十分明確に反映するものでもなかった。

そこで次の段階として、上記の適応的統合機能のあり方を検討しうる標本形で、2つの枠組のテストを相補的総合的に使用する方法を考え、その方法の下に得られた「自我」に関する資料及び「自己」に関する資料の関係を、統合機能を遂行するに必要と思われる条件に関して立てた仮説に基づいて検討した結果、適応度を異にする3群間にはその条件の充足の仕方に各々違いのある、特徴的な「自我」-「自己」関係が認められ、この標にしてとらえられた統合機能の違いは、これまでの平行的に累積していった「自我」及び「自己」の両資料が有する各々の意味を明らかにすると共に、適応差をよりの確に又敏感に反映することになった。以上、診断と治療の両方を含み理論的及び実践的な臨床心理学実験から私自身が必要性を感じた^{と=3の}外的枠組及び内的

枠組から個人を理解しようとする方法を、最初は、専ら比較的なじみの深いロ・テストと「現象的自己」とをとりえるための自己評価法とを併用することから出発したが、実践的実験及び理論的研究を重ねることによって、適応的統合機能の観点から両方法を総合的に用いる方法を考えるに至り、そのためロ・テスト分析法と自己評価をとりえる質問紙法はより確かな方法として得ることができ、又総合的使用の有用性を確かめることもできた。今後に残された問題としては、右テスト法をより組織化すると共に、更に多くの又多種類の対象について行うこと又神経症等については治療的変化をとりえる形の実験を行うことにより、たに単に群差をテストするのみならず具体的な個人を力動的に理解するための有効な方法としうるようもっと研究を深め発展させることを考えている。